

エピローグとなった「序説」への研究序説

「『スターリン問題研究序説』と七〇年代後期の思潮」

加藤哲郎

(早稲田大学大学院政治学研究科客員教授・一橋大学名誉教授)

● 聞き手 ● 岩間優希 (中部大学講師)

影浦順子 (中部大学講師)

小島 亮 (本誌編集長)



● 誌上討論 ●

佐々木 洋 (札幌学院大学名誉教授) 藤井一行 (富山大学名誉教授) 中野徹三 (札幌学院大学名誉教授)

小島 本日は、われわれが行っている七〇年代の再検討という共同研究の一環として、加藤先生にインタビューさせていただきたいと思います。まず、どうして今回のような催しを考えたかという趣旨説明をさせていただきます。

七〇年代に対するイメージというのは、まだ学問的にはつきりしていないと思います。六〇年代はかなり研究も盛んになりましたし、多様な展望といましようか、学問的な評価も定まってきた感があります。八〇年代以降は、七〇年代との断絶の明瞭性ゆえに何となく自明であるような風潮があるのですが、対称軸になっている七〇年代については評価は定まってはいません。これからなされるだろうとは思いますが、まだ議論の中心にはなっていない現状があります。

ところが、七〇年代というのは極めて興味深い時期だと思えます。日本の社会構造が、六〇年代を通じて思い切った激変したわけですね。六〇年代の終わりがら、社会思想の領域でも大きな変動を起し、六〇年代に起こった新しい社会思想の先駆的な動向というのは、その後、七〇年代に受け継がれているというよりは、むしろ七〇年代を飛び

越えて八〇年代に出現します。すなわち全共闘世代を担い手とするポストモダン主義の形で現れるわけです。この八〇年代が「制度的近代」と呼んで徹底的に否定し嘲笑した当の相手こそ七〇年代の主要思潮であったわけですが、七〇年代は六〇年代の支配的思想なり制度的暴力なりが情性で継続していたわけでもなかった。ある意味では六〇年代の否定的展開でもあったわけです。

七〇年代の特徴について政治と思想に限りますと、これは同時代人としては当たり前なものですけれども、体制内の革新みたいなものの意想外の再編によって特徴づけられます。六〇年代末期のラディカリズムの内在的矛盾や弱点を背景にして、体制内の革新、具体的には共産党や社会党は戦後直後の混乱を除けばはじめて強大な勢力に化けました。一種の、革命幻想に近い社会改革に対する大きな展望が七〇年代を通じて現れ、少なくとも七〇年代の中期ぐらいまで継続したのです。これをユーフォリアと言うならばバリエードに象徴された六〇年代末期のそれと異なり、選挙戦を道具にした別種のユーフォリアではあったわけですね。六〇年代末期のラディカリズムは体制内の革新を全否定しますが、七〇年代の革

命幻想は「虚偽」とばかりは論断できないのではないでしょうか。戦後体制を形成していた勢力からすれば、もしかしたら七〇年代の体制内の革新による革命幻想の方が本物の恐怖でなかったでしょうか。実際に共産党の大躍進といわゆる革新自治体の発展を背景にして自民党は根本的な引き締めを行い、厳密な意味での近代政党に脱皮しようとする模索も始めるわけですね。大衆的人気を革新から奪取して田中角栄は政権を担うのですが、金脈問題による動揺を受けて新自由クラブが創設されたように、保守陣営も新しい模索を開始し、日本の政治界に深刻なイデオロギー的対立がほぼはじめて生じたことと評されたのです。こつちは言うまでもなく中途半端に終わってしまいうけですけれども。日本共産党の党勢が格段に大きくなって、一時期、衆議院議員が三八議席ぐらゐを占めるという、およそ考えられない事態も起こるわけですね。社会党とうまく連合すれば人民戦線の政権、当時の共産党サイドの表現では民主連合政権のような選択肢も実現可能だと思われた瞬間すらありました。これは「敗北」したはずの六〇年代の次の時代に惹起した出来事であったことを真剣に検討してもいい時期かもしれない

ません。

六〇年代末のラディカルズの徹底的罵倒にもかかわらず、戦後民主主義を担った制度的知識人も七〇年代にゾンビのように復活するのです。マスコミとか、学界とか、あらゆる領域において再び大きな力を持ちます。六〇年代のある時期までは体制的保守勢力の思想的表現は不明瞭で、「なんとなくクリスタル」だったのは革新勢力でして、現実の政治体制をも包み込んだ「空気」として戦後革新があったのに対して、七〇年代のそれは「選択肢としての戦後革新」としての色合いは明瞭であつたことでしょうか。さらに戦後革新も「六〇年代ラディカルズム」を踏み絵として諾否を問われる形になり、「否」を選択した方が七〇年代の制度的革新の主流を形成するといった捻じれた状況も見取れます。こうした中で、具体的には丸山学派みたいなものがまだまだ大きな権威を持って、社会思想の共通枠組として自明であつた時期の最後だと考えることができるんです。いずれにしても、戦後の体制的革新による可能性があり得た最後の機会が七〇年代中期ぐらいに現れたわけので、この事実そのものはたゞいま現在のところほとんど忘れ去られてしまつています。

この時期は、理論的にはチェコ事件の思想的衝撃を受けた諸潮流のうち、いわゆるユーロコミュニズムというのが花盛りで、ヨーロッパの共産党のうち、イタリア共産党とフランス共産党の動向が世界的に注目されていました。イタリアの共産党は、グラムシ以来、ボルシェヴィキズムとは根本的に相違する変革路線をほぼ一貫して追求して来ました。具体的に政策的に鮮明な路線としたのはスターリン批判直後の一九五六年、有名なトリアッチの「社会主義へのイタリアの道」でした。イタリアはただでさえ異端の臭いは漂つていたわけですが、ベルリンゲル書記長時代の七年になると「歴史的妥協」と称して保守政党との政策的協調すら標榜します。ところがクレムリンの長女とか罵倒されていたフランス共産党が、七二年にマルシェ書記長就任以降、突如柔軟路線に転換し仲の悪かったフランス社会党と共同政府綱領を作成、ミッテランを候補者に擁して左翼連合政権を樹立する一歩手前まで来ます。もう一つ劇的だったのはスペイン共産党です。フランコ体制下ですつと非合法だったこの党は七七年に合法化されるや党綱領からマルクスレーニン主義を除去し、カリリョ書記長の采配で既存の民主

主義体制を再評価します。かくてイタリア、フランス、スペインと老舗のヨーロッパ大国の大きな共産党がそろつてマルクスレーニン主義の放棄と既存体制の再認を行い、ユーロコミュニズムと呼ばれる所以となつたわけです。日本の場合、イタリア共産党の影響を受けて六〇年代はじめに構造改革論が登場したのですが、共産党から徹底的に排除されていきました。このグループは社会党の江田派とも共鳴して独自の発展をし、のちに第二次『現代の理論』を拠点にしてグラムシ研究や社会主義的市民社会論を展開し、マルクスもこの視点で再読かつ相対化してゆきます。今から考えればユーロコミュニズムの理論的枠組みは本家よりも日本のこのグループによつてより明晰に完成されていたとさえ言えます。しかし政治的に排除された経緯から共産党は蛇蝎のようにこのグループを嫌い、独占資本主義の走狗であるかの罵倒を後年まで続けました。この事実からしますとまことにご都合主義ではあるのですが、あわや政権奪取寸前とさえ思われたユーロコミュニズム勢力の急伸を眺め、日本の共産党は「バスに乗り遅れない」舵きりをしたわけです。これが七三年の一二回大会以降に顕著になる動向で、冒頭

に述べたように、六〇年代末のラディカリズムへの幻滅の上に国民的期待を集めてユーフォリアを惹起させていたわけです。こうして先頃まで共産党文化圏では歓迎されざる扱いをされていたグラムシの解禁から始まってユーロコミュニズム文献が相次いで翻訳出版され、いよいよトロツキーあたりまで復権するか、違ったヴェクトルですが前衛党論を放棄するか、と注目を受ける段階にまで達したわけです。

今日のインタビューの核心に迫るんですけども、結果的に言いますと、体制内革新、とりわけ共産党的左翼といましようか、既成の日本マルクス主義というのは、自己革新に失敗したわけですね。七〇年代後半になると国会の議席は失っていくし、社会思想としても急激に魅力が喪失し、「革命幻想」はかなり根深い幻滅にとって代わります。この過程で、逆に戦後社会の大きな問題を新しい観点で捉えるという部分にいち早く成功してしまったのが保守陣営で、六〇年代も七〇年代も一緒になって崩壊し去って八〇年代は保守の時代に突入します。この時、意想外な前衛部隊となったのは六〇年代末のラディカルズすなわちポストモダニストたちでした。再

認されたラディカリズムは多くの場合、結果的には体制・反体制もろものラディカリズムの墓碑銘を唐様ならぬフランス語で書き刻むことになります。彼らによって日本近代は「脱」せられませんでした。戦後の近代を支えていた思想は「脱」したことは紛れもない事実です。ただしフランスを含むヨーロッパと異なり、「脱」した後に体制的保守が別種の亡霊として墓から登場する皮肉な事態はなってしまうのですけれども。

例えば大平政権が「近代の超克」なんていうことを言い始め、八〇年代になったら中曽根政権が出てきて「戦後の総決算」を政策課題化し、六〇〇七〇年代の二派のラディカリズムを一切合財体制的保守が上手に把握してしまった結果、戦後革新総体の存在意義であった社会的空間は、ずるずると八〇年代を通じて社会から消滅していくんですね。気が付いてみたら、一応ないわけではなかった日本社会の戦後の多元的な可能性が、八〇年代の真ん中ぐらいいなくなりました。さらに冷戦崩壊とともに、今日に至る極めて狭隘な社会的空間みたいなものが日本社会に出現したと思うのです。明らかに攻撃側であった戦後革新の方に「こんな日本に誰がした」

責任はあります。私ばかりしゃべって申し訳ありませんけれど、個人的にずっとこのように思い続けているんです。

この観点に立った場合、戦後革新が自滅の方向に舵を取る時期のミクロ分析は七〇年代中期の遅くない時期に焦点を当てるべきではないかな、と考えつつあります。ここにいる岩間、影浦両君と田口富久治・諏訪兼位先生にインタビューをして作成した『伽藍が赤かったとき』と題するブックレットもそうした問題関心からまとめました。まさにこの時期に体制的革新の可能性を示し、同時に挫折の証明ともなるようなアイコンを探し求めると、一九七七年一月一日に大月書店から刊行された『スターリン問題研究序説』（以下『序説』と略称）という書物の存在に突き当たりました。実を言いますと、学生時代に私は現在進行形でこの書物の影響を大きく受けました。小室直樹の『ソビエト帝国の崩壊』（光文社、一九八〇年）はその後大いにもてはやされ、今日も言及され続けている書物ですが、ある意味、『序説』もソ連の崩壊、あるいは根本的な変革の必要性を先見的に論究しているながら今日ほぼ完全に忘れ去られているわけです。ソ連型社会主義の神話破壊なら、

すでに一九五〇年代に対馬忠行や黒田寛一が完膚なきまでにやつてのけていますし、トロツキストを自称する思想においては自明すぎて「今さらなんだ」と言われるに相違ありません。しかしながら革新陣営の多数派を形成することができなかった「アウトローとしての新左翼」と異なり、『序説』は体制的革新の立場からするかなり徹底したソ連批判、または「ソ連型既成社会主義」批判に仮託した徹底的な自己批判の書であつたのです。ユーロコムニズム旋風の追い風を受けて革命神話を抱いていた多くの若い世代は、「もしかしら体制的革新」、もつと具体的には共産党、さらに正統派日本マルクス主義は脱皮できかもしれない、と本書を読んで思ったのではないでしょう。

加藤先生が大月書店の編集者として本書に関わられたということを前々から伺つておりまして、編集者という立場からする、この書物への回顧と再検討の糸口みたいなものを伺いたいと思ひ立ちました。しかも加藤先生は、正統派マルクス主義の内部から出発されて、七〇年代のユーロコムニズムの絶頂期にそれをプロモートする編集をされたばかりか、八〇年代以降の革新の一つの選択肢を模索す

る極めて重要な思索者・研究者としても大きなお仕事をなさつた稀有な存在でいらつしやいます。編集者というのは、自分も素人編集をやつて思うんですけれども、結構言論において鍵を握つていまして、いろんなものを組み合わせて世の中に出すという、要するに産婆役をやつてゐるわけですね。加藤先生は産婆役と産婦を驚くべきことに兼務された人物で、文芸評論や広義の文化研究では多くの優れた人物がそうした両刀遣いなのですが、社会科学の世界では加藤先生以外にまずは名前を思い起こすことはできません。

この『序説』は、世の中を変えた本ではなくて、残念ながら変えることに失敗した本だと思ひます。皮肉ながら『序説』は「終章」になつてしまつたわけです。私は、アマゾンの中古品ネットで買い直し、今日のために二回読み直しました。

加藤 うわ、すごい。

小島 この本はものすごく周到な言葉遣い、いわゆる奴隷の言葉を使つて、戦略的に、しかし過激なことが書いてあるんですね。ズバリ言ひますけれども、日本共産党によつて表現されてきた戦後のある革命戦略および革命思想に対する根本的な反省を迫る内容で、私

は同時代の学生としてこれを読んだとき、飛び上がるくらいびつくりしたんですね。多くの読者は同時に田口富久治先生によつて進められていた現代国家の変貌と多元的社会主义の提唱と本書をオーバーラップさせたのではないでしょう。実際に編者の一人となられた藤井一行先生は『現代と思想』などに公表された論文をまとめ『民主集中制と党内民主主義・レーニン時代の歴史的考察』（青木書店、一九七八年）を公刊されたわけです。

私は、共産党の学生運動にはコミットしませんでしたけれども、広い意味で共産党の文化の中にいた人間です。なぜかと言えば単純な理由です。歴史学を専攻してゐたので、制度的に講座派マルクス主義あるいは共産党的なマルクス主義と触れ合ひまして、自然発生的に共産党文化の中に染まつてゐました。共産党の出版物とかを結構一生懸命読んでゐました。それとたぶん私の世代の人間に共通する体験だと思ひますが、六〇年代ラディカリズムは「とんでもない」という感覚です。むしろこの時期の若者として、腐つても保守であるわけはないのです。しかし気分は左翼であり革新であつたとしても、一九七〇年のよど号のハイジャック事件、一九七二年の浅

間山荘事件、極めつけは一九七四年の三菱重工爆破事件などを目前にしまして、さらに新左翼が内ゲバと称して殺し合いをはじめていた日には、間違ってもこれに関与する気など起こりません。やがて社会に目を向けると体制的革新の共産党や社会党などがなぜか頼もしく見え始め、しかも日に日に勢力を増しているわけですね。私個人で言えば、世界観レベルでしつかり左翼、しかも六〇年代末から七〇年代中期にかけての酸鼻な新左翼からフリー、おまけに一応まじめに机の上で取り組んでいる歴史学の基本的ディシプリンでもある、ということとで共産党左翼の文化圏にほとんど抵抗なく参入してしまいました。とは言え学生運動には距離を置きました。なぜなら目前の共産党左翼の学生運動そのものは不毛であると思えず、しかも活動家ほとんどもない知的退廃に蝕まれ、少なくとも思索者の雰囲気はカケラも漂っていないからです。有体に言えば、比較的熱心に読んでいた歴史科学協議会の『歴史評論』など共産党左翼史家の機関誌と現実の学生運動家やたとえば『赤旗』とか『前衛』などの不毛の議論との巨大なギャップに戸惑っていました。この時、ちよつと難解でしたが『現代と思想』の

ような知的に洗練された雑誌に心惹かれ、やがて大月書店のユーロコミュニズム・シリーズに心踊り、ついに『序説』に出会って「わが意を得た」と言うわけなのです。この個人的体験はきつとかなり敷衍できると確信いたします。

ちなみに共産党左翼への早々の現実的拒否は、私の場合、なかなか講座派マルクス主義との離別には直結しませんでした。私個人としてはある時期から廣松渉の大きな影響を受けますが、少なくとも革命論の領域では拒否反応しか起こりませんでした。七〇年代を通じて廣松先生の書かれた革命論で最も広汎に読まれたのは『現代革命論への模索』（盛田書店、一九七〇年）ではなかったでしょう。ところが、この本にはソ連軍の協力を場合によつては日本革命のために求める場合がある、とか書いてあるではありませんか。頭の悪かった私が廣松先生の難渋な議論を掴む糸口は『近代の超克』論』（朝日出版社、一九八〇年）ではじめて得るのですが、『現代革命論への模索』よりはまだ上田耕一郎氏の『先進国革命の理論』（大月書店、一九七三年）の方が説得力が

ありました。

『序説』に話を戻しますと、おそらく多くの読者は同じ熱気を持ってこの本を読んだと思うんですけども、例えばトロツキーに対する見直しとか、あるいはスターリン個人を跳梁させた共産党組織の根源的な内在的批判、すなわち民主集中制批判など言葉を戦略的に選んではいますが、かなり大胆に論じていて、その真意はすぐに理解できました。

この書の線上で公開的な議論が活発になつて、共産党が変われば、もしかしたら既成革新が内部から脱皮する論理をつくり得て、その後の、まずは共産党自体が思い切つて違つた形になるきっかけになる。ゆくゆくは全く



別な戦後政治に対する選択肢を用意するきっかけになったかも知れないとすら思いました。何度も言いますが、きつと同じ思いでこの書を読み、さらに大月書店や青木書店の同時期の出版物に接していた人は決して少なくなかったはずです。

加藤 じゃあ、まず出版の経緯の話からいさましようか。理論の問題はいろいろありますけれども、この『序説』という本は、私人にとつては、大月書店編集部で企画していた一連のスターリン批判、というより現存社会主義批判シリーズの一冊という位置付けです。

私はトロツキーもレーニンもこの段階で疑っていたんですけれども、そういうことはむしろ著者の中野さんや藤井さんに聞いていただければと思います。私はあくまで著作の編集者としての立場から申し上げます。

私は大学を卒業して大月書店という会社に一九七〇年に入ったのですが、当初から外国に行かせてくれるということで入社している。当時、私だけじゃなくて若い編集者を大月書店は社会主義国に派遣していました。

大月書店は、邦訳『マルクス・エンゲルス

全集』、『レーニン全集』を元に経営が成り立っていたのですが、それを新しく組み直さなくちゃいけない時期になっていた。六八年当時の学生運動の指導者、東大とか早稲田とか東京外語大とかの自治委員長クラスを集めまして、ロシア語圏とドイツ語圏に毎年平均一人の編集者を送り出していたのです。人によつては二年というケースもありましたけれども、全部で四人でしょうか、当時送り出している。私はそのうちの一人になります。

ここから企画の問題と関係するんですけども、一応、大月書店というのは、青木書店もそうですけれども、共産党系の著者が多いし、共産党と関係する企画が多いのですが、民間の出版社です。株式会社で、資本家がついて、経営者がいて、労働者がいるという構造になっています。編集労働者一〇人ほどのほかに、広告とか営業、経理とかの労働者がいる普通の会社です。全体で三〇人弱でしょうか。企業としては中小零細ですが、出版社としては中規模なわけです。青木書店も、ほぼ似たような形でした。

経営はどういうふうにして成り立ったかというところ、いろいろ単行本も出していましたけれども、基本的には『マルクス・エンゲルス

全集』、『レーニン全集』を五〇年代から出してきて、これが継続的に、いわば古典として読まれる限りで、ずっと増刷して売り続けることができる資産です。これは当時の共産党の政治路線、政治的影響力ともある程度関係しています。ところが、私が入った七〇年代はじめには、『マルクス・エンゲルス全集』や『レーニン全集』を全巻そろえて読破するという、戦後すぐの時期から六〇年頃まではあつたような読み方が、特に共産党系のほうでは衰退していました。営業の若い人たちから聞くと、若いといつても同年配ですけれども、一番の売れ筋が社会主義協会派、向坂逸郎のところに移りつづつあると言うのですね。

同時に、これは現実の反映です。佐藤内閣期ですので、日本自身が高度経済成長後半に入つて、マルクスやレーニンの理論でそのまま現状が分析できるかが疑問になる。共産党の戦略で言えば、六一年綱領の「従属国」とか「半ば植民地」とかいふことで日本の現実が了解できるのかと疑念が抱かれていた。これは別に共産党系だけじゃない、当時のマルクス経済学や社会科学全般が抱えた問題ですけど、日本の高度経済成長をマルクスやレーニンの言説でどこまで把握できるかが問題

になったわけです。

一番分かりやすいのは、平和革命論ですね。「敵の出方」によつて平和革命かそうでないかが決まるという六一年綱領の規定はあるけれども、六〇年代の末ぐらいになれば、もう選挙と議会を通じてでなければ、先進国革命はあり得ないじゃないかと思われ始めたのです。日本自身が六八年にドイツを追い越して、西側世界第二位のGNPを持つところまで行っている。そんな段階で、日本が従属国で革命戦略が民族解放ということが本来にあり得るだろうか、対米従属ならカナダや西独でも似たようなものではないかという議論が出ていた。

共産党系で言えば帝国主義自立論、かつて社会党が六〇年頃に言っていた議論に近い論調が出ているときに、マルクスの『資本論』、レーニンの『帝国主義論』、ブハーリン、スターリンによつてつくられた「資本主義の全般的危機」という理論枠組が、本当に有効性を持つのだろうか。危機だ危機だと言っている資本主義が、戦後はむしろ飛躍的な成長を遂げている。何より社会主義国に魅力がない。生産力は低く、人工衛星は作れても火をふくテレビが当たり前だ、言論・思想の自由がな

い。そういう問題を解くには、新しい理論的な枠組が必要なんじゃないか。そのときに、単に古典をあてはめて解釈するだけでいいんだろうかというのが、大きく言えば、一つの流れとしてある。

私の場合は、そこからだちにユーロコミニズムというよりは、むしろウオーラステインの世界システム論のほうに向かう。「資本主義対社会主義」を前提にして、資本主義は必ず崩壊する、社会主義は必ずいつかは世界を制覇するという唯物史観の公式的議論に、根本的な違和感を覚えました。全般的危機論とは、階級矛盾と民族矛盾を組み合わせて、資本主義対社会主義、帝国主義対民族解放、それから資本主義の中での資本対賃労働、資本主義国家間競争という「四大矛盾、三大革命勢力」の考え方ですが、そういう枠組みではもう世界が捉えられなくなっていると考えました。

そこから新しい理論が必要だという考え方は、学生運動を経てきた共産党系の若い人たちの中にもいっぱいいるわけです。その一部は、いわゆる新日和見主義に流れていく。けれども私の場合は、学生時代から大月書店勤務の初期の時代は、アントニオ・グラムシに

惹かれていました。それが、共産党の言ういわゆる先進国革命とか、議会を通じての民主的変革という議論にも通じると思っていたわけですね。

大月書店に入つて最初にやった仕事は、『資本論』の文庫版化でした。『マルクス・エンゲルス全集』や『レーニン全集』がいったん完結しますと、今度はそれを文庫にするとか、八巻とか一〇巻の選集にするとか、そういう形で売り直すというのが、大月のそのころの経営手法でした。戦前京大河上肇の弟子である当時の小林直衛社長も、もうそのころは、文庫や選集にして訳し直すだけでは先行きがないと分かっていたまして、もつと大きな展開をしなくちゃいけないと言っていました。

ちょうどそのころ、ソ連のML研と東ドイツのML研が中心になって、新しいMEGAを編纂するプロジェクトが立ち上がったのです。

小島 Marx-Engels-Gesamtausgabe ですね。現在も政治的なサポートを脱して純学術研究に徹した編集を基本に刊行が再編されていて、日本の研究者も何人かご関与なさっておりますね。

加藤 ええ、そうです。要するにマルクス・

エンゲルスの新しい完全版全集、手稿から本格的にもう一度読み直したものを、一三〇巻ぐらいにしてつくる計画があつて、それに向けての準備を、一方で既刊の『マルクス・エンゲルス全集』、『レーニン全集』を出しなからしななければならないというのが、当時の大月の経営陣の考え方で、ソ連や東ドイツに若い社員を派遣する経営方針になっていた。それで、私は東ドイツへ派遣されたわけです。

小島 MEGAを大月書店が取り次ぎみたいな形で日本で売ることを考えていたわけですか。

加藤 というよりも、日本でもう一回、今度は若い人を中心に訳しなおす計画でしょう。それまでの村田陽一とか岡崎次郎中心じゃなくて、それこそ翻訳陣も全部一新して完全な新訳決定版を作る計画だったと思います。

小島 そうですか。MEGAはマルクス、エンゲルスが書いた原文を忠実に史料批判してオリジナルを復元する趣旨でしたので、翻訳はあり得ないと私は考えていました。

加藤 つまり、新MEGAを中心にして日本のマルクス主義を再編成しようという大計画ですね。

小島 MEGAのテキストを原本として、

新しいマルクス、エンゲルスの決定版テキストを日本語でつくるというプロジェクトが始まったわけですね。

加藤 はい。でもこれは、結果的にはつぶれるわけです。私個人は、実はそのとき、社長にイタリアに行きたいと言ったんです。残念ながら、イタリアには受け皿がないから駄目だと言われた。それで私は、当時大月の『マルクス・エンゲルス全集』の底本になっていたMark-Engels-Werkeを出していた東ドイツのディーツ書店の社長が身元引受人になって、東ドイツに行く。事実上大学に通えばいい、あるいは研究をしていればいいという留学を、一年やったわけです。同じようなことを、上智大ロシア語科を出た篠原敏武さんが、モスクワで勉強しましたし、東ドイツには僕

の他にあと二人行きました。

小島 それは、大学に所属してということになるわけですか。例えばソ連ではエム・ゲイ・ウー（モスクワ国立大学）とか。

加藤 ガスト・アスピラントといいます。客員大学院生という扱い。

小島 アスピラントですね。大学院生ですね。

加藤 はい。他の人はベルリン大学とかライ

プツィヒ大学ですけど、私の場合は社会科学研究所でした。

小島 科学アカデミーの研究所ですか。

加藤 いや、もつと高いところですよ。ドイツ社会主義統一党付属の社会科学研究所で、党の理論幹部養成学校です。後にベルリンの壁の崩壊のときにつるし上げられるクルト・ハーガーというイデオロギー幹部がプロフェッサーで、学生四人だけのゼミナールです。それは、東ドイツのイデオロギー幹部養成のための特別クラスで、私は歴史部でドイツ労働運動史を専攻している形になる。これが、大月書店の派遣の仕事なわけです。東ドイツでは大学でも読めない西ドイツの重要文献を批判的にですが読めるとか、一般には禁止されているコピー機が使える環境でした。

それでも、基本的には民間の企業から、いわば会社派遣で東ドイツに送られて、滞在は一年、それからヨーロッパを二カ月ぐらい回ってきました。全部会社から金が出ていたらしいですから、結構いい待遇だったと思います。そういう形で、初めての海外体験をして帰国するわけです。

先ほど言ったように、大月書店は民間企業ですので、労働組合がありました。ちょうど

七〇年代前半ですから、まだ一〇%以上の賃上げがありました。七三、七四年というのは一番賃上げ率が高いと思いますけれども、インフレもすごいんです。二〇%とか三〇%の賃上げが可能だった時期です（出版労連七四年三一・九%）。帰国後、私は出版労連大月書店労組の委員長をやりました。上部団体が出版労連という日本の出版労働者全体を組織する産業別組合ですから、単組の委員長として労連中央委員になりました。その中で私が担当したのが、出版労連社会科学書共闘会議という労連内の分会共闘議長でした。

有斐閣とか岩波書店は大手共闘という別の分会に入っています。あと教科書共闘とか、児童書共闘もあつたか。私たちは社会科学書共闘と言いつつ、大月書店、青木書店、日本評論社、労働旬報社、あと二つぐらいあつたはずですけど、ちょっと名前を思い出せません。それらの労組と一緒に、例えば団体交渉も産業別労働組合ですから、他の会社の団交にわれわれが出掛けて支援したりもしました。それから争議があれば、まとまってそこに出掛けて経営者と交渉するというふうな、普通の労働組合活動をやっているわけです。社会科学書共闘会議ということで、中

小ですけれども、かなり戦闘的でした。一番企業規模が大きいのは日本評論社だったはず。日評労組の委員長は当時林克行さんで、彼は後に編集長、社長になったと思います。単組の委員長は、編集畑の人が多かったですね。春闘の時期には、だいたい週一回会合を持ちます。終わると飲み会になって、それぞれの出版社の出版物についても議論があります。社会科学書共闘会議ですから、日本の社会科学をどうするかということを、編集者同士で話し合う貴重な機会なわけです。

その中で一番意気投合したのが、当時、青木書店労働組合書記長で、社会科学書共闘会議担当であつた西山俊一さんでした。今は窓社の社長をしている西山さんが、当時は雑誌『現代と思想』の編集者でした。これは、田口富久治さんと皆さんの『伽藍が赤かったとき』にも出てきますけれども、斬新な季刊理論雑誌で、西山さんは当時の江口十四一編集長の下で、実質的編集作業をやっていました。私は東ドイツから帰ってきたばかりで、現存社会主義に幻滅し、いろいろ問題を感じてきた。七四年頃に、西山さんと私がいろいろ話している中で、ちょうど『現代と思想』で藤井一行さんや中野徹三さんが執筆者として

活躍し始めた時期に、『序説』の企画になるわけです。

小島 帰国されたのは七三年でしたよね。

加藤 七三年の秋に帰ってきて、七四年から本格的に職場に復帰するのです。組合の委員長は、たぶん七四年春闘からだと思っています。その時期の大月書店は、翻訳中心にやっていた流れがあり、この人は面白いなと思つている日本の理論家でも、雑誌を持っていますから、なかなか登用できません。私のほうから西山さんに、ちょっとこの人を使ってみたらどうだと言ったり、逆に西山さんのほうから、『現代と思想』でこんな座談会をやつてこんな面白い発言があつたとか、ある著者と会つたらこの人が非常にいい研究をしていたというふうな話を情報交換するわけです。

私のほうは、基本的に東ドイツでの生活体験が、圧倒的な重さとしてあるわけです。理論的に言いますと、現存社会主義の内部矛盾を分析できるような理論がなければ、マルクス主義は自滅するという認識です。つまり、マルクス主義の思想・運動・体制のマルクス主義的な分析ができなければ、マルクス主義に将来はないと考えたのです。これは歴史研究だけじゃなくて、理論研究も含むわけです。

さつき「資本主義の全般的危機」という理論枠組の話をしましたけれども、一九一七年のロシア革命から新しい世界史、資本主義の全般的危機と社会主義・共産主義の時代が始まるという観念は、歴史学やマルクス経済学でずっと使われていたもので、日本では講座派だけじゃなくて、労農派の大内力さんの『国家独占資本主義』（東京大学出版会、一九七〇年）などでも使われていた。ですから、一九一七年で世界史が変わった、新しい世界が始まったという話そのものを見直せるような議論が必要であるという問題設定と、それに基づいてどういう社会変革の道があるかについての新たな理論が必要であると、私は考えていた。

前者の歴史のほうは、スターリン主義研究、例えばボツファの『ソ連邦史』（全四巻、坂井信義、大久保昭男訳、一九七九〜八〇年）とか、エレンステンの『スターリン現象の歴史』（大津真作訳、一九七八年）とかで、いくつか組み上げていく。後者の新しい変革の道というのは、田口さんの『先進国革命と多元的社会主義』（一九七八年）もその一つになります。

東ドイツにいたときにはあまり見えなか

ったんですけれども、帰路に西ドイツに行きますと、Das Argument とか Prokla とか、当時、新しいマルクス主義関係の雑誌がいっぱい出ているわけです。それから、イギリスの New Left Review、Capital & Class、アメリカでしたら Monthly Review とか Kapitalistate などが当時でていました。六八年学生運動、プラハの春や中国文化大革命とかがあつて、マルクスやレーニンを引用して権威づけるのとは全然別な新しい理論が、世界的にいろいろ生まれていたわけです。後に西欧マルクス主義、ネオ・マルクス主義と総称されるようなものが誕生していました。

こちらの方は私が随分読んでいましたし、大月書店は外国雑誌をいっぱいとっていましたから、帰国しても月々入ってくる。その新しい論調に基づいて、僕のほうから西山さんに、『現代と思想』でこういうのをやってみたらどうだと提案をしてみました。例えば党組織論とか現存社会主義の支配層ノーマンクラトウーラ、その種の話ですね。それから彼から逆に、例えば哲学の世界ではこういう議論になっているなどと情報を得たりしました。この『序説』を中心に、一連の、先ほど小島さんが七〇年代の左翼の革新、理

論革新と言われたものに関係するような書物というのは、このように、青木書店と大月書店を中心に、出版労連社会科学書共闘会議のなかで準備されていた一面があるのです。

それから大月書店編集部の中にも、私だけじゃなくて、ソ連から帰ってソ連社会の現実をまのあたりに見てきた篠原敏武さんがいました。彼は後にモスクワで知り合ったフィンランド人の女性と結婚して、そのまま移住し、今では国籍も変えてフィンランドに住んでいます。歌手としてCDを出したり、フィンランド語の童話や小説を日本に紹介したりしています。そのソ連帰りの篠原さんが、スターリン主義の批判が必要だと強く主張する。大ざっぱに言うと、編集部にはロシア語担当とドイツ語担当がいたんですが、どちらでも新しいそういう企画が必要だということになりました。『グラムシ全集』の企画も、そのころ出ていました。

私はどちらかというとドイツ語ですが、直接担当したものは、初めが『資本論』の文庫版で、それから平野義太郎の一連の本を担当していました。

小島 『マルクス主義法学』（一九七四年）とかですか。

加藤 はい。レーニン型の変革スタイルとピーク、トレーズ、ディミトロフとかのコミンテルン第七回大会のいわゆる反ファッショ統一戦線型では、何か段階が違ούνじゃないかという意識が、初めはありまして、そちらのほうから、レーニン死後の新しいマルクス主義の流れを紹介しようとなりました。これは後に、ハンガリーのヘゲドゥシュの『社会主義と官僚制』（平泉公雄訳、一九八〇年）などに具体化しました。彼はもともとハンガリー

の一九五六年事件直前の首相ですよね。その後、社会学者になって、まさに社会主義社会をどういう枠組みで分析するかを論じ始めるわけです。

それから、当時ユーゴスラビアに「ブラクシス」グループというのがあり、マルコヴィツチなどが中心で、日本では芝田進午さんの近くにいた岩淵慶一さんなどが紹介していました。実践という概念を中心に、いわゆる弁証法的・史的唯物論を人間学的に組み換えていく。ですからブラクシスなわけですが、これもこれにかつてのルカーチ、コルシユの流れとは別な試みです。

小島 東ドイツのコージングも「実践」概念を基軸にしますが、「ブラクシス」グループ

と期せずして基本に据えた概念だけは似ていますね。

加藤 これは確か『スターリン問題研究序説』で中野さんが使っているブルラツキーの名著、*Sunkamp* から出たマルクス主義の歴史で *Geschichte des Marxismus* でしたか。それから、結局大月の企画では使えなかったのですが、ポーランドのコラコフスキーが *Die Strömungen des Marxismus* という三巻本を出して、これが非常に革新的で刺激的なものでした。このように、マルクス主義でもマルクス、レーニン、スターリン、日本で言えば三二年テーゼの流れとは全然別な流れが現われました。新しいマルクス主義ということで、構造主義的マルクス主義、つまりアルチュセール、プーランザスなどへも注目が始まっていたのです。これは田口さんがいち早く紹介し、私もそのうち展開するようになりしました。それから西ドイツのフランクフルト学派があつて、ハーバーマスの『公共性の構造転換』（細谷貞雄他訳、未来社、一九七三年）やコミュニケーション理論がよくこの時期に日本に入ってくる。

そういうものを踏まえると、共産党系が土台にしてきたマルクス、エンゲルス、レーニ

ン、スターリンというマルクス主義の系譜は、極めて貧しいものになってきた。逸脱といわれるトロツキーとかブハーリンとかも、私にはレーニン亜流に見えました。現存社会主義を批判的に分析できるような歴史理論とその理論枠組というのが、私が大月書店でこのシリーズを考えたときの主要なポイントです。それは私個人というよりも、大月の中の若手の編集者の何人かが関心を共有していました。グラムシをやる人もいるし、科学論もありましたし、コミンテルン第七回大会のほうを基準にしてスターリンと対比するとかもしました。それから、マルクスに帰る場合にも、『マルクス資本論草稿集』（一九八〇〜九四年）が当時出ている。『マルクス・エンゲルス全集』に注解つきで出ている公式のマルクスだけじゃなくて、いろいろな読み方が可能になった。『ドイツ・イデオロギー』ならマルクスとエンゲルスの執筆分担問題がでてる。あとフランス語版『資本論』が大きな意味を持っていました。これは資本論の更訂版といえますか、東ドイツ、ソ連のML研で編集されていたドイツ語版と違う編集と書き込みがマルクス自身によつてなされていた。フランス語版『資本論』をドイツ語版『資本論』

とは別のものとして紹介する邦訳が、当時出たわけです（江夏美千穂・上杉聰彦訳、法政大学出版局、一九七九年）。

ですから、新しい歴史的なもの、理論的なものを、出版企画として追いかけていくことによって、逆にマルクスやレーニンの読み方も変えることができると思いました。読み方を変えることができるような材料を提供できると言うことです。社長がどう考えていたかは知らないけれども、私たち七〇年代初めの、MEGAの新編集、マルクス主義の再構成のために外国に派遣された者たちは、むしろ『マルクス・エンゲルス全集』という枠組みを超えたところで、新しくマルクス主義を考え直す方向に向かったわけです。

ここからは、やや私個人の話とも関係してきます。私個人は、就職前の学生運動の時期からそういう問題意識は持っていたけれども、理論的に依拠していたのは、学生時代から師事していた藤田勇さんの史的唯物論の再構成、『法と経済の一般理論』（日本評論社、一九七四年）でした。特に藤田さんの場合には、ソ連の公式理論であるヴェイシンスキーの主意主義的法理論に対してバシユカーニスを発掘するという、『資本論』の商品交換の論

理から法理論を組み立て直すという志向を持つていらっしやって、それに方法的には引かれていました。

政治学では、田口富久治さんを学生時代から学んでいて、小さな研究会に出たこともあった。当時はちょうど、ベトナム戦争とともに日本国内では革新自治体が大きくなっている時期です。田口さんが「三つの政治舞台」という、国会だけでなく地域自治体を重視し、さらに地域住民運動とか環境運動など市民運動と呼ばれるものとも一緒にやらなくちゃいけない。社共の政党レベルだけじゃない新しい社会運動を含めた理論枠組をつくっていく。初めは藤田さん、田口さん、それから哲学は芝田進午さんでした。東ドイツ留学中に会っていたのも、コージング、ザイデルという、当時の東ドイツの中で生まれてきた革新的な潮流の哲学者たちで、ソ連の弁証法的史的唯物論に対抗して、小島さんも言ったように、これも「実践」を軸にして、マルクス主義哲学を組み直そうとしたグループです。

小島 ええ、コージングなどは『マルクス主義哲学』の教科書を書き直すグループですよ。確か芝田進午氏が『現代のマルクス主義

哲学論争』（青木書店、一九七〇年）で主要な論争文献を訳され、大月からその教科書も翻訳が出版（藤野渉・秋間実訳、一九六九〜七〇年）されていますね。

加藤 はい。私は彼らと個人的にも東ドイツでは会っていた。ただ、彼らはあまりに政治的に慎重で、ナイーブにソ連と対立しているわけではないと弁明する。理論的には、あまり役に立ちませんでした。むしろ東ドイツでは、それよりもずっと若い人たちと意気投合しました。六八年のチェコ事件を経た後ですから、この国を何とかしたいと思っている若い人たちがいっぱいいるわけです。私自身、まだ二五歳でしたが。

一回だけ私の『東欧革命と社会主義』（花伝社、一九九〇年）の「あとがき」に書いたことがありますけれども、FDJ（自由ドイツ青年同盟）といまして、日本で言えば民青の機関誌の編集員がいまして、彼が確信的な反体制とでもいいますか、当時の支配的な体制に対して異議を持っていました。私が資本主義国から来た者の特権で、チェコのプラハの春の資料、イタリア共産党の英語文献などをこっそり渡したりしました。

当の社会主義と称している国で、若い人た

ちは東独にもソ連にも未来はないとはつきり言うわけです。だけど、体制は続いている。その抑圧体制をつくった要因は、歴史的に見なければいけない。こうした問題を分析する理論枠組は、既成のマルクス主義と違うものでなければどうにもならないと考えました。

石堂清倫さんたちの、いわゆる構造改革論の流れも、少し前に出てきていました。イタリア共産党は、世界の共産党の中では一番進んでいるように見えた。例えばグラムシで言えば機動戦から陣地戦へとか、国家と市民社会の概念的組み換えとかという方法論レベルで、ロシア革命を相対化するわけです。ロシア革命は機動戦の時代の革命であって、市民社会が強い西欧社会では別の陣地戦型の闘争が必要であるという議論です。グラムシは二〇年代にこの構想を打ち出していますし、獄中ノートでもっと深めている。しかし、ロシア革命を相対化する、あるいはレーニンを相対化するというレベルにとどまっていけないのか。もっと積極的に、社会主義の概念から根本的に組み直さなくちゃいけないんじゃないかというのが、私の問題意識でした。

それを求めて、最初は藤田先生、田口さん、それから、哲学は芝田進午さんのところへ行

くわけです。私は個人的には芝田さんの『人間性と人格の理論』（青木書店、一九六一年）を、他の日本のマルクス主義に比べれば評価していたものですから、スターリン主義批判をやりたいといって、初めは確か直接の企画上での相談は、芝田さんにしたと思います。

小島 『序説』の原企画のようなのですか。

加藤 いや、一連のシリーズの初めという意味です。先ほど言ったユーゴのプラクシス派の哲学とか、どちらかというと哲学の関係が中心です。

ただ、芝田さんは、当時は非常に慎重なわけです。青木から、『史的唯物論と現代』でしたつけ、哲学の講座が出ていますね？

小島 『講座 史的唯物論と現代』（一九七七～七九年、青木書店）には芝田氏が入っていましたつけ。ちよつと前ですが『講座 マルクス主義入門』（全五巻、一九六九年）ですか。

加藤 でしたか。その中の嶋田豊さんとかは、結局は何だかんだ言って共産党の枠組みを保守する。例えば上田氏や不破氏が先進国革命と言いつせば、それに合ったような議論をつくるというのはうまいんですけれども、そこから飛び出す創造的議論は出てこない。結局、芝田さんに本はつくってもらったけれども、

その中身は、編集者としては意に沿ったものではなかった。『ベトナムと人類解放の思想』（一九七五年）という大月の本です。こっちが一生懸命プランを言ったんですけども、ご本人は別の論集を出してきました。なかなか挑発にのらない。

そこに西山君から、藤井一行さん、中野徹三さんなど東京中心のメインのところから離れたところで理論活動をなさっている研究者がいて、非常にラジカルで面白いということを聞きました。最初はソ連から帰った篠原敏武さんが、中野さんに頼みに行つたはずですが。私は、当時北大にいた岩崎允胤さんと宮原将平さんの『科学的認識の理論』（一九七六年）の編集で出張の口実ができたものですから、岩崎・宮原氏の本の編集で出張した時に、札幌唯研の哲学者たちに会いました。この時期は、芝田さんたちの東京唯物論研究会というのがあって、ほかに唯研が全国にいくつかあった。

中心は中野さんと橋本剛さんだったと思いますけれども、札幌唯研の人たちとお会いし、何とか新しいマルクス主義の出発点になるような本をつくれないうか、こちらの問題意識を率直に述べました。そのときは、エ

レンステンなど翻訳のほうはいくつか進んでいたと思います。ヘゲドウシュは、私が辞めてから本になるんですけども、あれも企画としては相当早いものです。ボツファも進んでいます。それから、コミンテルン第七回大会関係とコミンテルン史を含めて、いくつかのものが進んでいるわけです。田口さんに頼んだのも相当早い時期だろうと思います。そのときは、藤井さんは金沢大学だと思っています。

それで、中野さんを中心にして、札幌唯研で、既成のマルクス・レーニン主義の理論枠組からなかなか抜けられないような人たちに对する問題提起を、何かつくってくれないだろうか、私は提案しました。私の役目はそこまでで、中野さんから、金沢に藤井さんという同志がいるので一緒にという話になる。札幌にもそれ一回きりじゃなくて、西山君とも一緒に行ったかもしれません、中野さんのお宅に泊めてもらったのはもつと後でしょうか。

それから、藤井さんのところは、その頃金沢に行った記憶がないから、たぶん有給休暇でスキーに行くという口実で、信州大学の妙高高原の寮でしたか、実際に昼はスキーをしながら、泊まり込みで、藤井さんと西山俊一

さんと私とで、いろんな企画を話し合った。このスキー合宿は、『序説』のあとも、『現代と思想』が停刊し、西山さんが窓社をおこして『季刊 窓』をつくるまで、何度かおこなわれました。

これらは単発ではなく、ある種のシリーズという認識なものですから、札幌の中野さんたちには藤井さんと一緒に、田口さんには先進国革命、芝田さんは人類解放論、といったように、関連をつけて本にしてゆきました。藤田さんも『社会主義における国家と民主主義』（一九七五年）が当時出ている。藤田さんはご自身の体系的な理論枠組があるから、いくら挑発しても新しいものはなかなか出てこない。それでも歴史に即して論じてもらいました。

小島 当時の学生だった私も藤田先生や芝田さんの議論と大月の白を基調とした新しい装丁で登場したシリーズの理論的相違、または方向の違いは何となく肌で感じ取ることができました。加藤先生は韜晦されるわけですが、そうしますとやはり重要な仕掛人が加藤先生であったとは言えませんか。大きな流れとしては共産党に関係のある出版人で問題は共有されてはいても、加藤先生がおられ

ないとそれを具体化できなかった可能性はありませんか。

加藤 いえ、六八年学生運動世代の理論的問題関心だと思います。比較的若手の研究者も、いろいろ組織していたんです。『序説』の書評を金沢大の海野八尋さんが書いていますが、藤井さんの紹介で、海野さんに経済学関係で何か新しいものを書いてもらおうとしました。他に例えば、大枝秀一さんとルイセンコ論争をやろうとしました。ロシア史の関係では、私は溪内謙さんとか和田春樹さんの仕事とはちょっと距離を取っていたんですが、社会主義経済の関係で何か新しい問題意識を持っている人だったら書いてもらおうつもりで執筆者を探しました。

ただ、京都グループというか、京大の社会主義経済の人たちは硬直した感じでした。大月の編集部にもいろんな人がいて、例えば同じ頃に堀江正規や見田石介の著作集がでていますが、これは私から見れば理論的停滞ないし退行です。でも会社の出版物としては一緒に出さざるを得ないわけです。以上が『序説』が企画に入ってくる編集上の経緯です。執筆者の中野先生、藤井先生、それにいわば企画に巻き込まれた佐々木洋さんには別の企



図や記憶がありうるわけですから、そこは執筆者の皆さんに補足して頂きたいと思います。

小島 立命館は言わずもがな、として京大と大阪市立大学が関西では正統派の拠点でしたね。経済学の内部についてはあまり知りませんが、基礎経済研究所という民間団体があり、池上惇氏などが指導的な役割を果たしていたのではないのでしょうか。この系列は私からしてもさほどの魅力はありませんでした。当時、新日本出版社から多くの本を出していた立命館の山口正之氏などアメリカ社会科学を一応読まれているのですが、批判も教条的で経験的分析から帰納するのではなく、レーニンの片言隻語をもって論証されるわけですから時代を半世紀逆行させたのですね。今思いついた

のですが、この時期に大月から「現代資本主義叢書」が出ていますね。どっちか言えば都市経済の分析などは松下圭一や宮本憲一など共産党文化圏外の研究者によって開拓されて来た重要問題を見つめ直そうという姿勢ですね。私は日本史の学生でしたのでその多くは読みませんでした。それでも山崎隆三編の『両大戦間期の日本資本主義』（上下、一九七八年）は大きな話題になって買って山崎先生の論考などを読みました。大きな話題になった理由の一つは山崎先生にありました。山崎先生は「講座派」の批判的継承のための序説」（大阪市立大学経済研究所『経済学年報』三五号、一九七五年）をお書きになっておられた研究者であつたからです。山崎先生は地主制史研究の手堅い実証を講座派の立場からされていた研究者としての印象しかなかったのですが、この論文でちよつとした英雄になられました。もちろん大学紀要の論文をすぐに知ったわけではありません。中村政則先生の「近代天皇制国家論」に引用してあつて、しかも中村論文の前提になっていたから、すぐに図書館でコピーを取って来て読んだのです。論文と言うよりはエッセイでしたが、講座派の基本的認識に終止符を打ち付けようと

しておられることはよく分かったのです。その山崎先生が主宰される最初の共同研究というので歴史学の若い学生はときめいていたのです。両大戦期の日本資本主義経済がアメリカ資本主義と深い関係を持ち、アメリカ資本がかなり大規模に日本や日本の植民地に投資をしていたということも恥ずかしながらはじめて知りました。

加藤 「現代資本主義叢書」は、大月編集部では私ではなく、河内謙策さんが担当していました。彼は学生時代からの同志で親友で研究仲間ですから、私の問題意識もシリーズの企画も理解し支持してくれていました。ただし私は現存社会主義批判の方を中心に企画しましたが、河内さんは新しい日本資本主義分析が必要だということで、経済学関係の編集を担当していました。彼も私が大月書店を辞めてまもなく退職し、一念発起で弁護士になり、弁護士を中断してアメリカや中国に留学し、いまは弁護士仲間と「平和への結集をめざす市民の風」という市民運動組織をつくつて、革新政党の連合・選挙協力をめざす運動や脱原発運動で活躍しています。河内さんの企画を通じて私も、たとえばいまお話の出た山崎隆三さんや、山崎グループの若手で静岡

大学の山本義彦さんとも、大月時代から交流がありました。

その後の執筆段階での編集上のことについて言えば、私がやったのは、先ほど言ったように外国の雑誌文献が豊富に入っていたので、その執筆者への紹介です。スターリン批判は、当時は国際的には常識で、ユーロコミュニズムの前提でした。例えばイギリス共産党機関誌 *Marxism Today* が一番分かりやすかった。党の重鎮歴史家エリック・ホブズボームらが、どんなロシア革命以来の歴史の見直しをやっている。のちにポスト・マルクス主義を名乗るエルネスト・ラクローウのヘゲモニー論やイタリア共産党内の論争、北欧社会主義のゲラン・セルボーンら、それにもともとイギリス共産党から離れた *New Left Review* の寄稿者らも *Marxism Today* に書いていましたから、ちょうどイギリス共産党の機関誌が、ヨーロッパ左翼のつどう『現代と思想』になったような感じでした。そこにフランスからは、アルチュセールの『共産党のなかでこれ以上続いてはならないこと』（加藤晴久訳、新評論、一九七九年）の冒頭部分が英訳で出ていますし、西ドイツのマルクス主義は初めからスターリン主義なんて関係

ないところから出発しています。後に *New Left Review* のペリー・アンダーソンが『西欧マルクス主義』（中野実訳、新評論、一九七九年）で論じる新しい息吹です。そこで出てくる新しいものを選択して、例えば前衛党論とか党内民主主義論とかという問題についての関連の文献で面白い議論が出てきたら、それを中野さんや藤井さんにお送りする形で、編集者としての援助をやったぐらいです。『序説』の中身は、あくまで著者たちのものです。

これは藤井さん、中野さんの偉いところですけれども、もともと筆が遅いと聞いていたのに、『序説』は意外と早く原稿が完成したのです。それでシリーズ第一弾になった。

この本の後書きに、研究会の話が出てきますね。七五年の末に第二回の研究会を開いて、七七年に刊行されたというので、二年かけて研究会を続けたわけです。七六年夏に出版計画として具体化と書いてありますけれども、その間に何度か、私も札幌に行っていると思います。編集会議で企画が通れば、当然社用で出張出来ますから。でも執筆者の選定、それぞれのテーマ等々は、全部、編者と執筆者集団のほうで決定されました。藤井さんと中

野さんが、地理的には離れているけれども、編集者の私が仲介する形じゃなくて、お二人で直接連絡を取られていました。今回執筆者の一人であつた佐々木洋さんが、私が作つて大月書店の編集会議を通過させたらしい企画書を見つけてくれました。以下のようなもの（一九七六年七月二〇日の編集部案）だったようです。

小島 ちよつとここでいろんなことを、若手も含めて伺いたいと思います。本当に興味深いお話で、山のような質問が出てきましたので、いくつかに絞らせていただきます。このインタビューを読む人に、全く同時代体験を有しない若手世代がいるかもしれませんので、少しばかり注釈的なことを質問させていただきます。陳腐な質問になるかもしれませんが、七〇年代に学生であつた人間として、こんな配置図を勝手に描いていました。いわゆる正統派の日本共産党のマルクス主義は、七〇年代に「科学的社会主義」を標榜するまで「マルクス・レーニン主義」を旗印にしていたわけです。レーニンの革命モデルは『国家と革命』を通常のセンスで読む限り議会制民主主義をサポートする論理は提供していませんので、その片言隻語を強引に読み直

K-6
1976/7/20

付

『スターリン問題研究序説』（編集部案）

1976年

7月20日

＜以下は、7月20日の研究会において、大月書店より出版の概し＞として提案されたものである

- ① 現代日本の民主的変革をめざすたたかいの中で、民主主義と自由をめぐるたたかいは、ひとつの中心的な環をなしている。民主主義と自由をめぐるイデオロギー闘争の中で、現存する社会主義諸国の否定的諸側面をあるがままに直視し、その歴史的根柢にまでさかのぼってその根拠を探究することは、日本の来たるべき民主主義と自由の全面的開花の社会を展望するうえで、きわめて積極的な意味をもちうるものとなる。「スターリン時代」は、その中心的素材である。
- ② 科学的社会主義の理論は「閉じられた体系」ではなく、歴史的に発展し、豊かになってゆく。マルクス・エンゲルス・レーニンの理論自体、そのような生命力をもつものであったが、「スターリン時代」にはこの理論体系を単純化し、生命力を失しとどめる歪曲と科学の「逆流」が生まれ、一時代を特徴づけ、その残滓はなお現在にまで尾を引いている。もちろん、現代の共産主義運動と理論は、「スターリン時代」の限界、誤りを克服する方向で大きく発展してきているが、なおその否定的遺産を自己のものとして対象化し、深く教訓を学ぶ段階にはなっていない。科学的社会主義の自主的・創造的発展のうえで、「スターリン時代」を支えた理論の内在的批判は不可欠のものとなっている。
- ③ 「スターリン時代」の諸問題は、スターリン個人の誤りにつくるものではなないか？ スターリンという個人を歴史の前面においた運動の組織原理、人民大衆一党一国家の社会的編成の問題は、独自に重要な位置をしめている。「肅清」に暴露される民主主義と自由の侵犯の原理を根本的にみきわめることは、現在の日本の運動の発展のためにも、将来の搾取なき「自由の国」を形成してゆくためにも、さけて通れない問題となっている。
- ④ このような大きな課題に対して、国際共産主義運動も、日本の民主運動も、これまで十分自覚的に対処し、科学的研究の対象とすることがなされてきたとはいえず、むしろ、この検討は、良心的な科学者や反共的文筆家たちの外在的批判への弁明にとどまりがちであった。いま、日本と世界の解放運動をいま一歩前進させてゆくうえで、科学的社会主義の理論と運動の側からこの問題を自己批判し、積極的に新しい民主主義と自由の原理を対置することが必要とな、てきているし、また、ないうる条件も生まれてつつある。本書は、そのための出発点とならなければならぬ。

17

1976年7月20日の編集部案（佐々木洋氏提供）

し、不破哲三の「人民的議会主義」のような議論を組み立てました。「敵の出方論」、すなわち例外としての「プロレタリアートの独裁」的事態を留保しながらも基本的には革命Ⅱ社会構成体の移行は一般民主主義を継承した議会制民主主義の枠内でも可能だと言うわけですね。議会制民主主義を徹底追求し、ブルジョアジーやその追従勢力の存在意義がますます縮小する。さらにこの勢力がきちんとルールを守っている限り、現存の体制を肯定的に受け継いで「革命」は可能であると言うわけです。コトバの遊び以上の実践的相違はあるかどうかは疑問ながら、六〇年代の江田ビジョンやそれに続く構造改革派との違いは、この構想をレーニンの革命論の根本的修正と把握するのか、レーニン主義の「現在形」と把握するかの違いですね。いずれにしても、レーニン執着型といいたしうか、マルクス・エンゲルスから始まって、ロシア革命で終わって、レーニン主義みたいなのを金科玉条とするようなマルクス主義の在り方は、基本的に六〇年代ぐらいには、かなり非常識になっていたと思うんですね。ところが、現体制を肯定的に継承し、どこかで「革命」に転化するとして、現体制下で文字通りルール

を革命勢力がきちんと守って多数派を獲得するために、選挙政党になるか利益団体にならざるを得ません。人間は理念的であるのと同じくらい現実的ですので、こうした変化は不可避で、結果的に前者になったのが六〇年代以降の共産党、後者になったのがまさに社会党で、現実から過剰になった理念の部分が、両政党から離脱して行くわけです。その結果、共産党から離脱して行くのが第二次ブント以降の理論的新左翼の系譜を形作るわけで、社会党から離脱するのが『現代の理論』などのいわゆる市民主義的社会主義論の系譜を準備して行き、この二つの流れは微妙に影響も合いますが、七〇年代になるとはつきりと別個のヴェクトルは明瞭になってきます。共産党は前衛党としての組織実態を維持していましたが、全共闘運動の影響を受けながらこれの限界を感じた連中が共産党に望みを託し、共産党もそれがある段階まで抱擁するのですが、「人民的議会主義」の旗印を鮮明にするのと邪魔になるので排除したのが七〇年代初頭のいわゆる新日和見主義批判です。全共闘は組織否定のまさしくポストモダンな論理を当初から実践していましたので、七〇年代にはとくに思想的な結果は見られず、それこ

そ浅田彰が『構造と力』（勁草書房、一九八三年）を引つ提げて登場し「ニューアカ」が席捲するまで鳴りを潜めています。ちなみに浅田彰は私と全く同じ年齢の人で、ドウルーズやガタリの祖述とかばかり言われますが、彼は全共闘世代でなく、全共闘以降の、そして七〇年代の体制的革新の敗退をさらに同時代的に熟慮して「八〇年代以降のエチカ」を書いたのがあの本で、新思想の表明でなく彼からすれば一つ上の世代の墓碑銘を肯定形で書いたものであったはずです。第二次ブント以降の新左翼はこれと系譜的には異なり、私がこのインタビューの冒頭で申し上げました実践的蹉跌に一応の理論的責任を果たす中で、廣松渉という大思想家を生むに至りました。廣松先生の革命理論そのものは絵に描いた餅にしか私には理解できなかったことは先に申しあげましたが、廣松哲学が苦渋の新左翼の内省の上に立ち、関係主義的な存在論やパースンズもかくやと思われる社会システム論のような論理に展開された経緯は実によく理解できます。ついでに言いますと、ポストモダニストの議論の多くは構造主義の範型に収まるのではないかな、と見ていますが、廣松先生の存在論も構造主義と究極的にはどう

違うかわからない部分があり、八〇年代以降の「ニューアカ」と廣松学派が重層して見えるのも理由があると思います。両派ともに東大駒場出身の学歴秀才ばかりですしね。そして後者、すなわち『現代の理論』系列からは正村公宏とか望月清司のような個性的な研究者が生まれてゆきますが、間違いなくその頂点は『市民社会と社会主義』（岩波書店、一九六九年）を書いた平田清明先生です。

加藤 あれは六八年か六九年ですよ。『社会主義と市民社会』（『世界』一九六八年二月号）そして「市民社会と階級独裁」（『世界』一九六九年一月号）ですね。

小島 平田市民社会論の知的影響はものすごくあったのではありませんか。ブルジョア民主主義の再評価と言っても平野義太郎や長谷川正安の憲法学はちよつと全体理論として綻びを持っているような感じがありましたし、マルクス主義の初志を再確認する形で、革命理論を再構成し、読み方によつては「真のマルクス」を歴史の闇の中から蘇生させヨーロッパ社会思想の脈絡の中で位置づけなおしたわけですので、変な言い方ですが、修正主義の誹りを受けず、後ろめたい気持ちなしでブルジョア民主主義に接触できることにな

ってしまつたわけですね。これは立場を超えて大きな影響をもたらし、共産党内部にもあるいは正統派マルクス主義にも激震を及ぼしたのではないのでしょうか。平田先生が今一つ提起されていたブルードンの再認は、幸か不幸か日本の政治運動に担い手はほぼありませんでしたので、こちらの部分は基本的に政治的影響はなく純学術的問題提起として大きな影響を持つたものではありませんか。

加藤 ただ、今おっしゃつたの言え、平田理論に対する対応は、正統派の方では当初懐疑的でした。例えば田口さんも批判（「平田清明氏における「国家」と「市民社会」概念の批判」（『現代と思想』一号、一九七〇年））を書いたりしていますね。正統派の立場に近く、その改革に努めていた人たちから一致して共感を得たわけではなかったと思います。これは改革派ではなく守旧派ですけど、一番すごいのは、見田石介が、佐竹恒有というペンネームで書いた「平田清明氏はマルクスをいかに『発見』するか」（『前衛』一九七〇年二月号）ですね。

小島 はい。林直道氏なんかもそうです。林氏の『フランス語版資本論の研究』（大月書店、一九七五年）などは平田理論の外堀を埋める

仕事とも言えそうですね。

加藤 そうですね。われわれの仲間は、西山君の『現代と思想』を代表格にして、単なる対抗という関係ではなく、新しいものをつくるさいに参考にするという形でした。市民社会論者も何人かは『現代と思想』には登場しているんじゃないでしょうか。平田さんとは後にレギュラシオン理論とポップ・ジェソップを通じて大変親しくなり、一緒に日本の経営研究の本を作つたりしています（『現代市民社会と企業国家』御茶の水書房、一九九四年）。

小島 加藤先生、これは間違っているかも知れませんが、新日本出版社という出版社は、共産党の出版部でありましたよね。

加藤 はい、あれは直営です。労働組合はないですから（笑）。

小島 出版部とは違うとはいえ、大月書店は共産党のコントロールの下に置かれていて、われわれはみんな思っていたんです。というのは、マルクス・エンゲルスの文献を主にしながら共産党に歯向かうような理論家の著作は基本的に出していないんですね。

それから、大月文庫、「国民文庫」は格調高い文庫でしたね。装丁とかは、個人的に大好きでしたよ。あれは興味深い分類法を持つ

ているんですね。若い諸君は知らないと思う

けれども、マルクス・エンゲルスは茶色、レーニンと青、スターリンと毛沢東は緑で、それ以外の現代マルクス主義諸理論が橙でしたね。何か微妙な色分け。原典がマルクス・エンゲルスで、それと青信号の付いているレーニンまではオーケー。ちよつと問題含みが緑。許容できる範囲の新しいのが橙。ついでは大月の白いB5版の箱入りのマルクス主義シリーズの装丁は驚くほど清楚な美人顔で読むほどに襟を糺す心地がしました。

加藤 そうでしたか。五〇年代、六〇年代、あえて大月書店のことで言っておけば、石堂清倫さんが編集者の時代に、上田耕一郎の『戦後革命論争史』（一九五六〜七年）が刊行され、第一次『現代の理論』問題が起こりました。今はあまり言及されなくなつたわけですが、『現代の理論』は一九五九年に五号だけ、大月書店から石堂さんが編集して出ていて、構造改革論を打ち出し、綱領論争のなかで新鮮な問題提起でした。それは弾圧されて出版できなくなつたのです。安東仁兵衛がひき継いで、第二次『現代の理論』になります。

小島 ここにいる影浦君の立命館の卒業論文が「上田・小野論争」をテーマにするもので

した。

影浦 はい。「戦後転換期におけるマルクス主義―上田・小野論争を再検討する」というタイトルで、五〇年代後半に起きた「自立・従属論争」の過程を追いました。この論争を、「転換期におけるマルクス主義」という枠組みのなかで再検討した理由は、旧態依然の講座派マルクス主義の理論的構造が、小野義彦の自立論の登場によつて、マルクス主義内部からも揺さぶられてゆくという点を強調したかつたためです。周知のごとく上田耕一郎は、アメリカ帝国主義の従属を強調することによつて講座派の「二段階革命論」を戦後に継承し、また『伽藍が赤かつたとき』でも述べたように、小野の日本資本主義認識は、自立か従属かの二分法にとどまり、ウォーラス・テインの世界システム論につながるような視点は持ち合わせていませんでした。しかしながらこの論争は、敗戦後の日本の経済構造が根本的に変革する高度成長期とタイアップして起きるなど、経済史的にも面白い位置にあると考えます。今後は、マルクス主義内部にとどまらず戦後の経済史・経済思想の文脈のなかでこの論争の意義を問い直す計画を立てています。

加藤 そうですね。それから大月からは、古

在由重さんらが中心となつた『現代マルクス主義 反省と展望』（全三巻、一九五八年）とか井汲卓一の『国家独占資本主義』（一九五八年）も出している。大月書店に入れば、われわれ編集者は、過去の出版物を全部読めますし、社長から話を聞くことができた。「あのとき、共産党はひどかつたよ」なんていう話が当然出てきます。私たちのやることに妨害や弾圧はあり得るだろうということは、われわれは、ある程度想定している。だけど、先ほど言つたように、『マルクス・エンゲルス全集』、『レーニン全集』が完結したところで、社会主義協会のほうはそれを学習してくれるんですが、共産党はそのころはもう経営的に依存できる状態ではありませんでした。

これは、宮本顕治、上田・不破兄弟のラインだと思えますけれども、マルクス・エンゲルス、レーニンだけでなく、六一年に新綱領を採択して以降、宮本顕治『日本革命の展望』など、まずは日本の党幹部のものが必読学習指定文献という形になってきます。自分たちの書いたものを、自前で出し始めるわけです。新日本出版社を作るのは一九五七年でした。もちろん大月書店も、不破哲三や上

田耕一郎など共産党幹部の本も出してはいま

すが、あくまで独立した企業体で、共産党出版局や新日本出版社と狭い読者市場で競合する関係にあつたのです。マルクス、エンゲルス、レーニンの訳し直し、文庫版とか選集とかという形は、経営的に見れば先細りですね。

それで、先ほどの新MEGAという話になるわけですけれど、こちらのほうは共産党と絡まない仕組みになっていました。私がドイツに行くときも、東ドイツへはモスクワ経由でないと入れませんでした。ソ連のML研にまず寄つて、いろいろ話をしました。何語でやったのか、思い出せないんですけれど。それからドイツに行つて、ディーツ書店の、Marx-Engels-Werke編集部というところに一応形だけ所属しました。月に何回か顔を出せばいいというぐらいで、あとは勉強していればいい形だったんです。もうこの段階になりますと、共産党は、直接にマルクスの出版企画には干渉できません。MEGAの出版の話や私たちの留学の件は、ディーツ書店のヘニツヒ社長と大月書店の小林社長が直接に、時には洋書販売の極東書店の一条社長を交えて、進められていました。大月の方からすると、こうした問題では共産党は頼りに

ならないと割り切っていました。

『前衛』の裏表紙に毎号大きな広告を出しているわけですが、それで共産党系の人を買ってくれるかというと、そういうわけでもなかった。六〇年代の初めには上田耕一郎や不破哲三のものが結構大月から出ているんですが、石堂さんの時代の反省を踏まえて、広告料を出して保険をかけるとでもいいいますか、平たく言えば妥協に過ぎなかった。『現代日本資本主義論争』はどこから出たのかな。

小島 高内俊一氏のものでしょうか、あれは三一書房です（一九六一年）。

加藤 大月書店の『現代の理論』、『現代マルクス主義 反省と展望』というのは、六〇年安保当時の、いわば先進国革命論でした。石堂さんに佐藤昇、井汲卓一、大橋周治、長洲一二、今井則義、力石定一、小野義彦たちですね。結局、共産党から排除されて社会党系のほうにみんな移つて行く。大月の出版活動に関して言うとか次のような線があるのです。ドイツ語の『マルクス・エンゲルス全集』、ロシア語の『レーニン全集』の延長で、マルクス主義古典の部分は継続されますけれども、第三の部門とでもいいいますか、日本人の著作者に頼んでつくる著作がある。この部分

は、石堂さんたちのところでいったん途絶えるんですが、六〇年代を通じて共産党と和解しながら細々とやっていく。そして七〇年代に入つて、六八年学生運動を経験したわれわれが入つて再開するわけです。そのときに、上田耕一郎・不破哲三『マルクス主義と現代イデオロギー』（一九六三年）の延長にあるような不破の『科学的社会主義と政治革新』（一九七二年）、上田の『先進国革命の理論』（一九七三年）などが出てくるわけです。もちろんその前に、上田『マルクス主義と平和運動』（一九六五年）とか不破『マルクス主義と現代修正主義』（一九六五年）とか、結構大月から出しているのはあるんです。『人民的議会主義』はどうだったかな。

小島 新日本出版社（一九七〇年）ですね。例えば青木書店は、共産党のコントロールは完全には利かなかつただろうという類推はしていたんですね。違ったタイプの本も出していましたし、歴史学研究会なんかタイアップしていたので、学術出版社というイメージが濃厚でした。

加藤 青木は『歴史学研究』を出していますからね。

小島 国会図書館のOPACで大月の出版

一覧なんかを見てきて、興味深いことを発見したんです。先生のお話を聞きながらも、ますますそう考えました。三二年テーゼ的日本革命論からの脱却なんですから、これは伏線として七〇年代の共産党内に一貫してあったと思います。ところが、これを共産党が、党中央が、一応自分たちの名前の下に言い出したのは、『日本共産党の五十年』が最初ではないですか。これは七二年のことですね。

加藤 はい、そうです。

小島 その後、共産党は一二回大会を開いて「民主連合政府綱領」を出すじゃないですか。次いで一三回臨時大会で「自由と民主主義の宣言」を発表します。とすれば加藤先生が日本にお帰りになった一九七三年の秋、七四年に大月書店に復帰されたころは、共産党自体が民主連合政府綱領を公表、公式の党史で既に三二年テーゼ的な革命論も一応克服済みだったわけですね。

加藤 まあ、ありえますね。「克服済み」とは言えませんが、情勢分析と戦術の部分の自己批判ですね。革命的情勢の切迫論とか、社会ファシズム論批判とかですね。

小島 一応、それなりに伏線は張っているわけですね。で、大月の話に戻るんですけれど、

これも間違っていたらご指摘いただきたいんですが、七二年ぐらいから、新動向の出版物を目にするんですね。

例えば、蔵原惟人の『共産主義と文化』（一九七三年）とか永井潔の『芸術の伝統と創造』（一九七四年）とかです。

加藤 「現代の教養文庫」ですね。

小島 二人とも共産党の幹部ですので、別段変わった人選ではないのですが、『共産主義と文化』がルナチャールスキーとかを再認して、一種の文化の継承性を改めて確認するとかの一連の文化論です。六〇年代の原水禁問題で造反文学者を論難して平和とか文化とかの「階級的」原則なる教条を振り回していた共産党が、ここに至って文化の階級超越的性格を再認したかのごとき意見を公表し始めたわけですから、一つのサインと受け取るのが自然であつたと言えませんか。

加藤 ルナチャールスキーは、確か藤井一行さんの翻訳で『芸術表現の自由と革命』（一九七五年）を大月が出したはずですね。これは篠原敏武さんの企画ですね。

小島 そうしますと蔵原の少し後になりますね。それとともに、国民文庫の橙ですね。コミンテルン七回大会のデイトロフ報告を新

しく坂井信義、村田陽一で訳しなおして出しているわけですね。あれは、勝部元が一九五五年に国民文庫ですでに訳しているんですが、勝部の除名によつて焚書の対象になっていたのです。

加藤 訳者を替えるわけですね。よくあるスタイルですね。

小島 ええ。さらに一九七三年にはソ連共産党中央委員会マルクスレーニン主義研究所の『コミンテルンの歴史』も二分冊で村田陽一によつて翻訳出版されます。少し後に翻訳された有名なラジッチ、ドラチコヴィッチの『コミンテルンの歴史』（菊地昌典監訳、三一書房、一九七七年）のような批判的研究ではもとよりありませんが、コミンテルン史を検討するのに外国語文献の読めない一般読者に護教的なフォスターの『国際社会主義運動史——三つのインタナショナル』（長洲一二他訳、上下巻、大月書店、一九五六〜一九五七年、なお構造改革論者だった長洲氏の名を退けインタナショナル研究会訳と訳者を改名した一冊版『三つのインタナショナルの歴史』は大月書店、一九六七年）くらいしか存在していなかった状況は激変したわけですね。これは考えてみれば、人民戦線的な革命を便宜的

にしか考えてこなかった証拠です。一応、護教的であつてもコミンテルンの第三回プレナムから第七回大会に至る大きな政策転換については、構造改革派としてレットテルを貼られた石堂清倫先生が早くにレイブゾン、シリニャの『現代革命の理論』（合同出版、一九六六年）に出されていました。六〇年代半ばになると日本とソ連の共産党は犬猿の仲になるため、ソ連の体制的研究者が何を書いても堂々と無視してよかつたわけですが、この時期、コミンテルンの政策転換、社会ファシズム論の撤回など日本のコミニストにとっては都合が悪いばかりかさつぱり意味不明ではなかつたでしょうか。ソ連共産党中央委員会マルクス・レーニン主義研究所の浩瀚な『コミンテルンの歴史』の翻訳刊行はあまり議論されたことはないと思うのですが、実は大きな地割れの始まりだつたと言えませんか。これはその後、阪東宏先生の翻訳によるピーク『統一戦線への歴史的転換』（大月書店、一九七六年）を経て、村田陽一訳の『コミンテルン資料集』（全六巻・別巻一、大月書店、一九七八〜八五年）や『資料集 コミンテルンと日本』（全三巻、一九八六〜八八年）に至るわけです。大月とコミンテルン関係の

書物の歴史を眺めていると明らかな雪解けが見えるといえますか。この段階に至つて、西川正雄先生らドイツ史研究者の『ファシズムとコミンテルン』（東京大学出版会、一九七八年）などの実証的研究も出まして、研究者の議論と共産党の格差も埋まるような気がし始めたわけです。

加藤 雪解けというよりも、三二年テーゼ型から第七回大会型というふうなレベルだろうと思いますけどね。

小島 ただ今から見ますと、『序説』からエレンステン『スターリン現象の歴史』などとは一つの流れに見えてくるんですね。そして究極は五〇年代に出た『スターリン全集』（一九八〇年）の復刻でしょうか。このラインは学者としての加藤先生のお仕事の伏線でもあるようです。

加藤 確かに私はその時期からコミンテルンの研究を始めるんです。個人的な問題が入ってくるから、若干ややこしいんですけれども。私は東ドイツへの渡航前、「野呂栄太郎と日本共産党」と題する日本共産党創立五〇周年記念論文を書いているんです。これは、金沢真、河内謙策、松井坦と私で書いた四人の共同論文です。佳作Aになつて『文化評論』一

九七二年九月号に掲載されています。当時、上田耕一郎、榊利夫、不破哲三たちが「関原利一郎」という一つの名前で共同で書いた文章がありました。それを真似して私たちも、当初は一人の名前にした合成ペンネームで書いていたんです。そうしたら、賞の発表の三日前ぐらいかな、入選になつたから本名を出してほしいと榊利夫から電話がかかつてきた。表彰式で壇上にあがつてもらわないといけないから、君らは大月書店だから本名で出してもいいだろうというわけです。一人だけ大学院生がいるので、この人はペンネームにしたんですけれども、四人のうちの三人、加藤、河内、松井は、当時の大月の編集部員です。

それで、賞をもらいに党本部に行つたんです。ところが、その前の日に決まつたらいいんですけれども、入選にすることはやめたと言われたんです。理由ははつきりしていません。要するに、中身はいい。野呂栄太郎とか、日本資本主義発達史の現実に対する創造的な理論的アプローチとか、この種の話はいいんだけれども、問題は、スパイ・挑発者との闘争の部分に問題がある、野呂はスパイに対する警戒が足りなかつた点が書かれていないと



(笑)。これは実は、後で犬丸義一さんからこつそり聞いた話です。彼が守屋典郎などと一緒に、選考委員なわけです。私たちはすっかり驚きました。犬丸氏によると、選考委員会では入選と決まっていたけれども、それを承認する最終的な党の幹部会で、袴田里見が野呂はスパイに対する警戒が足りなかったと言ったらしい。野呂栄太郎は、党の観点からすると、理論はいいけれども、彼の政治的評価はこれでは駄目だというふうに言ったらしい

のです。こっちは本名を出された上で、入選の賞は取り消され、入選作なしの佳作にされた。もつとも、四〇〇枚ほどの長大論文に印税が出て何十万円にはなったんで、入選賞金とほとんど同じでしたが。

一応、佳作にしろ『文化評論』に出ますと、党の文化部とかから、いろいろと話が来るわけです。ただし受賞が決まったのは、ドイツへ行く直前です。雑誌に発表されたのはドイツへ行つてからでした。一九七二年の九月です。

それで、私のいなかった期間が、ちょうど、いわゆる新日和見主義批判の時期になるわけです。

小島 時期的に、そうですね。

加藤 それで、非常に親しかった学生時代の仲間の多くが、特に大学院に行つた仲間とか、民青の常任で活動していた川上徹さんら、それから全学連の幹部たちが、根こそぎ新日和見主義で弾圧されちゃうわけです。

アンビバレントなのは、理論的には私たちは彼らと同じようなこと、新しいマルクス主義と運動理論の必要をずっと話し合ってきたことです。ただし、川上徹さんとか高野孟さんとかと違っていたのは、彼らは大衆運動の

再建によつて党を変革するという路線であつたのに対して、私たちはコミンテルン第七回大会の平和的・民主的戦略、特にデモクラシーをどうやって理論の中に取り込んでいくのかという方向でした。念頭にあるのはグラムシでしたので、トロツキーに対しても批判的で、大衆運動至上主義についても懐疑的だったのです。だけど、理論的にはずっと交流していた仲間たちが、みんな新日和見主義として理論活動の舞台から排除され、共産党系の雑誌で若手の書き手がいなくなつたのです。

それで、私は日本にいなかったから「分派」にはならない「アリバイ」があつた、大月書店編集部全体も新日和見主義とは関係なかった、『文化評論』で党公認のお墨付きを得たということ、私たちが御用学問の世界にいったん組み込まれるわけです。

ドイツから帰ってきてすぐに書いたものが、河内謙策との共同論文「野呂栄太郎の二つの戦線での闘争」(『経済』一九七四年五月号)です。帰つて半年ぐらいのときに書いたのかな。僕らが『文化評論』で書いたような「野呂栄太郎の理論と方法」については、歴史学者の芝原拓自さんが同じ号で書いていて、私たちに「二つの戦線での闘争」の観点から

高橋亀吉と猪俣津南雄の批判をやってくれという依頼です。何かつまらないなと思いがちでも、一応書きました。この論文は、経済学研究者という肩書きで書いているはずですが。

それから、これが私としては共産党と決別する大きなきっかけになった事件がありました。『序説』を企画するにいたる私個人の大きな内部要因になるのが、『前衛』一九七四年一〇月号の「第三世界革命論とエセ『先進国革命論』」という署名論文をめぐる一件です。こういうタイトルの論文が、加藤哲郎名で出ています。これはすごい論文です。すごいというのはどういう意味かというと、検閲です。タイトルからして変えられたのですが、この論文は、当時の世界資本主義論、帝国主義論争を私なりに理論的に扱ったもので、『Monthly Review』とかを読んで、サミール・アミン、アンドレ・ガンダー・フランクなどのいわゆる従属理論、エルネスト・マンデルの世界恐慌論などを批判的に論じたものです。先ほど言ったように、私は外国雑誌で、そういう論争は読んでいたわけですが。

それで、「すごい」話に戻ります。骨格の論理的批判は、一応私の原稿なんです。ところが、検閲されて削られた部分があるだけで

なく、余計な文章が、著者の私の知らないところで書き足されて発表されているんです。私は検閲というのは削るものだと思っていたんですけど、共産党は全部直して書き加えてくれるんです。マンデルのところで「トロツキズムの大きな特徴は」とか。つまり、トロツキズム批判として『前衛』編集部は私に頼んだようです。私は経済理論としての従属論や恐慌論に対してはいろいろ意見があつて、だから世界システム論のほうに行くんですけど、でも、「修正主義」とか「反党分子」とか、そういう表現は使いません。ところが私の名前が出たその論文には、私が書いた記憶のない、まえばき風の日本型トロツキズム批判と、訳者の北沢洋子さんに「反党分子」、同じく訳者の武藤一羊さんに「反党修正主義者」といった修飾語が書き加えてあったのです。つまり自分が書いていない原稿が自分の名前でも活字になって現れるという奇妙な経験をしまして、「あれ？ 共産党というのはこういうものなんだ」と思ひ至るわけです。

小島 誰なんですかね。その添削者というのは。
加藤 当時の『前衛』編集長足立正恒ですね。後に丸山眞男批判を書かされる党理論官僚で

す。それで、はたと思ひだしたんです。考えてみたら、野呂栄太郎についての五〇周年記念論文の選評に、既にもうそれに近いことが書いてあったと。

さっき言った、スパイ・挑発者との闘争の評価が甘いというのと、もう一つの入選にできない理由は、『野呂栄太郎全集』に入っている野呂執筆として収録されているもののなかには政治論文もあつて、「基本的には党が集団的に作成し、かつ責任を負っているものである」と選評にありました。つまり、「共産党の理論家を書いたものは、個人名で出ていても個人のものではない」というわけです(笑)。私は枚数制限の関係で削られるという意味での検閲はある程度覚悟していたんですが、そうじゃなくて、何かもう全然自分の覚えのない文章がいつぱい入って出てくるとは考えでもいませんでした。おまけに、池上惇さんだったかな。これをそのまま『国家独占資本主義論争』(青木書店、一九七七年)か何かで参考文献として引用したりしているわけです。恥ずかしくてしょうがない。タイトルにかぎ括弧を付けて「エセ」理論なんというのは、もう私の流儀ではなく、自分の用語としては使ったことはない(笑)。

これではとてもスターリン批判、レーニン批判は共産党では展開できない、という経験でした。これは『序説』よりも早い、東ドイツから帰国して一年足らずの段階の体験です。小島さんのおっしゃったこととの関係で言えば、確かに共産党も変わり始めてはいる。ところが当時、立花隆『日本共産党の研究』とか袴田里見の野坂批判とかの問題が出てきたために、スパイ問題はタブーになっていった。トロツキー問題もまだタブーでした。私は「トロツキスト」なんていう言葉はほとんど使っていないんですけれども、加筆されて入れられた。ある種のタブーみたいな領域が、共産党の内部にあるのが見えてきました。

共産党の問題にアプローチするためには、言論の自由の問題とか、歴史的にはトロツキー問題、ブハーリン問題を考え直さないとけない。私はどちらかというとブハーリンはよく読んだほうだったのですが、そういう問題にアプローチする際には、どうも共産党内部の世界はいろいろ制約があるように感じました。以後は共産党の雑誌には書いていません。ならば、編集者として誰かに書いて貰うことはあり得るのではないかと考えた。小島さんの言われた通り、自分自身でも後に

研究者として書き始めるわけですが、特に田口先生なんかには、それで御願ひした面が相当程度あって、いまはご迷惑をかけたかと反省しているわけです。一方で共産党は、一九七六年の第一三回臨時党大会で「自由と民主主義の宣言」なんていうのを出しながら、なぜそういう加筆検閲があり得るのかという問題になる。

ただし大月書店の編集ということで言えば、実は、党からの直接的な内容チェックは全くありません。あるのは二つだけです。一つは、共産党が好ましくないと思った本の広告は出さない、広告拒否という形です。これは今日でもたぶん続いているだろうと思います。川上徹さんが社長だった同時代社なんかは、川上さんが『査問』（筑摩書房、一九九七年）を出した時、そうだったみたいですね。これも。

もう一つは、これが実は私が大月を辞める直接の原因にもなるんですけれども、外国の共産党の出版物を翻訳して出すときには、日本共産党を通じて版權を取るというスタイルが、昔の『マルクス・エンゲルス全集』のときからあるんです。しかも、これは小林社長から昔聞いたことがあるのですが、ソ連も東

ドイツも、マルクス、レーニンの著作の翻訳なら一〇%とか高い版權料を要求してくるんです。出版社としてはとても払えないから、共産党を通して、日本で日本革命のためにマルクスを読ませ普及するんだということ、で、三%だったかに下げさせるといふ交渉を、戦後すぐの時期にやっていたらしい。おそらくソ連共産党が間に立って、革命的な文書についてはブルジョア的ルール以下の翻訳料を認めるということになっていったようです。そうしないと日本の翻訳者に翻訳料が出せない。青木書店なんかでもたぶん同じだろうと思いますが、そういう形で始まったものが、いわば慣例として続いていたわけです。一般の出版社から出る個人の著作なら指導者のものでも普通の版權交渉でいいんですが、外国共産党の出版物を直接出すときには、例えば党機関誌に載った決定・論文等々については、共産党国際部を通すというふうに当時はなっていました。

私が最終的に大月書店を辞めるのは、イギリス共産党の Marxism Today からスターリン批判や組織論の優れた論文をまとめて準備していた論集の一件です。一部は藤井一行さんたちもこれを使っています。それを編集し

て何冊か準備したわけです。これはイギリス共産党機関誌 Marxism Today ですから、今言った国際共産党間の仁義の問題に引つ掛かるわけです。

それで、いろんなシリーズで他のものは出るんだけど、そのイギリス共産党関係の企画はペンディングにされて、最終的には大月を辞めて名古屋大学に移る直前ぐらいに、やつぱり駄目だったというのが、共産党と交渉していた大月の編集長の回答でした。出せなくなつて、私は大月を辞めるいい口実ができた面もある。そういう自由な編集活動がでないんじゃない、ここにはいられないという話にしまして、辞表を出して名古屋大に移るんです。

その代わり、ヘゲドゥシュとか、エレンステンとか、田口さんや藤井さんたちのものとか、それからポツファのとかは党と直接関係ないですから、問題なく出せたわけです。党の交渉を通して出ていたものも、大月の出版物では、『各国共産党・労働者党綱領集』（全二巻、一九七一一二年）が当時出ている。大月書店編集部が編集しているはずですけども、外国の共産党の綱領を訳すのだから、一応、たぶん党の文化部か国際部を通してい

るだろうと思います。イタリア共産党は入っていたかどうか、どこだか分からないけれども問題になった党もあつたはずです。私は直接タツチしませんでした、大月書店のほうは、六一年綱領論争のときとは情勢が違ふという認識で編集していたんだと思います。最終的にはゴースサインが出て出版されている。なぜ新しい綱領が必要かというのも、私個人のほうは、非常に単純でした。中ソ論争があつて、中国の文化大革命があつて、プラハの春があつて、要するに、社会主義内部の矛盾というのがこんなに大きくなっているのに、相変わらず社会主義は社会主義で、資本主義分析だけやっていけばいいわけはありません。資本主義・社会主義を共通する、ある種のグローバルな世界構造が生まれて来たわけですから、これまでとまったく違った革命理論が必要になるという認識でした。

私は七〇年代論というのはあまり取らないで、日本については七五年で切ります。ウォーラーズテインの世界システム論は、一九六八年を一八四八年革命の次の段階に置く。ロシア革命は、その中間のエピソードに置くわけです。要するに、一九一七年から始まる世界史じゃなくて、フランス革命から始まる

近代世界史という観点から見ていった場合には、六〇年代末、ベトナム戦争期で、世界のステューデントパワーとか、フランス五月革命、イタリアの暑い夏、中国文化大革命、チエコのプラハの春などが世界同時におこる。そこが大きな世界の激動期になります。それを分析する新たな枠組みが必要で、共産党の先進国革命論もその大きな議論の一部という認識ですね。でも、共産党がそういう方向に向かうこと自体はいいことですから、それについての討論材料は提供しよう。こういう感じでやっていただきたいと思います。ただし日本については、ベトナム反戦、沖縄返還、学生運動はあつたが、七〇年安保にはならなかった。高度経済成長は続き、大量生産・大量消費を謳歌していた。それが石油危機で高度成長の終焉、減量経営、国鉄スト権ストの敗北、革新自治体の後退で、七五年が転換期になるという認識です。

理論の面でのこうした世界史的流れの帰結が、七五年九月の共産党の社会科学研究所理論会議です。のちに「理論政策活動の新しい前進のために」（『前衛』一九七五年一月号）というタイトルで発表された、上田耕一郎の報告です。おそらく日本共産党系の理論

家の人たちには、これが大きな画期になった

と思います。『序説』のどこかに、たぶん中野さんが書いたと思うけれども、いろいろとスターリン批判の必要性を書いた最後のところに、上田耕一郎が実はこう言っているというかたちで、これが入っている。どなたかの話で再確認してほしいのですが、上田論文への言及は、私の提案である可能性がある。私というか、大月書店側の戦術ですね。つまり、ここまで理論的に許容されるようになったんだから、その範囲内の本だよという、一種のアリバイとして入れた可能性はあるんです。

ひょっとしたら、中野さん、藤井さんにもその意識はあった可能性はあるわけですが、自分らはむしろ理論戦線の新しい前進のためにやっているのだという認識です。藤井さんに確認したら、加藤さんから話があったかもしれないけれど、よく分からないという話でした。私は著者の原稿に直接手を入れるようなことは絶対しませんから、その意味では、私が中野さんに話して、中野さんが入れたのかもしれない。『序説』を見ていただければ、「はしがき——本書の課題意識とその前提をなすもの」が延々と続きます。結構長いはしがきです。その末尾に、上田耕一郎報告の「ス

ターリンの誤り」の項が引用されています。

『序説』と名付けた理由は、まだまだこれからだという認識です。その課題は上田耕一郎氏も次のように述べているという締め方にしたわけですね。上田耕一郎の論文の元になった話はどこでやったのか、たしか五〇〇人ぐらいの日本人の学者・研究者が大きな公会堂に集められたんです。私もたぶん最年少で参加しているんです。同年配の人は、みんな新日和見主義批判でやられているから。正確に言うと、私と九大出身の（故）瓜生洋一君が、いわゆる六八年体験者で召集された例外的な若手研究者ではないでしょうか。

先ほど小島さんが『日本共産党の五十年』の話をなさいましたけれども、犬丸義一氏なんかはこの党史こそ新しい理論の出発点だと考えています。私はあれではまだ不十分だと考えていました。それに比べれば、上田論文は、確かに、課題列挙だけですけれども、逆に言えばこの課題を研究してもいいという話になっていた。『現代と思想』ではこの探求はもう始まっているし、私も翻訳ものなんかで始めているんですが、いわば共産党からお墨付きをもらったというか、この点はまだ未解明なんだとか、そういう方便ができたというこ

とです。

確かにトロツキーの名誉回復は、ここでは入っていません。だけどそれに近いことは言っている。スターリン批判がまだまだ足りないと言っているわけですからね。おまけに、世界資本主義論・帝国主義論から革命論、議会論のレベルまで、あらゆる問題で、まだまだこれから研究していくことが必要だということです。私流に言えば、自己批判が足りないのが最大の問題なんだけれども、それまでの議論とは全然違う話もいっぱい入っている中で、これなら私のシリーズ企画もやれるんじゃないかと感じました。

スターリンの誤り、コミンテルン、プロフインテルンについての歴史的研究、中ソ対立とそれぞれの誤り、高度に発達した資本主義国における社会主義のビジョン、日本や西ヨーロッパにおける社会主義革命、社会主義の民主主義と自由の問題、哲学研究とスターリン等々が、全部ここに課題化されている。目次を見るだけでも、結構な中身になっています。

これは、ほとんど全部、この目次に沿って一冊ずつつくれば、何十巻かのマルクス主義の総括がつけられるというぐらいのもので

はしがき

――本書の課題意識とその前提をなすもの――

ことし一九七七年は、十月社会主義革命の六〇周年にあたり、従来のいわゆる「スターリン憲法」にかわって、現段階のソ連社会を「成熟した社会主義的社会関係の存在する社会」(第六)と規定する新憲法が制定されるにいたったことは、周知の通りである。

このことは、いまからほぼ四〇年前、すなわち「スターリン憲法」が制定された一九三六年前後のソヴェト社会に私たちの想いをさかのぼらせる。

一九三七年四月一日に、第二次五年計画は、四年三ヵ月をもって達成された。当時のスターリンや六九年版党史(いわゆる「プレジヤ版」)のように、この時点においてすでに「新しい、社会主義的な経済をつくり出すという社会主義革命の根本的課題は解決された」とする支配的見解を認めるかどうかを別とすれば、この年、ソ連邦人民のほろがたい困難と犠牲、そして彼らの英雄的労力を礎として、ソヴェト社会の社会主義化における重要な一段階が完了した時点、としてとらえることには、おそらくこれらも異存はないであろう。

強行軍の工業化・農業集団化政策遂行の理由となった国際的契機は、ソ連邦をとりまく資本主義世界に生じた空前の世界大恐慌と、そのもとでのファシズム化と新しい帝国主義戦争の切迫を告げる、一連の無気味な兆候であった。満州事変(一九三一年)とナチス独裁の成立(一九三三年)とは、東西のそのものと

も尖鋭な二つのデータにはならなかったが、「三六年憲法」制定の年は、独伊協約と日独防共協定成立の年であるとともにイタリアのムッソリーニ侵略とスペイン「内乱」勃発の年でもあった。さらに一九三七年は、日中戦争と日本の中国全面侵略開始の年、日露伊三面防共協定調印の年であった。

このような国際的・国内的状況のもとでこそ、ソ連邦人民のいっそうの創意と自覚性の高揚、社会主義的民主主義にもとづく自覚的団結と同志的連帯の前進が、科学的社会主義の核心たる真のレーニン主義と国際主義のいっそう断固たる擁護と実現とが必要であった。そしてそれが達成されれば、ソ連邦は、反ファシズム・反戦の国際統一戦線に結束しようとする全世界の人民にとって、また大恐慌下の苦悩と悲愴のなかにあつて真の社会主義的変革を探究して世界のプロレタリアートにとって、真に輝かしい希望の星となつたにちがひなかった。

「およそ歴史が知っているあらゆる憲法のなかで、もつとも民主的な憲法」の制定前後は、奇怪なことに、「スターリン時代」における大屠殺がもつとも集中的にソ連邦人民を襲った、恐るべき暗黒の数年にはならなかった。

三〇年代の「大粛清」がどれほどの人びとを苛酷な拷問と強制労働(大部分がそのもとでの死)の運命に追いやつたかは、ソ連の公的機関が沈黙を守っている以上、いざんとして推測の域を出ない。第二〇回党大会における「フルシチョフ秘密報告」は、第七回大会代議員と、その大会で選出された中央委員および候補についてだけ、その犠牲者の数を明らかにしているにすぎない。

「第一七回大会で選出された党中央委員および候補一三九名のうち、九八名すなわち七〇%が逮捕され銃殺された(おもに一九三七―一九三八年)。……裁決権または発言権をもつ一九六六名の代議員のうちに、一〇八名が、反革命的犯罪のかどで逮捕された。これはほぼ半と過半数である。……」

ロバート・コンタキストは、三〇年代の「大粛清」を研究した彼の著作のなかで、投じ目な推測の結果として、一九三八年までの大屠殺の規模(一般囚人を含まず)を、次のように推定している。

一九三七年一月にすでに牢獄または強制収容所にいた者	およそ 五〇万人
一九三七年一月から一九三八年二月のあいだに逮捕された者	およそ 七〇万人
計	およそ 一二〇万人
そのうち処刑された者	およそ 一〇万人
収容所で一九三七―一九三八年のあいだに死んだ者	およそ 二〇万人
計	およそ 三〇万人
一九三八年末の囚人数	およそ 九〇万人
そのうち牢獄にいた者	およそ 一〇万人
収容所にいた者	およそ 八〇万人

コンタキストは、ソ連邦の当時の人口統計にもとづく研究と、NKVD内務人民委員部一課長の実行機要の元職員等の証言に依拠しているが、当時の囚人数については、研究者の間では大抵的にな一致を見ている。この「収容所群島」は、スターリン死後三年、憲法制定二〇周年にあたる一九五六年にいたるまでなお存在であつて、メドヴェージェフ兄弟によれば、第二〇回党大会直後の同年三月から夏までの間に、

実に五〇〇万人以上の政治犯が釈放された」といわれる。しかし、三〇年代から五〇年代におよぶ被連捕者または被収容者の総数に比し、とうてい推測不能である。

大量弾圧による処刑者、自殺者、獄または収容所等での死者は、どれほどの数にのぼるであろうか。

ユム・マウス・ド・フは、「一九二八年―一九五八年間に於けるソビエト連邦の人口喪失」という論文の中で、ソビエトの人口センサスに平常時の死に率を乗じて得た人口算定結果と実際の調査結果との差について綿密な検討を加え、公表されていない大量弾圧によるソビエトの人口喪失を次のように推定している。

「……だが、七五〇万人を越す兵士および六〇〇万人―八〇〇万人の非戦闘員の喪失、ナチス・ドイツとの戦争によるもの―引用者」という数字がいかに驚くべき大なるものであると、その他にさらにファシストの攻撃とは直接に関係のない数年間に生じている九〇〇万人―一〇〇〇万人の人口喪失（自然死、老死、飢餓死に数を含め、引用者）がある。これこそ、スターリンの弾圧による喪失に他ならぬ。それらを究明することは、わが国の学問と評論との前にも重大な課題の一つである。」

この概算な数字は、あらためて私たちに息をのませるのに十分である。少なくとも一千万人前説という、この不幸な死者たちのうちには、政治的弾圧の直接の犠牲者から、追放されて死した少数民族等々までが含まれている。

これらの不幸な犠牲者たちとその家族、知人の苦悩は、彼らに与えたこの惨むべき打撃が、彼らが主人公であるべき世界最初の社会主義国家の偉力機関によって加えられたことによつて、いっそう悲劇的なものとなった。ロイ・メドヴェージェフの名著「歴史をして教訓せよ」(邦訳「社会主義とは何か」上・下、石堂書店、三一書房)をまだ読まれていないひとのために、ただ一例だけを本書から引用しよう。

「……ウクライナ共産党の旧指導者、チェーパリ、ボストキエツェフ、コンツェルムの非難の死はさき

に述べた。それと同時に、この共和国の中央委員会副委員会のほとんどすべての権力的活動家、ソヴェト組織と経済組織の指導者が逮捕された。……わけても悲劇的だったのは、ウクライナ人民委員会議長アー・ペー・リョー・リョー・リョー・リョーの運命である。自分の死後、家族のものが弾圧を受けることを恐れて、リョー・リョー・リョー・リョーはまず妻と子を射殺し、ついで自分を撃った。……ウクライナの委員総数は、弾圧の結果として、一九三四年の四五万三三〇〇人から、一九三八年の二八万五五〇〇人へへった。」

不法弾圧は、「三六年憲法」草案を準備した憲法委員会のメンバーを、見のがしはしなかった。スター

リンを委員長とする委員三名中、二名が弾圧の対象となり、その大部分が処刑されるか、自殺または獄死した。

それとともに、一千数百万人への強制的な人口喪失――戦後のスターリン自身の発言によれば

「一七〇〇万人」は、いまでもなくナチスの残虐非道な侵略の犠牲であるが、開戦前後の狂気にひとしい

「赤軍」の、開戦前後におけるスターリンの情勢判断と戦争指導の誤りが、損害を著しく大きなものとした有力な要因であったことも、すでに明らかにされている。

さらにスターリンは、ソ連の国民ばかりではなく、コミンテルンに加盟した各国のすべての社会主義者、共産党指導者多数――そのうちにはわが国の山本義徳、岡田定則も含まれる――の生命をも奪い、ボ

ーランド共産党をはじめとする友党の党組織を破壊し、独り不可侵条約締結後には、ゲシュタポの迫害からソ連邦にのびてきたスターリンの反ファシスト活動家の多数を、ゲシュタポの手に引き渡すとい

う、ブルジョア国家でさえほとんど同様な非人間的な背信行為を行なった。

傷つき、失われたものは、人命だけではなく、スターリンの政治指導は、世界最初の社会主義の闘争を、永遠に止めたにせよ、不信と恐怖の「エリートピア」にたえずことによつて、またその誤った、一面的な政策や「理論」の教条化、過剰化とおしつけによつて、さらにスターリン個人崇拜のドロネスタな国家化によつて、人間解放の偉大な理念であり学説である科学的社會主義の思想と運動、社会主義と労働運動全体に、重大な損害をあたえたのである。

まさに「スターリン主義」(この概念規定については第一章を参照)は、反社会主義、反社会主義の諸勢力にたいして、科学的社會主義と「スターリン主義」との同一化という絶好の武器を提供している。他方、スターリン主義の教条がなければ肉体化していった「マルクス主義者」としては、みずからの半スターリン主義の体質のために、スターリン主義を全面的に「対象化」することは、やはり容易なことではない。

だが、故郷と立ちおくれは、もう許されない。

第一に、ますます増大する労働者階級を中心に、大多数の同意と参加によつて進められる現代における社会主義への変革過程は、自由と民主主義とに「新しい社会の建設をめざす闘争」の革新的政治戦略の実質的目標、恒久的な手段……さらにそれゆゑに根本的価値(「シロコベール」)たる位置をあたえているのである。こうした視点は、当然にも科学的社會主義における自由と民主主義の中心的意義をあらたな解と展開とを、したがって同時に、スターリン主義的「マルクス・レーニン主義」の全面的かつ根底的な克服を要求するからである。

第二に、スターリン主義の一定の本質的な側面と契機は、現代の社会主義体制と社会主義運動のうちにまたおぼろしく継続しており、新しい様相を帯びて再生産もされている。そしてこの事態がスターリン主義の全面的解明を妨げているのであるが、しかしまさにそれゆゑにこそ、私たちのスターリン主義批判は、急がねばならない。

第三に、この二〇年間に、先にも述べたロイ・メドヴェージェフの名著をはじめ、ソルズニエツィンの『ソ連病』、『獄中のなかで』、『収容所群衆』などの収容所文芸、E・S・ギンズブルグの『明るい夜明け』などの弾圧体験者の手記、回想録等がいろいろ出版をすすめる地下から、さされるおよんで、『スターリン時代』の出版、ついに白日のもとにさらされるに至った。

敵をいかにのけた厳たる諸事実は、その解明を求めた声なく叫び続け、この悲劇をくり返さまいと思ひつとびとびの心をとらえて放さない。つきつめていけば、スターリン主義の全面的克服を抜きにして、マルクス主義の真の再生もありえない。そしてマルクス主義の現代的再生なしに、現代が私たちに提起している歴史の謎の解決もまたありえない。

こうして、「スターリン主義とは何か」という問いは、実は、現代の世界そのものが、私たちに迫っている問いなのである。

本書全体は、このような状況認識と課題意識とに支えられてはじめられた私たちの共同研究の、最初の中間報告にほかならない。

あらためておこたわりしておかなければならないが、私たちはもとより、スターリン主義そのものを専門的研究の対象としている者ではなく、またそれぞれのこれまでの研究領域は、かりに十分の時間があたられたとしても、スターリン主義という複雑きわまりない諸相から成る現象の全容をういてみまいしつづけるものではないことも、当初から自明であった。このことを承知しつつ、ここに於て本書を世

15 はしがき

(1) 『スターリンと共産主義』下巻、昭和四十二年、六三八ページ。
(2) 同右、六四〇ページ。

一九七七年一〇月

執筆者 一同

このささやかな書物が、マルクス主義の立場からするスターリン主義研究のあらたな創造的発展のため、ひとつの刺激とならうならば、執筆者一同の望外の喜びである。

「……その後あとからになった数多の諸事実からみて、スターリンの誤りは、当時考えられた以上に深刻かつ大規模なものであることがあらわになってきました。日本の共産主義者も、山本懸蔵、岡崎定則などが犠牲になりましたが、スターリンの誤りはソ連とソ連の党だけでなく、国際共産主義運動全体にも深刻な影響を与えたわけであり、スターリン時代のソ連ならびに国際共産主義運動についても、従来の公式や通念にとらわれず、より広い範囲の問題点を再研究することが必要となっています。それは社会主義的民主主義の侵襲の問題だけでなく、スターリンの名とむすびついたたけの一種の理論と指導におよぶ必要があります。なぜならスターリンの誤りとその影響、その政治的、経済的、思想的根柢、今日における恐ろしい遺産を明確にすることは国際共産主義運動の不団結をつくり出した根源としての大國主義の歴史的背景をも明確にすることになるからです。」

いうまでもなく、スターリン主義の問題性と全体像を正確に断定する作業は、まさにこれからの課題であり、私たちが本書を『スターリン問題研究序説』と名づけた理由も、やはりその点にある。この意味での「スターリン問題」が、断じて過去の問題ではないということについては、例えば、上田耕一郎氏も次のように指摘している。

「……その後あとからになった数多の諸事実からみて、スターリンの誤りは、当時考えられた以上に深刻かつ大規模なものであることがあらわになってきました。日本の共産主義者も、山本懸蔵、岡崎定則などが犠牲になりましたが、スターリンの誤りはソ連とソ連の党だけでなく、国際共産主義運動全体にも深刻な影響を与えたわけであり、スターリン時代のソ連ならびに国際共産主義運動についても、従来の公式や通念にとらわれず、より広い範囲の問題点を再研究することが必要となっています。それは社会主義的民主主義の侵襲の問題だけでなく、スターリンの名とむすびついたたけの一種の理論と指導におよぶ必要があります。なぜならスターリンの誤りとその影響、その政治的、経済的、思想的根柢、今日における恐ろしい遺産を明確にすることは国際共産主義運動の不団結をつくり出した根源としての大國主義の歴史的背景をも明確にすることになるからです。」

「……その後あとからになった数多の諸事実からみて、スターリンの誤りは、当時考えられた以上に深刻かつ大規模なものであることがあらわになってきました。日本の共産主義者も、山本懸蔵、岡崎定則などが犠牲になりましたが、スターリンの誤りはソ連とソ連の党だけでなく、国際共産主義運動全体にも深刻な影響を与えたわけであり、スターリン時代のソ連ならびに国際共産主義運動についても、従来の公式や通念にとらわれず、より広い範囲の問題点を再研究することが必要となっています。それは社会主義的民主主義の侵襲の問題だけでなく、スターリンの名とむすびついたたけの一種の理論と指導におよぶ必要があります。なぜならスターリンの誤りとその影響、その政治的、経済的、思想的根柢、今日における恐ろしい遺産を明確にすることは国際共産主義運動の不団結をつくり出した根源としての大國主義の歴史的背景をも明確にすることになるからです。」

14

に問うことになったのは、科学的社会主義の立場からするスターリン主義研究の各戦線での展開という課題の重要性と緊急性を痛感したからには違いない。

スターリン主義の研究は、未開拓の学問領域に属しており、まさに学際的な研究作業とその協力を必要とする。そこでは諸意識の共通性は、必ずしもたまたまに、問題の諸側面についてのアプローチや認識内容の一致を生み出すものではない。それゆえ、本書の構成は、この理由からしても十分に内的統一性を示しているとはいえないが、他方、この問題で見解の統一をあせることも、またそれまですべてを待つことも、同様に正しくないであろう。

したがって、本書の各論文の内容については、各論者がそれぞれ責任を持つものであるが、とはいえず、各論文を結びつけるある共通の視角は、おのずから浮かびあがらざるを得ない。

第一章は本書全体への導入部分であるとともに、スターリン主義についての総論的問題提起を必要としているが、第二章は、スターリン主義的政治体制成立の一側面たる一党制成立過程の裏証的解明を目標とし、第三章は、いわゆる「トロツキー問題」を工業化路線を中心に照らしようと試みている。さらに、第四章、第五章は、スターリン的党組織論を民主主義の視点からあらためて究明する論議であり、最後の第六章では、思想ならびに哲学としてのスターリン主義の諸特徴と、その克服への歩みを分析されている。

16

- (3) 『ソ連と反共主義』第二巻、三書房、一九七四年、一九二ページ。
- (4) Robert Conquest, *The Great Terror: A History of the Purges in Soviet Russia*, Boston: Houghton Mifflin Co., 1968. 邦訳、荒山忠「スターリンの恐怖政治」下巻、三書房、一九七五年、六六二ページ。
- (5) 『ソ連と反共主義』第二巻、三書房、一九七四年、一八三ページ。
- (6) 同右、一七二ページ。ただし、原文は、ロシア語原文により一部改めた。
- (7) メドヴェージェフ「ソ連主義と権威」上、三書房、一九七三年、三四二ページ。
- (8) ベルヒン「一九四四年のソ連政府の形成の歴史について」(総論、著者の翻訳と結合による、名大『政治論叢刊』第六一巻、一八二—一八三ページ)。
- (9) スターリン「チヤオ・チン・チン」(『スターリン論議集』、大月清、四二二ページ)。
- (10) 前掲三書房版『ソ連主義と権威』の別冊から、「世界政治資料」第四八号(一九七四年四月)を引く、四二二ページ。
- (11) 本書の執筆作業に属している著者の著作は、ともにこの課題へのアプローチをめぐり、本書のなかでそれぞれ論議とも密接に関連している。高橋正典氏の御意をお察しいたい。
- (12) 藤井一行「社会主義と自由」、青木代刊、一九七六年、中野三「マルクス主義と人間の自由」、青木代刊、一九七七年。
- (13) 上田耕一郎「理論的批判の新しい動向のために」(前掲)一九七五年一月、一五九—一六二ページ。

第一章「スターリン主義」とは何か

中野 徹三

あとがき

「はしがき」で述べた共通の課題意識から出発して、本書の執筆者による第1回の研究会が開かれたのは、昨年（一九七五年）の末、一月二、三日のことであった。当初は出版を考えたものではなく、交代で各人の自由な研究発表が行なわれてきた。七六年に出張計画として具体化されてからは、それぞれ執筆を念頭においての研究をすすめてきたが、編者が沢・札幌と離れている事情、関係者の多くが校務や労働組合活動に忙殺された事情などのために、その後ようやく数回の研究会がもたれたにとどまらず、執筆作業は、それぞれの分担部分について各自が原稿を執筆し、編者が必要な統一作業をおこなったうえで、各自の責任において最終的にまとめあげられている。

それにしても、課題の大きさと多忙な日常のためにどうしてもすれぱくずれがちな企画を、このような一冊にまとめあげることができたのは、大月書店編集部の精力的な励ましと、関係文献の紹介などの援助に負うところが大きい。記して、感謝の意を表しておきたい。

本書は、題名が示すとおり、各章で各自が明らかにした内容からいっても、今回の企画で設定された諸テーマをあらわしても、スターリン問題研究のまさしく「序説」であって、ひきつづく共同の検討のひとつの出発点を構築したにすぎない。たとえば、スターリン主義は同様に一時期の社会主義国家の支配的潮流として成立したのか、何故にそれをソヴェト人民が受容したのか、という重要な視点について、今回の共同研究では、これを真正面から論ずる章を設定し十分に光をあてるところまで到達することができ

なかった。各章でそれぞれの視角からスターリン問題にアプローチした成果を統合し、ほり下げ、この論点に関する全般的な説明を試みる作業は、今後に残されたわれわれの共同研究の重要な課題のひとつである。

今日、スターリン主義の遺産を克服する主体的努力なしに社会主義の未来を展望することはできないというわれわれの課題意識は、本書の箇所できりかえし明らかにされてきたところであるが、このことが、不十分さを知りつつあえて本書を世に問うわれわれのただ一つの動機となった。読者の思惟のない批判をお願いするとともに、本書の刊行が、あるべき社会主義教を模索する自由な討論の展開にながしかの寄与をなしうればと念じている。

一九七七年一月〇月　ロシア革命六〇周年記念日を目前にして

編者一同

す。おそらく共産党系

論壇の転機としては、

この理論会議が非常に
大きなものだったろう
と思います。しかもこ

れは、それぞれの課題
毎に検討部会がつくら

れたんでしょいか、専
門家の研究会というの

が、少なくとも一年ぐ
らいはあったんです。

私の場合は、この中の
国際共産主義運動と社

会主義の歴史的展望の
社研の部会に入ってい

ました。これは主宰が
蔵原惟人で、あとは中

林賢二郎さん、塩田庄
兵衛さんもいたかな。

犬丸義一さんなど、そ
の種の有名人がいつぱ

いいます。竹村英輔
さんが、私にとっては

一番近い、そこで知り
合って非常に刺激を受

けた研究者です。グラムシ研究ですね。

要するにこれは、各国運動史研究の研究部
会です。中林さんがイギリス、竹村さんがイ

タリア、僕はドイツということに入るわけ
です。それから、フランスがさっきの瓜生洋一

君という、後に大東文化大学の政治学の教授
になって、この間亡くなった私の親友です。

九大自治会の委員長だった若い研究者が入っ
た。研究会はその後、月に一回ぐらいで一〇

回ぐらいやったかな。全然発表はされていな
いんですけれど、そこではもうスターリン批

判をいくらでもやっていい場でした。

私はコミンテルン批判を徹底的にやりまし
て、そのときに蔵原惟人たちの目の前で、三

二年テーゼ批判も一緒にやったんです。その
理由は、実は一九三二年というのは、国際共

産主義運動の歴史全体の中では一番悲惨な時
代です。どういう意味かというと、社会ファ

シズム論の最盛期であり、革命的情勢の過
大評価があり、左翼社会民主主義主要打撃論

の頂点でした。国際的には三五年に反ファシ
ズム統一戦線・人民戦線論に政策転換する前

の、理論的には一番貧困な時期につくられた
テーゼを金科玉条にして、今でも守っている

のは日本の共産党だけではないかと主張しま

した。後に政治学者として岩波書店の『思想』六九三・六九四号に「三二年テーゼの周辺と射程——コミンテルンの中進国革命論」（一九八二年三・四月）と題して発表する論文の原型ですが、こういう筋で私は報告して、蔵原惟人なんか「うん、うん」とうなずいているわけです。

小島 研究会は、党本部かどこかでやっていたわけですか。

加藤 ええ、社研は当時、代々木の党本部の中にありましたので、そこでやっていました。正確に言うと、本部の裏の共産党所有の建物らしいですけども、そういうところでやられていて、例えば、なぜドイツでは反ファッショ統一戦線ができないで、社会党と共産党が対立したためナチスが政権を取ったのかなど、この種の問題を自由に話せる場になった。今ではほとんど知られていない、アウグスト・タールハイマーとか、エルンスト・フイッシャーとか、後のドイツ共産党あるいはソ連共産党から批判されてそのまま名前が消えていく人たちがいるんですが、この人たちのものをドイツに行つたときに読んでいましたから、それも紹介しました。東独のマルクス・レーニン主義研究所に資料があったもの

ですから、そこで読んでいるわけです。異端派の書いたもののほうが面白かった。そういう話をそのまま研究会では話してよかった。竹村さんは、イタリア労働運動史の総括と共に、グラムシ『獄中ノート』の新しい解釈を出して議論しました。

ただし、その会で竹村さんから教わつたのは、「ただ、加藤君、組織論だけは気を付けろよ」（笑）という点です。そういう研究会を一方でやっていて、これが実は『序説』の編集と並行しているわけです。だから、藤井さんに「ひよつとして僕が圧力をかけたんじゃない？ その上耕の文章を引用させると」と聞いたんですけれど、藤井さんも覚えていないようです。

この上田耕一郎「理論政策活動の新しい前進のために」は、七五年九月に報告されて『前衛』十一月号に載るんです。これによつてスターリン批判が解禁されたというか、タブーが相当取り払われたという雰囲気は、全国のあらゆる領域の党員と思われる学者が来ていましたから、学界では強かつたろうと思います。これは、歴史学研究会で言えば、三二年テーゼ批判とか、いわゆる社会史の評価の問題に絡まって行くのではないのでしょうか。

小島 そうですね。人民戦線論争なんかが始まりましたね。

加藤 あと、先ほど永井潔の名が出ましたので、芸術論で言えば、たぶん宮本顕治が『宮本顕治文芸評論選集』（新日本出版社）第一巻「あとがき」を書くのは、もう少し後になるでしょう（一九八〇年発表）。蔵原の文化論と宮本の文化論は、明らかに戦後の公式解釈とは違って、一九二〇年代、三〇年代初めの共産党の序列から言えば、蔵原のほうが影響力があつた。宮本自身は、「敗北の文学」で文芸評論家としてデビューしながら、奥さんが宮本百合子であるということ以外は、ほとんど文学的業績を残さない。にもかかわらず、文学論にまでちようちん持ちがいて宮本を持ち上げる。蔵原理論というのは、宮本に比べると相対的に柔軟で、統一戦線的でしたから、『序説』の頃は、文学・芸術論もある程度自由に討論できた。それをもう一回締めようとしたのが、宮本の『文芸評論選集』第一巻解説です。それが小田実評価や『民主文学』、『葦牙』問題に波及していく。しかし『序説』の時点では、上田耕一郎と共に蔵原文化担当幹部会員が自由な討論を認めているわけです。



小島 なるほど、よく分かりますね。そうすると、出版されたときは、むしろ追い風で、一切これに対する批判はなかったわけですね。さつき先生のお話に出ましたヘゲドゥシユは懐かしい名前で、私は八九年に彼がコシユート・ラヨシユ大学で行った特別講義に出たことがあります。彼はブダペストのマルクス・カールイ経済大学では話をしていましたがデブレツェンにやって来て公然と話をするのがはじめてだと言うので大教室が超満員で

した。彼は進行する政治改革を社会主義の立場からサポートする議論を述べました。私の所属していた社会学科の先生には彼を「カメレオン」として皮肉って見ている人もいました。

加藤 少なくとも私自身は、『序説』の編集について、共産党から何も言われた記憶はない。先ほど言ったように、大月を辞める理由になったのは、別の経緯でした。いわゆる「田口・不破論争」でもない。たしかに田口さんの『先進国革命と多元的社会主義』（一九七八年）は私が編集し、大月を辞めて七八年四月から名古屋大学の田口先生の助手になるんですが、この本についても、大月編集長からも含めて、私にはおとがめは全くない。ヘゲドゥシユは、その二年後ぐらいに出るわけですが、企画そのものはその後もどんどん進んでいる。

ただ、売上がどれだけだったのかというのは、記憶はつきりしません。佐々木洋さんの見つけた資料によれば、初刷五〇〇〇部だったようです。中野さんによれば「大月のボリーナスが出た」と私が言ったらしいですが、これはちよつと誤解ではないでしょうか。『序説』は七七年一二月に出ているでしょう？

そうすると、私はまだ組合員ですから、青木書店も含めて、労働組合としては春闘を始めている。七四年から七五年というのは、ご承知のようにオイルショックが終わって、世界的な資本主義の危機であり、高度成長が終わります。日本資本主義が減量経営に転換して、その前まで三〇%もの賃上げだったのが急に収縮して、臨時やパートの非正規雇用が出てきたり、女性労働者が増えたりという、職場の一大転換期です。

出版もその波に遭ったんですが、それでも当時は、新聞労連、出版労連などマスコミ関係労組は相対的に戦闘的といえますか、賃上げがまだ勝ち取れる状態でした。他産業の多くの組合では賃上げそのものがつぶされる。七五年春闘というのは、国鉄がスト権ストで国民から孤立してしまう。日本の戦闘的労働運動が「冬の時代」に入る時です。でも出版労連ではそれ以後もまだ春闘が続いていて、ちゃんとボリーナスも出たのです。ただしベストセラーを出した特別ボリーナスではなく、普通の後払い賃金です。たぶんこうした話を中野さんにしたのが、『序説』が売れてボリーナスが出たという話になったのだらうと思います。だけど『序説』は、それなりに商売として

も成り立った。経営としても採算はとれた。先ほど言ったように、大月書店全体としては、マルクス、レーニンから脱皮し、新しい第三の柱をつくらなくちゃいけないときですから、その前もほそぼそと続けてきたけれども、この企画のラインに乗っていけばやれるというふうに、『序説』出版というよりも、たぶん先の七五年理論会議の上田報告をきっかけに、経営陣も判断したのでしょう。だから『グラムシ全集』を八巻本で作るという案が、たぶんこのころ決められているはずです。篠原さんや河内さんなど何人かは、同じような問題意識を持っている。そこは根回しして、編集長らと編集会議でやり合うわけです。経営上の意向は社長・編集長が出てくる。それに対して現在の理論戦線で必要なものは何かという議論をするときに、上田報告とともに『序説』の売り上げは革新的な企画を出していく上で役立ったのでしょうか。

青木書店の場合には、大月よりもさらに共産党との距離が遠いから、逆に言えば、上田報告で『現代と思想』の路線が公認されたことと認識されたのだと思います。『現代と思想』に登場する人たちが、共産党の理論活動にも、ある程度影響力を持っていたのでしょうか。

それが七五年ぐらいの話で、翻訳ものはある程度この時点でも出始めているんですが、日本人の研究者が日本語で書いた新しい問題提起としては、大月から『序説』が出たのは時期的にも早いです。田口さんの『先進国革命と多元的社會主義』よりも確か半年ぐらい早い。そういう意味での問題提起になったのでしょうか。

学界の世代交代と関係するんですけど、実はもうそのころになりますと、六八年から七〇年の大学闘争を経た若手研究者が、大学院を終えてちょうど助手・講師から助教授になつていく時期です。年輪的に三〇代前半ぐらいの研究者から、私なんかは大歓迎を受けるわけです。

例えば書評を書くときにも、海野八尋さんみたいな方が、違和感なく書ける。ただ『序説』の書評はあまり出なかったという印象のほうがいいです。何か探していたいたが、僕は強いですね。海野さんの『日本の科学者』（一三巻五号、一九七八年五月）ですか？
岩間 あと金沢大学の進藤牧郎さんの書評が『歴史評論』三三九号（一九七八年七月）にも出ています。

加藤 なるほど、しかしそれらは一般新聞の

書評とは違う、専門家の反響ですね。『読売新聞』七七年二月二六日の短い紹介のほか、『赤旗』の議論（大野正一名「日本におけるトロツキストのたたかいの歴史的意義」、『赤旗』一九七八年五月一三日、岡崎万寿秀・朝野勉「反共宣伝と出版」、『赤旗』一九七八年五月一五日）は、最近佐々木洋さんから送ってもらって知ったばかりです。トロツキのところが一番引つ掛かったのかな。これは、ある意味では意図せざる結果でした。ただし佐々木さんは相当意識していたかもしれないし、藤井さんなんか狙っていたかもしれない。ただ私は、あまりトロツキーには関心がないんです。トロツキーもブハーリンも正当な歴史的評価がなされればいいという立場で、トロツキー問題が解禁されるかどうかは、編集者としてはあまり関心がなかった。『赤旗』の一文は、榊利夫とか足立正恒あたりの当時の共産党理論官僚たちが、ちよつと出さているんじゃないかと思つてやったのだらうと思います。

その後のいわゆるネオマル肅清のときには、『序説』グループを中心にしていなくて、田口さんのものを中心にして、不破・田口論争を基調に展開する。そのときは、私は名古屋

屋大学助手で田口さんの情報戦の陣地作りを手助けするという関係でした。

小島 先生、どうもありがとうございます。ものすごく体系的なお話で、私の意図を乗り越えて、現代史の記録として素晴らしいものになると思います。せっかく若い人間がいますので。

加藤 そうそう、若い人たちには、今の話は分かりにくいだろうと思うんですね。

小島 若い人のためにどうしても言っておきたいことがあります。卒論で七〇年代のリブについて書いた田中美妃を覚えているね。彼女の卒論を再編して『アリーナ』に掲載するにあたり、若手の優秀な研究者に査読をお願いしたんだ。田中君は私の意見を入れて「六〇年代ラディカルズムは自滅した」と言った調子の文章を冒頭に入れていたが、査読者はそれを疑問に付していた。この査読意見を読んで、むしろ私の方がびっくりしてしまったくらいで、むしろ最近の若手世代は六〇年代から八〇年代以降のカルチュラル・スタディーズ系列のラディカルズムの継続性を知っている、七〇年代をぜんぜん知らないんだね。ちよっと脇道に逸れると今の若い人によく読まれている佐藤優氏についても私は少し注釈

が必要な気がする。佐藤氏は『私のマルクス』（文藝春秋、二〇〇七年）などで同志社の八〇年代の新左翼運動について回想しているが、あれは全共闘運動の絶頂期ではなく、ごくごく一部の大学に生き延びた絶滅危惧種のようなガラパゴスの話であり、七〇年代後半の京都の大学一般にもはや共産党系以外の学生運動などほぼ皆無に近かった。佐藤氏の体験された世界は、個人的体験として尊重するけれども、燃え盛る社会思潮であつたわけではないんだ。セクトの運動は殺しあいに変化していたから大衆的支持も喪失していて、運動としてのリアリティをまだ有していたのは共産党系くらいしかなかった。この時代は共産党を選んだ連中は何度も言うが六〇年代末期の学園紛争時代の「代々木系」であつたわけではなく、六〇年代ラディカルズムへの大きな幻滅と「次善の選択」が判断の基本だったとさえ言える。ただしより重要なことは共産党文化圏そのものが気がつけばガラパゴスになっていったことなんだけども。この文脈の中で今日の加藤先生の話を考えてほしいね。

岩間 そうですね、私も小島先生らとのインタビューの打ち合わせでは、自分の研究しているベトナム戦争に関連したご質問をしようということになっていましたが、やはり今日のお話を聞いていて、もう少し日本における七〇年代と、そしてそこに登場した『序説』をめぐる状況についてお聞きしたいと思いましたね。若手研究者として、同じように当時を知らない読者との繋ぎ役になる意味でも、本書の位置づけについて改めて確認させていただければと思います。ちょうど今西一先生も中野徹三さんに聞き取り調査をされていて、そこで『序説』について「衝撃を受けた」ということをおっしゃっていますよね（北大・イールズ闘争から自鳥事件まで——中野徹三氏に聞く(1)、『商学討究』六一(4)、小樽商科大学、二〇一一年三月）。小島先生も今日の冒頭でおっしゃっていましたし、まず、出版された当時の反応として『序説』はかなりのインパクトがあつたということなんですね。

小島 私らの世代には圧倒的なインパクトがあつたよ。

岩間 それは若い世代にということでしょうか。

小島 学生だね。ただし自覚的にトロツキーの継承者でいたマイノリティとすでに圧倒的多数を占めていた保守的な学生にとっては常

識以前だっただろうね。今日議論してきたように、七〇年代の中期に体制左翼、共産党とか社会党のマルクス主義に忠実なグループの一部が大きな知的ブームを作りだした。この左翼連合の中で多数派は共産党だったから、この中のユーロコミニズム的推進派が既成の共産党をリニューアルできると夢想した。そのグループが『序説』に熱狂したんだよね。社会党の社会主義協会、いわゆる向坂派などは共産党よりもっと頑迷な時代錯誤者だったから、彼らはこの本はパスだったかな。社会党右派はイデオロギーとは無縁で自民党の一種だったから最初から興味なし。となると若手の共産党的知識圏内にいた学生などが一番熱狂したのではないかな。この時代の学生はこうした本を読んだ最後の世代で、「ぼななとハルキの時代」ではなかったんだ。

岩間 では中堅以上の研究者にとつてはどうだったんでしょうか。というのはつまり、感性の鋭い若者だけが熱狂し、上の世代は硬直化してそうでもなかったのか、あるいは上の世代にもある程度のインパクトを与えたなら、もう少し何か状況が動いてもよさそうない気がするのですが。

小島 六〇年代にもいろいろな新しいマルク

ス主義の動向なんかを知った連中は、そんなにインパクトがなかったと思う。とくにチェコ事件以降「人間の顔をした社会主義」というのがヨーロッパで台頭し、それが発展してユーロコミニズムになるのだけれども、マルクス主義内部でもいろいろな思想的実験が行われたからね。構造主義的にマルクスを解体し再読するアルチュセールなどもこの時代に発言を盛んに行う。フランスのポスト六八年の世代だ。君たちが立命館で師事した西川長夫先生などの出発点だよ。ただ私のよく分からないのはアルチュセールなどはフランス共産党異論派だとは知られていたが、しかもスターリン的なマルクス主義を根本的に解体しつつあることも分かっていたが、「マルクスは基本的にこうだった」的ファンダメンタルな読み方ができるため、マルクスの相対化を全面に打ち出す流れとは逆向きに見えないわけでもなかった。しかも西川先生をはじめフランスの構造主義的マルクス主義者は本家と違い日本では共産党文化圏外だったしね。共産党文化に戻るとあれだけ全共闘などと対立しながらやはり同じ時代の空気を吸っていた若手がたくさんいて、官僚的な党運営や硬直したイデオロギーを根本的に疑問視するグ

ループはあったが、七〇年代の初期に新日和見主義批判という名目で排除されて行く。ところが、ちょうどこの頃から共産党への国民的期待が高まって国政選挙で大躍進し、古い体質の共産党は「勝てば官軍」になつてしまふのだね。とは言え、少なくとも六〇年代末期以降の空気を吸った世代は間違ってもあのような党に自己を投影できるわけではない。この世代の若手が熱狂したわけで、考えてみれば藤井一行、中野徹三先生などの世代は、私たちよりも二世代上、スターリン批判から安保闘争の世代で、知的権威も大きく、若手が新しい話を持ち込んだと言うよりもかなり厳密な研究的背景を踏まえていた点も大きな説得力を持ったのかも知れない。六〇年代末期の全共闘世代や八〇年代以降のポストモダニスト以降は中堅研究者の書くことは知的権威を喪失し、一種の若者の特権が荒れ狂ったけれど、七〇年代はそういう時代でもなかったんだね。

岩間 なるほど、中堅以上の研究者はすでに六〇年代の様々な動向を経験していたのでそれほど衝撃を受けたわけでもなかったんですね。今おっしゃったこの七〇年代という時期なのですが、『序説』が出版された背景とし

て考える上で、どのように捉えることができるのかをお聞きしたいと思います。先ほど加藤先生は七〇年代論という見方はあまりとらず、日本については七五年で切るとおっしゃっていましたよね。確かにこの時期に日本経済の転換があつたり、革新自治体がピークを迎えたりということがあると思いますし、小島先生のまとめでも既成革新への期待感が七二年ごろから徐々に高まり、七五年にはつきりとして、これもピークだったと。この七五年というものの意味や、出来事の内的連関はどのようなものだったのでしょうか。この時代をどのように歴史的に見ることができでしょうか。

加藤 歴史は過去と現在の対話ですから、時期区分も「現在」がどういう時代であるかで、当然変わってきます。この辺は、一九九七年に歴史学の皆さんと組んで『日本史のエッセンス』という大学教養課程の日本史教科書(有斐閣アルマ)を書いたときに、一九四五〜九五五年、つまり戦後五〇年を通史として語る際に考えた問題です。七〇年代に、戦後史については、歴史学研究会の初期の歴史書に典型的な「占領安保史観」と、高度経済成長による日本の国際的地位と社会構造変化を重視す

る「高度成長史観」がありました。日米関係を重視する「占領安保史観」では、四五年敗戦、五二年講和、六〇年安保まではクリアに切れるけれども、七〇年安保は大きな転換にならず、むしろ七二年沖繩返還とか、七八年日米防衛協力ガイドラインなどが指標で、すつきり切れない。政治学には、六〇年安保までを「イデオロギー政治」、その後を「利益政治」として日本近代の完成を論じる高島敏さんらの議論があるのですが、私はこれをヒントに、六〇年までは対外関係重視の「占領安保」を軸に、その後は国内社会構造の変化中心で「高度経済成長」を重視し、七五年を「高度成長の終焉、減量経営から安定成長へ」の転換点としました。『歴史学研究』一九八四年一月号に書いた「経済大国日本と戦後国民意識」では、この七五年をさかいに、石油危機とドル危機による西側資本主義の再編をG7サミットに初めてアジアから日本が入り、世界システム論でいえば世界資本主義の「中心・中核」に入った、そのもとで国内的には「生活保守主義」と「経済大国ナショナリズム」が台頭し、保革伯仲から保守回帰、臨調行革から中曽根新自由主義へのバックラッシュになる、と主張しています。世界史的

にもベトナム戦争が終わり、金ドル基軸を失って資本主義世界が再編されると考えて、『日本史のエッセンス』では七五年転換説で書きました。

ただし二一世紀に入って、海外の日本研究の友人たちと交流して、若干変わってきました。もっと長いスパンで、東西冷戦の終焉、ソ連崩壊を踏まえて、近代日本の転換点をどう考えるかです。例えば友人であるアンドリュ・ゴードンの『日本の二〇〇年』(みすず書房、二〇〇六年)は、日露戦争後の「帝国日本」の継続・末期として占領期をとらえ、「戦後」を一九五二年以降にする。そのうえ冷戦崩壊と昭和天皇の死が重なった八九年以降は「ポスト戦後期」と設定する。これは、オックスフォード大学出版会の世界各国史シリーズの日本編で、海外ではよく読まれ、大きな影響力を持っています。私自身も、インドやメキシコの大学での日本史講義では、学用テキストにしました。要するに、世界史の中の日本という問題です。

そうすると、七〇年代論か七五年転換かも、マイナーな問題になります。私は旧講座派も近代主義派もあこがれた日本近代化の完成を、高度成長期に設定しました。しかもそ

の内実は、かつてマルクス派も丸山眞男もあがれた理想的・西欧的市民社会の確立ではなく、企業社会中心で過労死まである、独特の資本主義的近代になった。もともと理想的市民社会なんて、現実には世界のどこにもない。まあ北欧型福祉国家が人間中心の生活世界という意味である程度かつての社会主義の夢に近いと言えるでしょうが。

こうした意味で、ロシア革命も四五年敗戦も、「保守対革新」の五五年体制も、「現在」からたえず再審されていると考えます。

岩間 非常に興味深いお話です。と同時に、七五年前後に起こったことと、それをより長いスパンで考える視点を合わせ持つことで、七七年に出版された『序説』の位置づけもだんだんとクリアになってきました。となると、やはり日本が飛躍的に経済成長してその様々な矛盾も出てきたときに既存の社会主義がどうも役に立たないということで、根本的な生まれ変わりというべきか、何らかの変化を求める動きが出てくるのは必然とも言えますね。上田耕一郎氏の論文などもあったわけですし、当時、共産党も徐々に始まり始める兆しが見えたような感じがしますが、にもかかわらず結局『序説』が全く受け入れられな

かったのは加藤先生からご覧になってなぜだと考えられますか。あるいはさらに広い意味で、内部変革を遂げられなかったのは基本的に共産党の指導部の問題に還元されるのでしょうか。変革にくい構造的性質や、急激な変化を恐れる心理的要因などがあるのかと推察はするのですが。党員一般に党の改革よりも保守の方に意義を見いだす勢力の方が大きかったというのもあるのでしょうか。例えば労働運動の一部とか社会運動で党が改革されれば既得権益を失う人が大きかったとか。

加藤 いや共産党指導部対『序説』というのは、ささやかな問題です。八九年には冷戦も現存社会主義も崩壊して、グローバルイゼーションと新自由主義の時代に入るのでしたら。資本主義対社会主義、マルクス主義対近代化論という対抗図式自体が塗り替えられ、世界史というドラマの舞台そのものが変わるという認識です。無論、共産党の民主集中制とか、プロレタリア独裁や階級闘争といったジャルゴン（組織内言語）の問題はありますが、現存社会主義は七〇年代にはもはや修復不可能なほどに病んでいた。それなのに、なお「帝国主義の包囲」とか「生成期」とかという論理でソ連・東欧を擁護し、あるいはソ

連、中国からベトナムへと「青い鳥」を求めてきたことが問題でしょう。このあたりの問題は、「戦争と革命——ロシア、中国、ベトナムの革命と日本」（『岩波講座 アジア・太平洋戦争』第八巻）二〇世紀の中のアジア・太平洋戦争』（岩波書店、二〇〇六年）に書きました。

岩間 そうですか。『序説』とそれに象徴される一連の新しい動きはもうちよつと可能性として大きなものを持ちえたのかなと思います。残念です。ところであと一つ聞いておきたいんですが、小島先生ら多くの読者たちも、既存の社会主義がダメだということはわかっていたわけですね。それで、ダメだと指摘したり、新しい方向を提言したりする議論はそれまでにもあった。しかしそれがとうとう大月書店から出たという点が大きかったのでしょうか。

小島 そうね。知的権威では岩波書店ということになるのだけれども、大月書店は政治的権威を持っていたよ。

加藤 大月書店というのは、まだ若い世代にも権威があったのですか。その頃は。

小島 かなりのものです。加藤先生の話で

私がびつくりしたことは、社会主義協会の連中が大月文庫を読んでいたということですね。社会主義協会の連中は、みんな岩波文庫を読んでいたと思っていました。

加藤 ああ、『資本論』なら向坂逸郎訳ですね。でもあれも下訳は岡崎次郎で、大月版全集とルーツは同じです。私は『資本論』は青木書店の長谷部訳を学生時代に読んで、今でもそれが頭に残っている。マルクスやレーニンを全集で全部読むというオールド・ボルシェヴィキの伝統は、当時は共産党ではほとんどなくなり、社会主義協会派にわずかに残っていたでしょう。

小島 そうですか。一応、大月版『マルクス・エンゲルス全集』は大内兵衛と細川嘉六の監修ということになっていますからね。

加藤 政治的権威という点に関わるかもしれませんが、確かに『前衛』という共産党機関誌の裏表紙は、ずっと大月書店の広告でした。

小島 『前衛』の宣伝を出している出版社から出たかと。そんなインパクトのあり方だったのですね。それから、冒頭で言ったように、ものすごく周到に文体を選ばれているんだけれど、過激なことを書いているんですね。何

というか、確信犯の文体なんだね。だから、ついにここまで来たかと思ったわけですね。

加藤 ただそれも、『序説』では私が文章を検閲することは一切やっていません。それは中野さんたち執筆者たちが、大月の編集者の私が言っていることを共産党の見解だと誤解して慎重になったのかもしれない。この辺はご本人たちに聞いて下さい。

岩間 なるほど。それでとにかく若手の間では大いに話題になったわけですね。読書会なんかでも読まれたりしたんでしょうね。

小島 とにかく生協書店に平積みになった瞬間に僕は買いに行つて、次の日はほぼ消えていました。出版の予告をどこかで見た瞬間から待ち構えていた感じだったよね。次の日に全部読んだというやつが、まわりにいっぱいいたんだ。何度も言うがそんな時代だったんだ。

加藤 それは嬉しい話で、望外の若い読者がいたということですね。ただ私たちが、なぜ大月書店の編集労働者時代に野呂栄太郎論を書いたのかという問題ですが、この論文の中でわれわれが一番主張したのは、出版の自由の意義だったのです。岩波の『日本資本主義発達史講座』と共産党の三二年テーゼは、出

た時期は同じだが、厳密に調べると、直接関係はないと言うことです。要するに、野呂栄太郎・山田盛太郎ら最良の学者たちが実証的・創造的に自由な理論活動をやったら、三二年テーゼと基本線が偶然に一致したという話です。これは、当時の小林勇以下岩波書店の編集者の自律を想定して書いたことです。自由に創造的に思考すれば、政治的にも意義ある理論構築ができた。これに對比すると、戦後の岩波『日本資本主義講座』（一九五三〜四年）は大失敗なわけです。こっちはまさに、共産党の直接の介入で、共産党の方針にあわせて現状分析をした。全く現実から遊離してしまつた。だからわれわれは、むしろ戦前『日本資本主義発達史講座』時代の民間出版社の自由で自律的な編集権の意義を再確認したのです。

これはあまりご存じないと思いますけれども、私の大月での最後の仕事は、『講座現代資本主義国家』（一九八〇年）という四巻本です。これは私なりの『日本資本主義発達史講座』の編集で、最後の第四巻の巻末論文は、名古屋大学助手となつた私自身が「先進国革命試論」を書いていきます。本当は裏方である編集者が表に出て論文を書くのはよくない。

しかしこういう本格的な日本資本主義分析をやる時には、どうしても全国からいろんな人を入れなくちゃいけません。編集委員は金原左門、小林丈児、高橋彦博、田口富久治、福井英雄、藤田勇の六氏ですが、若手を中心に編んでも、四巻もので日本資本主義を全面的に分析する際には、いろんな方法論・考え方が入ってくるわけです。結局まとめの革命論を書く人がいなくなつて、私が書くことになった。名古屋大学で田口先生の助手の時代ですが、私としては主観的には、現存社会主義の批判を踏まえた新時代に即した変革の路線の究明という編集過程で考えた構想を書いたものです。私の学術的処女作『国家論のルネサンス』（青木書店、一九八六年）に再録しています。この論文で、私の大月書店編集部の仕事は終わりになりました。

ただ、この講座は、あまり売れなかったはず。多数のマルクス系社会科学の研究者を全国から組織できた指針は、さっきの七五年上田報告があつたからでしょうが、この講座が出る時には、もう「田口・不破論争」に入っている。だから読者層を考慮すると、革命論のところは田口先生に書いてもらうわけにはいかない。あなたの企画・編集でやつ

たんだから責任を取りなさいというのが田口さん、藤田さん以下編者の大先生方のご意見で、私が書かざるを得なくなつたものです。

小島 だから、さっきの岩間君の質問に再び私が変な答え方をするけれど、田口・不破論争が権力的に収束した時点で、少なくともわれわれのような比較的好意的に期待していた者が完全に共産党文化圏から離れていった。私の場合は、もうマルクス主義ではない別な勉強を始めようと決意した。思い切つてアメリカ社会科学の勉強をしてみようと考え、同時に東ヨーロッパの研究を自分の力ではじめて勉強するきっかけにもなつた。ロシア語も勉強をはじめ、ダーレンドルフを皮切りにアメリカ社会学の古典を英文で読み始めた。そして高校生以来の日本史研究から離別を決意した。やり始めた福本和夫の研究も途中で放擲し、迷走する自分の始末書を書いたのが二〇歳代最後に書いた『ハンガリー事件と日本』という未熟な本だった。人生の決定的な区切りになつたね。

影浦 加藤先生も小島先生も海外経験が、しかもいわゆる「西ヨーロッパ」の展開を客観的に見つめられる場所での生活経験が豊富であられるわけですが、加藤先生が先ほど東ド

イツでの生活体験が圧倒的な重さを持つている、というご発言を聞きながら、加藤先生の高著『ワイマール期ベルリンの日本人』の世界観をなつかしく想起しておりました。この本を拝読していた当時、私は、日本資本主義論争史における土屋喬雄の立ち位置を整理していた時期でもあつたので、「洋行」経験―欧米の資本主義を身体化している経験―が個人の思想に及ぼす圧倒的影響力というものを改めて考えさせられるきっかけになりました。穿つた見方かもしれませんが、この本は、些末な思想的立場を乗り越え国際感覚を身に着けていった「ベルリン社会科学研究会」などの存在意義を捉え直した内容でもありますね。同時代の日本資本主義論争、あるいは遡つて大正デモクラシーなどの盛り上がりは、すでにこれまでも議論されてきていますが、実は日本国内という限られた空間のなかでの一エピソード、言うなれば「コップのなかの嵐」に過ぎず、初めから限界を持った論争であつた、という加藤先生の批判的メッセージなのかな、と考えておりました。

しかし、先ほど加藤先生は、「出版の自由の意義」という、新しい観点のなかで、戦前・戦後の日本資本主義論争史を比較され、戦前

の論争史の理論的水準を再度評価されている点を非常に興味深く拝聴しました。最初にお会いした際に、加藤先生から近年のアジア新興国の躍進を前にして「アジア的停滞」とは何であったか、という課題の検討も必要だね、という話を伺ったと記憶しております。論争史すら知らない世代がどんどん増えてゆくなかで、日本資本主義論争史の意義を現代史のなかで読みかえることは可能であるか？可能であればどのような視座が必要か？若手研究者に向けてメッセージがあれば伺いたく存じます。

加藤 そうですね。論争史はその時代の新しい課題との理論的・思想的格闘を反映しています。講座派・労農派の日本資本主義論争も、戦後社会党・共産党の綱領をめぐる現代資本主義論争も、理論的整合性よりも、実は現実そのものの認識の違いを映し出しているのです。「アジア的停滞」がいかに日本の歴史学を拘束するアポリアであったかについては、京大の永井和さんの「戦後マルクス主義とアジア認識―『アジア的停滞性論』のアポリア―」（古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』京都大学人文科学研究所、一九九四年）がウェブ上で読めますから、参照して下さい。

影浦 ありがとうございます。ここで『序説』の話に戻りますが、私のイメージでは、『序説』は非常に緊迫した状況の中で登場したと思っていきましたが、実はかなり追い風に恵まれていたと理解してよいのでしょうか？

加藤 追い風というか、一時的に開かれていた雰囲気でしょうね。これも歴史的に見ると、毛沢東がよくやった理論的肅清の山口と似ています。党中央が旗を振って百花斉放・百家争鳴と自由な討論を奨励する。それで知識人が党への批判を公言し出すと、今度は行き過ぎだと言って反右派闘争に入る、要するに整風運動の一部だった気がします。

影浦 なるほど。開かれつつも行き過ぎてはならない、整風運動の一部だったという表現はとても理解しやすいです。そんな党内のジレンマのなかで登場した『序説』というわけですが、小島先生はこの著作は、「世の中を変えた本ではなくて、変えることに失敗した本」であつたと問題提起されました。今日から見る『序説』の限界とはいったい何であつたのか。加藤先生のご意見をお聞かせくださいますか？

加藤 どういうことかという、結局、高度経済成長が日本社会を変えたことによって、

三二年テーゼ的な一元論的なマルクス主義では解決できない問題が、当時、無数に出てきている。だから一つの理論で全ての社会問題が説明できるなんていう大きな物語が、そもそも崩れた。何よりも、三二年テーゼにしろ丸山理論にしろ、半封建的な社会として日本を想定していたのに、いつの間にか近代化が完成し、資本主義の頂点のレベルになつていった。エズラ・ヴォーゲルの「ジャパン・アズ・ナンバーワン」が七九年です。八〇年代には一人当たりGDPがアメリカを追い越しちゃう。だからポストモダンの話が若者から歓迎される。そんな時代に、あまりに時代錯誤なマルクス主義から、ちよつと時代に合わせたマルクス主義に変貌しようとした、ということだろうと思います。その歴史研究の部分が『序説』にまずまとめられたということでしょう。

小島 そうですね。ちよつとましなのも失敗してしまつて、結局、既成左翼もろとも崩れた。

加藤 新左翼もですね。

小島 新左翼もそうですね。ただ廣松学派は、廣松先生が東大教授に就任されたこともあつてアカデミズムを構築し制度的研究者を量産

します。トロツキストを自称する佐々木力氏も東大の科学史の著名教授として制度的中核を固めたわけですが、トロツキーのファンダメンタリズムの部分はさて成功したのでしょうか。両者はともに東大駒場を拠点とするわけですが、この後継世代とその取り巻き、応援団のあり方は制度的な学問の典型そのもので、少なくとも「左翼」ラディカリズムとは別物であることだけは確かですね。往年の丸山学派や大塚史学などこの学歴秀才たちは完全に同じで、政治的には日本で一番安全な人びとです。

加藤 私は九〇年代になると、平田清明さんや廣松渉さんとも仲良くなりまして、一緒に毎月研究会をやりました。後に平凡社の『これからの世界史』というシリーズになります。スターリン主義国家ソ連が崩壊して新左翼も旧左翼もなくなり、九〇年代は「フォーラム06」という政治運動も一緒にやりました。お二人の追悼文が、私のホームページ「ネチズンカレッジ」に入っているのでご参照ください。

影浦 ちょっとましなのも失敗したというだけでなく、あるいはネオ・マルクス主義排斥によって消え去ったと言うのと違う文脈で、

崩壊の内的必然性みたいなものはなかったのでしょうか？ 本日のインタビュウのなかで、『序説』が出版に至るまでの過程とマクロな時代背景をお聞きするなかで、本書が同時代に向けた革命的なメッセージ性と時代的意義を改めて考えさせられました。それらを受けとめたうえで、しかしながら、八〇年代以降の世代から見ると、この時期に盛り上がった「ユーロコミニズム」は果たして日本において現実的選択であったのか、という点はクエスチョンとして残りました。さっきの岩間さんの質問ともかぶるかもしれません。結局のところこれらの議論は、「理想郷」「遠くの空に輝く虹色」に過ぎなかったのでは？ という単純な感想を、今日に至る現実を目の前にすると持ってしまいます。ユーロコミニズムの思想を七〇年代日本に順接するためには、いったい過渡的には何が必要であったのか、このあたりの議論はどうなのでしょう。

加藤 まず「ネオ・マルクス主義」というのは、実はわれわれが言ったんじゃないくて、共産党が言い始めた批判のための他称です。新日本出版社から『ネオ・マルクス主義——研究と批判』（一九八九〜九一年）という批判

本が出ていますね。ベルリンの壁が崩壊してからこんな本を出すのも、すごい時代錯誤です。当時の私の一橋大学の同僚も、古賀英三郎先生なんかあの中に書いていらつしやつて、にやにやしながら読んでください。

小島 同時代的には聞かない言葉だったですね。

加藤 そうです。あの時代にはネオ・マルクス主義とは言っていませんで、田口先生や私は「国家論ルネサンス」というのが旗印でした。あと、ユーロコミニズムという名称もよく使われていました。宮本顕治さえ「ユーロ・ジャポネ・コミニズム」なんて言っていた。その後私は、グラムシの機動戦から陣地戦へのアナロジーで、二〇世紀陣地戦・組織戦から二一世紀情報戦・言説戦へと提唱し、国際会議などではラクロウムーフの掲げた「ポスト・マルクス主義」、または「ネオ・グラムシアン」と自己紹介しています。

私は、当時のユーロコミニズム型戦略・戦術で、革命が起こるなどとは全然考えていなかった。武装蜂起でなく複数政党制のもとの多数派形成・国民的合意ですから、当然政権交代もありうる。だからいつが革命でいつから社会主義かも歴史が審判すると思っ

いた。丸山眞男のいう永続民主主義革命です。ただし『序説』の頃、民主連合政府から社会主義へと言う期待が読者層の中にあっただろうことは、否定しません。運動論的には社共の統一戦線というのを前提にしているし、労働運動では総評が一応ナショナルセンターとしてがんばっていることを前提にしている。でも、七〇年代にはそこがもう崩されていく。革新自治体の頂点が七五年で、以後自治官僚出身の首長に切り崩されていく。

労働運動においても、国労のスト権ストを最後に「冬の時代」に入るのが七五年。大企業企業内組合が労働戦線統一を主導し、今で言う連合のほうへ流れていく。当時は同盟、MEJCですけれども。つまり石油ショックまでは日本の高度成長の波に乗って賃上げも倍々ゲームできて、春闘要求と実績で労働者を統一することができた。いわば経済的再分配で統合されていたんですが、高度成長が終わると産業間・企業間格差が大きくなって、国民春闘型運動は破綻していく。

もう一つは、統一戦線論そのものの問題です。私は、ちょうど『序説』を編集しながらコミンテルン書記長だったデイトロフの大幅版三巻選集（一九七二年）を読んでいた。

先ほど言ったように、ピークとかトリアッチとかトレーズとか、コミンテルン第七回大会関係の新訳が出た。デイトロフを読んで、これじゃ駄目だと思った問題が二つありました。一つは、人民戦線も統一戦線政府も全て共産党の指導が前提になっている。つまり、戦術的にしか政党の共闘を把握していない。共産党が入れば統一戦線とか人民戦線と政治的に称するだけで、前衛党の指導性は絶対離さない。むしろ他党を浸食していく。

もう一つは、私が東ドイツで調べてきたもう一つの課題、国崎定洞という医学者の粛清の問題と関係します。反ファッショ統一戦線の提起で民主主義がマルクス主義の中に理論的に再認識された時代に、民主主義と正反対の人民に対する抑圧がソ連の国内で行われていた。ソ連崩壊後の研究では数百万人となりましたが、『序説』の当時は二〇〇万人とか四〇〇〇万人といわれたスターリン主義の犠牲者たちがいて、その人たちのうちの一人が、私の研究し、西ドイツのご遺族と交流していた国崎定洞であった。しかもその死因も命日もまだ分かっていなかった。

ドイツに留学していたときに、東独マルクス・レーニン主義研究所の書庫で、あるとき

『革命的アジア』という雑誌を発見したので。ドイツ語で出ていたドイツに留学していた日本人、朝鮮人、中国人、インド人が加わった、アジアの反戦平和のためのドイツ語雑誌です。そのグループ（革命的アジア人協会）の中心人物が国崎定洞で、元東京大学の医学部助教授だった。ヒトラー政権成立直前に国外追放になって、日本に帰らないでそのままソ連に亡命し、片山潜のそばでソ連在住日本人グループ約百人の有力な指導者になったんですが、三七年頃行方不明になっていた。

この話は、川上武さんという医師で医学史家がずっと追求していました。一九七〇年に川上武・上林茂暢編著『国崎定洞——抵抗の医学者』（勁草書房）という本が出ています。この本を東ドイツに持って行って、私も足跡を調べた。私が帰国した頃に、鈴木東民さんという、読売争議の指導者で、当時社会党の理論家であった人が、ドイツ時代に国崎定洞の親友だったものですから、西ベルリンで電話帳を手当たり次第にあたって、奇跡的に奥さんの存命を発見した。それが『朝日新聞』と『文藝春秋』に大きく出て、それと私がドイツで見つけた資料があつて、千田是也、有澤廣巳らドイツ留学時代の国崎の友人と石堂

清倫さん、川上武さんが中心になって、「国崎定洞をしのぶ会」をつくり、ただひとりの若手である私が川上さんを助けて事務局になり、ドイツの「遺族との連絡にあたりました。こちらのほうは、大月書店の仕事とは、全然関係ありません。

そこでわかったことを『国崎定洞——抵抗の医学者』に書き加えて、川上武『流離の革命家——国崎定洞の生涯』（勁草書房、一九七六年）という本にします。本名でも、川上武・加藤哲郎・松井坦編訳『社会衛生学から革命へ——国崎定洞の手紙と論文』（勁草書房、一九七七年）という資料集をつくります。つまり大月の仕事として『序説』を編集しつつ、他社からスターリン粛清の日本人犠牲者国崎定洞の研究を出していた。三〇年代後半のソ連国内では、デイミトロフのいう反ファッショ統一戦線・人民戦線どころか、コミンテルン活動家の大量粛清がおこなわれていた。こんな話は『デイミトロフ選集』には全然でてこない。それで大量粛清と共存する反ファッショ統一戦線とはいったい何だろうと疑問を持ちました。後にソ連崩壊で国崎定洞粛清の真相、八〇人ほどの日本人粛清を追いかけて、『モスクワで粛清された日本人——

三〇年代共産党と国崎定洞・山本懸蔵の悲劇』（青木書店、一九九四年）や『国民国家のエルゴロジ』（平凡社、一九九四年、二〇〇二年『国境を越えるユートピア』と題し、平凡社ライブラリー）、それに国崎定洞伝記の決定版川上・加藤共著『人間 国崎定洞』（勁草書房、一九九五年）を出しました。つまりスターリン粛清のケース・スタディを、『序説』編集と併行して始めていました。だから党を離れた人を「脱落者」「裏切り者」「修正主義」「反党分子」「人民の敵」「スパイ」などと呼ぶ共産党の統一戦線論は信用できない、それどころか日本でも共産党単独政権ができたらいっただいどうなるだろうかと考えました。

国崎のことをやっていったら、その周りにいた在ソ連の日本人が、ほとんどみんな殺されている。強制収容所（ラーゲリ）で生き延びられたら不幸中の幸いです。野坂参三以外は、全部被害に遭っている。それも日本人同士の疑心暗鬼による密告が発端です。もつとも山本懸蔵による国崎定洞告発、野坂参三による山本懸蔵告発が明らかになるのは、ソ連崩壊時の秘密資料公開によつてですが。この大粛清が、まさに、非ロシア人で初めてのコミンテルン書記長デイミトロフ、反ファッショ統一戦線・人民戦線政府の時期なんです。スペイン戦争があり、フランス人民戦線政府があり、独ソ不可侵条約の直前までです。コミンテルンの歴史で一番民主的だといわれた時期に、ソ連国内では大粛清が進行している。

小島 そうですね。ルート・フォン・マイエンブルク『ホテル・ルックス』（大島かおり訳、晶文社、一九八五年）の背景になった時期ですね。

加藤 はい、外国党指導者・亡命者の宿舎『ホテル・ルックス』の住人たちの多くも、「人民の敵」「スパイ」の汚名をきせられ、銃殺されました。『序説』編集のかたわら、これは自分の個人研究としてスターリン粛清犠牲者探求をやっていたものですから、人民戦線論の復活程度では、とても先進国革命なんていうのは無理だと実感しました。そうしたら、アルチュセルたちが、戦後のフランス共産党だつてこんなにひどいという話を始める。

小島 私もデイミトロフとかピークとかを読んでも、ただの政治演説で、前衛党論を相対化するという部分がなければ、ただの方便にすぎないとは思っていました。

加藤 ええ。トリアッチの平和主義だつて、

似たようなところがありました。基本的に「労働者の祖国」ソ連防衛です。だから、イタリア共産党が最良だといわれていたけれども、これらもどうも怪しくなりました。ソ連が崩壊して出てきた秘密資料を見たら、特にデミトロフは、ひどい。

小島 ごりごりのスターリン主義者ですね。

加藤 自分に忠実な人物は擁護するけれども、異論をもつとこいつは怪しいとレッテルをはり、コミンテルンからソ連の秘密警察に売り渡す役割をしていたんです。

小島 私はブダペストで、デミトロフ通りというところに住んでいたんです。一応デミトロフの銅像があつて、毎日その顔をバスから眺めていました。ブルガリアも何回も行きました、ソフィアのデミトロフ廟にも行

かとう・てつろう◎一九四七年生まれ。一九七〇年、東京大学法学部卒業。その後の経歴はこのインタビュー本文にある通りである。一九七八年に名古屋大学法学部助手となり研究界に転じ、一九八〇年、一橋大学社会学部専任講師、翌年助教授、八九年に教授。二〇一〇年に同大学を退職。著作は『国家論のルネサンス』（青木書店、一九七八年を単行本の皮切りにきわめて多く、コミンテルン史、日本共産主義史、政治学、政治史に及ぶ超域的な研究で知られる。なお加藤氏のウェブサイト「加藤哲郎のシチズン・カレッジ」(<http://www.frlj4u.or.jp/~katote/Homef.html>)を参照。

ったものです。あれは小スターリンですよ。一種のね。

加藤 だから、コミンテルン第七回路線の復活のレベルでは駄目だと考えたのです。理論の上で言うと、当時のソ連・東欧圏のものでは、メドヴェージェフ、ソルジェニツイン、サハロフのような異端派の書物が役に立ちました。東欧では、先述のユーゴ「ブラクシス」グループとか、東ドイツのルドルフ・バーロ、ロベルト・ハーヴェーマンなどがそうです。現存社会主義（real existierenden Sozialismus）という価値中立的言葉を使つたのは、バーロが初めてで、そこから自由な社会批判が可能になるわけです。コーディングたちは、それほどじゃなかった。コラコフスキーのように、ワルシャワ大学の教授でありながら、ポーランド共産党に対して異議申し立てをしていく思想家が現れた。こうして戦前型のコミンテルン、あるいは私流に言えば、共産党そのものの限界が明らかになるのが、ちょうど『序説』を編集している時期だったんです。

私は、藤井さんたちには、編集者として挑発的に言つたことがあるんですけれど、「レーニンに帰れ」では駄目だと（笑）。これは

今でも藤井さんとは評価の違う面です。中野さんは「マルクスに帰れ」なんだけれども、これにも私はちよつと距離を置きます。だけど、編集者ですから、そこは思い切つて書いてもらうのが私の役割でした。

影浦 「レーニンに帰れでは駄目」というのは創造的な理論を作るために権威や原点に依拠しては駄目だということですね。

小島 私だったら、イエスに帰れとか言うけれど（笑）。

加藤 原始キリスト教に帰れというのも、当時ありましたね。カウツキーの『原始キリスト教と共産主義』が有名です。私は初期のドイツ社会運動の文献の中では、カウツキーやベルンシュタインはだいたい読み直しました。当時西ドイツでは「新しい社会運動」が始まつて、そういう本がいっぱい復刻されていました。後に緑の党やエコロジー市民運動になる流れです。

小島 個人的な話で恐縮ですが、私なんかはベルンシュタインとかをその後一生懸命読んだほうです。清水幾太郎などを入門にして関嘉彦を教科書にしながら読んで行きました。それよりもつと魅力があつたのは、アメリカの二〇世紀のいろんな社会科学ですね。



中野徹三蔵書から

同時にポストモダニストの破壊的影響も身にまとい、近代を脱構築する視点も影響を受けました。漸進的なベルンシュタイン的変革を追求して近代をいわば完成させるだけでなく、それを超えるためには近代社会が有するメカニズムをこそ分析せねばならないのではないかなど。それでシカゴ学派からイーストンなどの現代政治学、そして社会システム論から構造機能分析に至る流れのほうもつと興味が出てしまった。さつきも言いましたけれども、田口・不破論争以降、マルクス主義は基本的にはもう駄目、読まなくていい、

買わなくてもいいと、はつきり見切りを付けた。ロストウから開発経済学の基本に進んで、これで講座派マルクス主義の問題群も相対化する視点を心得て、日本マルクス主義も興味を失いました。内田芳明の『ヴェーバーとマルクス』（岩波書店、一九七二年）も文化論としては面白かったけれど、ああした視点でウェーバーとマルクスを連絡させる方法よりもパーソンズが社会システム論の先駆者としてウェーバーにオマージュを捧げているような読み方しかウェーバーは私にはできませんでした。ただずつとあとになってアルチュセールとか廣松氏のマルクス理解は社会システム論的な知見とさほどの距離はないと気がついたのですが、マルクスが全部そう考えていたという書き方はもう説得力を持ちませんでした。佐々木力氏も独創的な科学史の研究は仰ぎ見るしかありませんが、『生きていくトロツキイ』（東京大学出版会、一九九六年）のように「全部トロツキイが考えていた」式の議論は成功するでしょうか。

加藤 当時は、マルクスからウェーバーやパーソンズに乗り換える、あるいは統合するという議論の流れがありました。「マルクスとウェーバー」というのは日本独特の問題設定ですし、われわれ政治学の仲間でも、田口さんが『政治の科学』（あゆみ出版、一九七二年初版、青木書店、一九七四年）を、加茂利男さんたちと出していますね。加茂利男さんなんかは、そのあとパーソンズ研究を進めていくわけです。私は遅れて政治学研究の世界に入るんですけども、パーソンズでもどうも落ち着かない。この理論枠組は果たして何のために作られたんだろうかと思っていたら、山之内靖さんたちの総力戦体制論ができて、了解できた。結局、第二次世界大戦時のアメリカの社会科学動員の理論枠組だったという位置づけです。社会システムはパーソンズでマルクスの土台・上部構造論に対抗する。唯物史観の発展段階論との対抗はロストウの近代化論になる。それから、レオンチェフ、クズネツツの経済学もそうですね。

小島 産業連関表と国民所得論ですね。

加藤 はい、産業連関表、国民所得論がワンセットでマルクス主義の再生産論に対抗し、ナチスや日本の戦時生産力を分析し、戦後は国連やOECDの経済統計の土台となる。こんなかたちで、戦後の社会科学でのアメリカ社会学の支配、近代経済学・近代化論の世界制覇、文化人類学や社会心理学の勃興の原

型が、戦時アメリカの総力戦体制下で作られる。その最大の目的はナチスや天皇制日本の敵国分析で、全体としてソ連のマルクス・レーニン主義に対抗するかたちになっている。

小島 パーソンズも、ナチについて『社会体系論』で詳しく書いていますよね。

加藤 はい。それに協力するのが、フランクフルト学派のフランク・ノイマンやヘルベルト・マルクーゼらアメリカに亡命したユダヤ系ドイツ人たちです。これは最近アメリカに通つてやっている研究で、私の仮説として言うと、原爆製造のマンハッタン計画の社会科学・人文科学版になります。これが近代化論と地域研究を通じて戦後世界に広がり、硬直したソ連型マルクス・レーニン主義に勝利するのが冷戦期でしょう。

小島 なるほど。パーソンズもハーヴァードで共産主義研究を促進する中心になり、同時に日本近代化も重要な研究対象とし、ライシヤワーからベラーに至る日本近代化論のフレームを整備しますね。私はロストウの近代化論は経済成長論に一元化してマルクス主義の土台Ⅱ上部構造モデルのネガに陥る危険性を感じますが、パーソンズからベラーに来ると社会システム変動論としてのしつかりした論

理を実感します。もっとも私は、一般理論としてのパーソンズは処世訓もしくは箴言のようで、あそこまで一般理論化したら、一般的に当てはまる代わりに、理論としてよりも道徳に近づいてしまうような感覚もあるのです。

加藤 抽象的すぎるから。

小島 抽象的すぎますし、どこへでも当てはまりますから。さらにA G I L図式にしてもさらにそれぞれのディメンジョンに入れ子がいって、土台Ⅱ上部構造論を形成している一元論を克服したのはいいとして多元論の各「元」の認識が結構曖昧でどうでも言えそうな感じがしてしまいますね。

加藤 これも最近はずきりしたのですが、パーソンズと一緒に社会システム論を出したエドワード・シルズが、C I A（中央情報局）の前身の戦時OSS（戦略情報局）の社会学者動員担当で、パーソンズを協力者にリクルートする。日本研究について言えば、ルース・ベネディクトの『菊と刀』になる。簡単には私の『象徴天皇制の起源——アメリカの心理戦「日本計画」』（平凡社新書、二〇〇五年）にスケッチしておきました。

小島 話題が『序説』からその後の学問的展

開に移りつつあるところで、いったんここでこの会話を終了し、誌上討論に委ねたく存じます。本当に貴重なお話をありがとうございました。

（二〇一三年五月二日 国立の加藤哲郎邸にて。書誌情報に関して大月書店の出版物には刊行者名を付けていない。）



左から岩間優希・小島亮・影浦順子

討論1

『スターリン問題研究序説』をめぐる経緯

佐々木 洋

（札幌学院大学名誉教授）

加藤さんがいう、『序説』の「企画に巻き込まれた」佐々木の立場からいくつか補足します。

（一）動機のひとつ——自分がいかに無自覚のうちにスターリン主義に汚染されていたか、の発見

『序説』編著者のひとりの中野徹三さんは、初対面の方々のいる懇親会などで、「佐々木君は若いころ、大変まじめな活動家でした。例えば、白鳥事件を、ながい間、冤罪事件と信じていたようです」と、私の「他己紹介」をすることがありました。「まじめ」という表現は、分かりにくいですが、私は、学生と院生の時代に、かなり「忠誠な」活動家だったのはたしかです。不勉強の裏返しに、信じ

やすい学生・院生時代を過ごしました。

この草稿を書くため、最近しばらくぶりに、やはり編著者のひとりである藤井一行先生の画期的な労作、『社会主義と自由』（一九七六年刊）をひも解きました。するとすぐに、冒頭の序文で、「社会主義と自由」をテーマとする研究をとおして、「マルクス主義についての自分のこれまでの理解がいかに無自覚のうちにスターリン主義に『汚染』されていたか」を痛感されたとお書きになっている箇所が目にとまりました。藤井先生が、そのような自己分析をされた契機は、一九六八年のソ連滞在のご経験と、その直後のワルシャワ条約機構軍によるブラハの春の圧殺であつたようです。

妥協を許さない社会思想家として知られる

藤井先生が、そのように仰いますと、私のような不勉強もののケースをもちだすのはとても気が引けるのですが、私もあるとき、あとで述べますように、自分の言動に、スターリン主義に汚染された面が多いことが分かってきたとき、愕然としたことがあります。

実は、私が、非力と不勉強をわきまえながら、それでも敢えて、『序説』第三章として拙稿「スターリン主義と「トロツキイ問題」——「工業化デーゼ」をめぐる社会主義論の一考察」を書くに至った動機のなかに、そうした、つい先ごろまでの自分の認識が、大変な誤りだったことへの忸怩たる思いがあつたことは間違いありません。

私は、「札幌唯研」の会員でもなく、「スターリン問題研究会」を立ち上げる計画についても、圏外にいて、たまたま、中野さんと同じ職場にいた関係から、「研究会」の発足を聞き、オブザーバーとして参加させてもらった人間でした。したがって、ここでは、『序説』の要におられた中野さん、藤井さん、加藤さんの、正史というべきオーラルヒストリーとは別個に、『序説』にはこういう面もあります。また、という付録の話をしたと思います。

また、そのような「付録」があるほうが、

マイナーな発言にしかありませんが、当時の状況や、当時の歴史的な位相を考えるうえでの、半面の素材を提供できると思うからです。アトラダムですが、以下が付録です。

最初は、拙稿第三章の意図と、執筆当時の執筆の舞台裏についてです。

次に、ミイラ取りがミイラになった「トロツキー研究」のこと。

第三に、ソルジェニーツィンとメドヴェージェフ双生児から受けた影響。

第四に、「スタ研」の始まりと私の本業。

第五は、加藤さんのいう、『序説』の、「意図せざる」結果と反響に関して。

最後は、いささか宣伝くさくなりますが、『序説』が機縁となったメドヴェージェフ双生児との交流です。

(2)『序説』第三章の主眼と執筆当時の舞台裏

2-1) 加藤インタビューにあるように、加藤さんと同じ六八年世代の海野八尋氏が、『日本の科学者』誌(七八年五月号)に『序説』評を寄せました。海野氏は、『序説』の刊行は歓迎すべきことで、執筆陣の一層の活躍を期待すると述べたうえ、大変有難いことに、各章に逐一、批判的なコメントをしてくれま

した。私の分担章に対しては、論旨に賛成できる側面もあるが、「経済建設におけるトロツキーとスターリンの対立を、当時のソビエト経済の実情と関連させて検討しないと両者の対立の意義が鮮明にならない。この点に触れている既刊(例えば岡本正氏や上島武氏の著書のこと(引用者))の研究以上の掘り下げがないことに不満が残る」と指摘しています。

「日本科学者会議」と縁のない私は、当時、このご書評に気づかず、海野さんに対し大変な失礼をしました。しかし、海野氏の指摘は、私の甚だ痛いところをグサリと突いており、何らの反論の余地もないものでした。

拙稿第三章は、トロツキーを提案者とする一九二三年の第一二回大会「工業化テーゼ」を取りあげ、この大会の主要論点を紹介することにより、その後、スターリン派が、トロツキーを「レーニン主義の敵」として、あるいは「反革命分子」として糾弾する場合に、常にその論拠としてきた、トロツキーが「ネップを否定した」とか「労農同盟を無視した」という批判などが、まったく歴史的な事実に反することを論証しようとしたものです。

海野氏は、私の意図は認めつつ、然るべき

先行研究を踏まえた論考にはなっていないと批判したわけでした。

レーニンが死の床にあった一九二三年春の、「工業化の大会」といわれた一二回大会は、革命政権がネップ(新経済政策)に移行してまる二年後のことです。レーニンが銃剣(労農赤軍)を突きつけ、農民から食糧を強制調達する「戦時共産主義」の間違いに気づき、市場の容認と農民との和解に転換して以降、農村と農民経済は比較的順調に回復していきますが、今度は、回復の進む農村経済からの工業品への需要の拡大に都市の工業が適切に対応できなくなっていくます。工業設備の不足と極度の老朽化が深刻になっていました。「工業化」とは、都市の工業に課された急速な回復・増産と、そのための固定資本の更新と新規投資の財源をどうするかという問題でした。スターリンによる一九二八年からの「五カ年計画」方式による「工業化」は、その財源を、まさに農民からの過酷な収奪に求め、やがてそれが、農業の「強制的集団化」につながっていきます。

トロツキーが提案した「工業化テーゼ」は、ポリシェヴィキ党が、工業の急速な拡充の必要を確認するとともに、農民との「同盟」ス

ムイチカ」の重要さをも再確認するものでした。それゆえ、トロツキーの工業化思想に、農民への軽視とか、統一戦線の欠落とかを見出し、トロツキーを弾劾するのは間違いです。

農民敵視の「戦時共産主義」の誤りは、レーニンを含むボリシェヴィキ共通の誤りでした。「二二回大会テーゼ」は、工業化のための資金源の課題を明示できませんでした。トロツキーにも、他の論客にも明示できなかったのです。トロツキー派のプレオブラジェンスキーの「原始的蓄積理論」には、農民からの無慈悲な収奪を連想させる面がありましたが、しかし、彼が実際に、農民からの過酷な収奪を提案したわけではありません。プレオブラジェンスキーは、急テンポの工業化のためには工業内部の蓄積（工業労働者の勤勉性）だけでは足りなくなるといふ、ボリシェヴィキ全体が抱える難問の、純理論的な骨格をクリアーに描いたのです。

2―2）私は、右の論稿を七七年九月末に何とか書きあげ、大月の加藤さんに送りました。加藤さんからは、何度も論旨のゆれや、意味の不鮮明な箇所の照会があり、その都度、補足をしたり、書き直したりしました。

『序説』は七七年一二月に刊行されるので

すが、その三か月前の、加藤さんからの九月六日付けの「督促書」には、九月一杯までに原稿を提出しないと、年内の刊行は困難であるという檄があります。その二〇日前の八月一五日付のやはり加藤さんからの、「暑中見舞い」状は、とくに私個人に対して、「短くてもかまいませんから、とにかく、一論点でも提示しうる論文をぜひお願いします。中野・高岡先生とよくご相談を」という朱筆で締めくくられていました。

実際、期限通り原稿を出された藤井さんの迫力と、加藤さんの大月編集部側の「危機感」とは、他の執筆陣に対し強烈な印象を与え、それを背景に、中野さんが、たぶん九月の上旬だったと思いますが、私の自宅まで、「督促」に見えました。執筆期限のこととさることながら、私の論考のレベルも大いに気がかりだったのでしょう。

八月時点ではまだ、「スターリン批判」とトロツキズム」について何か書くという程度の漠としたテーマ案を、「スターリン主義と「トロツキイ問題」——「工業化テーゼ」をめぐる社会主義論の一考察」という、まさに「一論点」だけに絞りこみ、実際に、試行錯誤の執筆を開始したのが八月末か九月初めであつ

たと記憶します。

ところが、ソ連共産党（ボ）第一二回大会の「工業化テーゼ」を論ずるというのに、わが佐々木君が、必須の原典であるボルシェヴィキ党第一二回大会報告と討議の全議事録を使用しないというのは大変困る、というメッセージであつたと思われたのですが、金沢の藤井先生から、分厚いロシア語原典が送られてきました。しかし、私はロシア語が皆目、出来ない訳です。当時の日ソ協会の「ロシア語講座」に通つて、出席率が良いからと「中級クラス修了書」を貰ったのですが、それで「議事録」が読めるようにはなりません。私を「救つて」くれたのが、南満州鉄道（満鉄）による労働露国調査資料邦訳シリーズの第二十五篇『露国工業経営に関する指導的意見』でした。これは藤井さんから届いた露文原典の忠実な邦訳資料でした。私はこうして、大会じたいが「工業化大会」といわれた一九二四年の第一二回大会の「工業化テーゼ」論議の紹介と引用を邦文文献と露文文献の双方を参照しながら進めることができるようになりました。

海野さんが指摘された先行研究とは、具体的には、岡本・上島・建林隆喜共著『現代社

会主義経済論』（一九七四年）と、わが『序説』刊行の四カ月前に出た上島武氏の単著『ソヴェト経済史序説』だろうと思われませんが、前者について、不勉強の私は存じあげず、後者については、上島氏のトロツキー観およびブレオブラジェンスキー観を知って非常に勇気づけられました。拙稿では、三か所ほど、上島著に依拠している旨、注記してあります。ただし、当時の私の力量では、非常に優れた上島著の内容全体を適切に理解していたとは言えません。

『序説』刊行後の反省会で、読者から寄せられた反響を素材として提起された、「先行研究、当該問題についての研究史についての言及の弱さ」も、まさに、海野さんの第三章批判と同じ指摘です。

こうした批判点は、読者から現に批判を受ける以前から、編著者と編集部も懸念していたことであると私は感じていました。具体的には私の問題点であり、第三章にかかわる問題であるからです。「先行研究、当該問題についての研究史」を踏まえるべきこと、その懸念が図星となるような論稿では困る、いうメッセージは編著者と編集部が当初から懸念していた難問だったろうと思います。それは

また、とくに私に対する注文だと分かっていたましたが、しかし、私の非力ではいかんともしたい課題であり、それをクリアすることはできませんでした。

『序説』刊行三か月後の七八年二月の「文責・加藤哲郎」とある「読者カード分析」によりまずと、読者からの批判は、「a」スターリン「個人」に問題が結局限定されているのではないか？、「b」歴史的背景を含め、歴史の中に位置づける視点が弱いのではないか？、「c」『科学的社会主義』の立場から書かれた意義は認めるが、これまで「正統派」の外では「常識」とされていたものをこえていない、ないしは「やきなおし」ではないか？」といった諸点に集中している、と紹介したうえ、これらは、本書の編集作業の中でも予想されていた「声」であって、謙虚にうけとめる必要があらう、と指摘しています。加藤分析によると、読者からの批判はほかに、「マルクスに帰れ」「晩年のレーニン基準」的発想Ⅱ方法に対する疑問などとして寄せられていたとのことでした。

編著者三氏の論考には、該当しませんが、こと第三章に関しては、批判が全てびつたり当てはまります。

繰り返になりますが、私は、そうした「声」のあることは、担当の章を執筆する前から知っておりまして、中野さんや藤井さんが、私の論稿の出来栄を懸念していたことも分かっていました。しかし、開き直るようで申し訳ありません。私の力量と時間的猶予のなかでは、如何ともしがたいものでした。そして、不遜なこととお叱りを受けそうですが、当時の意識では、たとえ学術的な価値においてはほとんど無内容に近いものでも、書いて活字にする意義があるのではないかと考えていたのです。

加藤さんはインタビューで「佐々木さんは相当意識していたかもしれない」と発言していますが、たとえレベルの低い論稿であつても、この際活字にする意義はあると、自分に言い聞かせて書いたという意味では、加藤さんの言うニュアンスとは異なりますが、「意識していた」ことは事実です。

それは、『スターリン問題研究序説』として刊行される書物が、「トロツキー問題」を取り上げない書物として出るのであれば、刊行する意義も激減してしまうだろう、という思いに端を発するものでした。

私の意識では、「トロツキー問題」の柱が

ない「スターリン主義批判」はありえないように思っていたのです。

そこで次に、私自身がはからずもトロツキ―と遭遇したその出会いを紹介しましょう。

(3) 非力な研究者のミイラ取りがミイラに

3―1―) ことの起こりは、私が、修士課程を終わる満二六歳のときに、手書きの、あまりばつとしない修士論文だけの業績で、札幌短期大学商業科（のちに現・札幌学院大学に吸収）の「マーケティング（商業経済論）」の

担当者として、自分でもあつけないほど簡単に就職が決まったことからはじまります。現在の大学院生やポスドクの方々の大変な就職難の時代には信じられないことです。一九六九年春のことでした。日本経済の高度経済成長期のピークに大学・短大の新增設ブームもまた本格化していて、私のような限界的な大学院生でも比較的容易に「命がけの飛躍」ができた時代の恩恵を受けたのです。当時の弱小私大・短大には修士資格を取得したばかりの同期の新任教員が少なくありませんでした。

私は、大学院二年目の年に、北大の農学研究科の大学院生協議会の副議長をしていまし

たが、翌年度に博士課程に進学した暁には、全学の大学院生協議会の主要役員の一人になることが「内定」しておりました。

ところが、修士論文をまとめていた六九年二月に、私は指導教授から急に呼び出され、「君のような院生には、博士課程に進んでも、然るべき就職先は見つからないかもしれない。ごく最近、ある私立大学から、誰か院生を推薦するようにという依頼が来た。私は君を推薦しておいた」と引導を渡されてしまいます。

私は学部生のころ、民青系の運動に明け暮れ、勉強しませんでした。そのため少しは勉学を挽回したいと、修士課程に拾ってもらったのですが、なかなか足を洗わないので、指導教授が観念していたのだと思います。

ところが、六八年の日大闘争・東大闘争につづいて、六九年春には北大でも全共闘系によるゲバルトと封鎖騒ぎが始まり、私以外の、博士課程に進んだ仲間のみならず、とても落ち着いて研究する状況にない環境に突然追い込まれてしまいます。二四時間が自由に処分できる時間であり、しかも月給がもらえる立場に急変した私は、同僚から大変羨望の眼で見られる存在となり、こうしたコントラストの中

で、自分は何をなすべきかが鋭く・重く問われました。封鎖騒ぎの圏外の安全な仕事場にいる研究者として、過酷な環境におかれた同僚たちに報いる研究テーマが何かあるのではないか。三月末から四月初めにかけて考えました。ある日、北大の体育館近くで、ヘルメットと手拭いで顔を隠し、角材や鉄パイプで威嚇する、全国系列ごとに分かれたヘルメット部隊のジグザグ行進を見ながら、私は、にわかに「トロツキー批判」ないし「トロツキズム批判」の重要性に思い当たったのです。

当時まで私は、ある意味で、まじめで忠実な民青系活動家の一人でしたから、全共闘系も革マル系も、ともにトロツキスト暴力集団であると思込んでいて、「トロツキズムがなぜ凶暴な全共闘や新左翼のような小ブル急進主義として再生産されるのか」を解明できれば、少しは、友人らの労苦に報いることができると思ったのです。

幸い、赴任先の札幌短大の図書館には現代思潮社版の第一期・第二期『トロツキー選集』とその補巻が全巻揃っていました。大月版『スターリン全集』もありました。そこで、適宜、ドイッチャーの三部作（武装せる預言者・トロツキー／武力なき預言者・トロツキー／追

放された預言者・トロツキー」とE・H・カ
ーの二部作／五巻本（ポリシェヴィキ革命／
一国社会主義）を参照しながら、記憶が精確
とはいえませんが、半年余りか一年をかけて、
とにかく、『トロツキー選集』を全巻、読破
してみました。

ところが、困ったことに、トロツキズムの
批判的説明を意図して、まずはトロツキーの
言説を知ろうと読み始めたはずなのに、当の
トロツキー本人の魅力に惹かれつつある自分
の変化に気づき始め、悩みました。これでは
まずいと思う部分も自分のなかにおいて、逆方
向へのねじを回します。こうして榊利夫著『現
代トロツキズム批判』や宮森繁著『トロツキ
ズムとはなにか』、共産党の出版部による『挑
発者 トロツキストの正体』などを何度も精
読しますが、次第にもう効き目がなくなつて
いきます。私と似たような悩みをもつ読者が
いたのかも知れませんが、「民主的」な活動
家たちが迷わないようにと、七〇〜七一年に
大月から、坂井信義・村田陽一編訳『レーニ
ン主義の敵―トロツキズム』と、坂井信義訳
『革命か冒険か』が相次いで刊行されました。
そこで、私は月給取りでしたから、坂井訳も
村田訳も出ると直ぐ自費で購入し、坂井氏や

村田氏がトロツキーを「冒険家」とか「レー
ニン主義の敵」とかと断定する根拠と措定し
ているらしい箇所を探して、「スペイン革命」
や「テロリズムと共産主義」などをふくめ、
トロツキー本人の言説との照合をしてみる
日々もありました。

トロツキーを酷評する坂井訳や村田訳の大
月本を読み、ドイッチャー三部作とE・H・
カー二部作のトロツキー観を対照してみて、
一九七一年〜七二年には、ハッキリと後者に
軍配をあげるようになっていました。が、それ
でも、私の判断は十分に確信あるものではあ
りませんでした。

3―2）それではなぜ、私がトロツキーにこ
だわったのか、少し補足をしておきましょう。
加藤さんや海野さんの六八年世代とはほん
の数年の違いですが、時間差があるという事
情があつたと思います。

六〇年安保当時の、樺美智子のショッキン
グな事件は、私たちの学年が高校三年のとき
でした。私も静岡の駿府城近くで高校生集会
があるという知らせを、通学の自転車置き場
に撒かれた高校生向けチラシで知り、友人と
一緒に清水から静鉄電車に乗って、集会とデ
モの見学に行った記憶があります。

六二年春に大学に入ると、北大キャンパス
には、六〇年安保の余韻はあるものの、道学
連や各自治会執行部が、クラスオルグ等で提
起する課題は、何といっても米ソ核実験反対
でした。文学部自治会と、ごく少数の学寮自
治会をのぞくと、当時、主導権を握っていた
のはマル学同と言われたグループです。札幌
医大も北海道学芸大学も同様だったと記憶し
ます。フルシチョフによる史上最大の五〇メ
ガトン水爆実験をふくめ、米ソが核開発で凌
ぎを削っていました。誰にも異論のないはず
の米ソ核実験に対する反対運動でしたので、
わがクラスでもこぞって道学連のデモに呼応
していました。常時、一〇〇〇名を下らない
学生を集めては街頭に繰り出していたと思い
ます。

もしも、寮歌『都ぞ弥生』で知られた教養
部生向けの恵迪寮（けいてきりょう）に入寮
できると、生活費が格安になると聞き、寮生
活を知るのに、頻繁に恵迪寮に見学にいきま
すと、寮生大会がしょっちゅう召集されます。
その大会を見学していると、立錐の余地もな
い集会場で寮生が二派に分かれていて激しい
論戦を繰り広げており、いつもきまって執行
部側のマル学同派が、ダブルスコア以上の大

差で民青系のグループを打ち負かしてしました。

私は選考試験に落ちて入寮できませんでしたが、寮生の友人が多かったのでよく寮に泊まりに行きました。

全共闘系やゲバルト系新左翼が角材をふりまわす以前のことでですから、議論は白熱していても、ゲームのルールは公平で、多数決原理が立派に貫徹していました。それにしても民青系は、見るも無残な少数派として孤立しているようでした。それもそのはずです。前年（一九六一年）八月の原水禁世界大会は、ソ連や中国の公式代表団も含めて、「今後、最初に核実験を再開する国は人類の敵である」と宣言したのですが、何と、ソ連政府がその八月中に、ベルリンの「壁」を構築するとともに、九月一日から一方的に核実験を再開しました。これに対し当時の野坂参三共産党議長は、「たとえ死の灰の問題があらうと大の虫を生かすため」にソ連を擁護するという声明を、同日付けでアカハタの号外に掲載しました。翌年の六二年八月にはソ連は、まさに原水禁世界大会の開会期間中に核実験を強行します。こうした最中に、民青系の活動家が、「ソ連の核実験は米帝国主義に強い

られた防衛的な核実験であり、ソ連が国連で主張している完全軍縮の提案こそが、真の平和的な解決の糸口になるのであって、米ソ核実験反対、スターリニスト日共打倒というスローガンはアメリカ帝国主義を喜ばす、反共主義以外の何ものでもない」と、いくら弁明と主張を繰り返しても、彼らの劣勢はとてども挽回できるものではありませんでした。全国各地で民青系の活動家が押しなべてひどく孤立していたのは、理由があつてのことです。ちなみに共産党の宮本顕治委員長がようやく「社会主義国の核実験でも今後は反対する」と発言するのは、一〇年あまり後の一九七三年七月のことです。

ただし、私は入学翌月の五月以降、石狩川の河口近くの茨戸公園にある北大ボート部の合宿所で寝起きしていましたので、どちらのセクトからも勧誘はありませんでした。しかし、秋の教養部学生自治会選挙の前に、同じクラスの勉強家の学生から「教養一年連絡会議」主催の合宿学習会があると声がかかりました。出てみると、各クラスからも結構、弁舌爽やかな活動家諸君が参加しています。北大では折しも、現役自衛官の理学部受け入れ問題が持ちあがっていて、この課題を、当時全

国的に問題化していた大管法反対や日韓条約反対闘争と結びつけ、教職員組合や大学院生協議会との学内共闘を広めることで主導権を奪い返し、自治会選挙でマル学同系執行部に雪辱を期すというシナリオの活動が始まっていました。私にも、そうした方向性なら、専ら「米ソ核実験反対、日共スターリニスト官僚打倒」を叫ぶマル学同派の主張に比べ、より展望のある路線のように見えてきました。私は、この「教一連」のメンバーとなり、その手伝いを引き受けるようになります。とはいえ、ソ連と中国の核実験問題に関しては、民青側の主張に難のあることがずっとあとまで気になっていました。

「教一連」は秋の選挙に負けましたが、翌年二月の選挙では逆転し、民青系執行部が誕生します。その延長上にやがて道学連執行部の主導権も民青系が奪還し、この動きがいわゆる「平民学連」の結成に連動していきます。ただ、私にとつて悩ましかったのは、頭脳明晰で弁の立つ「教一連」諸君が、教養部や他学部の自治会の、また道学連の、いわば「表」の幹部になっていき、私のように話術や思考力に劣る人間には、「裏」で毎晩会議・会議に追われる民青の幹部の仕事がまわってきた

ことです。私が著しく不勉強な学生になった一因でもあります。

一九六三年に米英ソが大気圏内の核実験を禁止する部分核停条約が発効すると、学生運動のテーマから米ソ核実験問題が後景に退き、六〇年代半ばからは、ベトナム反戦の時代に移っていきます。

日大闘争と東大闘争を機に全共闘運動が台頭してきたとき、私は、自分の身近に、全共闘運動の担い手やそれに詳しい知人がいなかったこともあって、彼らの運動の特性がよく理解できず、六〇年安保世代の一部にうけいれられたトロツキズムが、七〇年安保を前に、全共闘運動という新たな装いで再生しつつあるというように誤解していました。総じて一九六九年いっぱいまで、日本共産党が言っていた、「全共闘や革マル派や中核派などのトロツキスト暴力集団」という規定を、かなり真に受けていたと思います。

教養部時代も学部学生時代でも、自分のクラスや学科には、民青系もいれば民青嫌いもいる。マル学同派もいればそのシンパもいました。どの大学でも同じだと思われましたが、私たちの世代では、セクトやシンパの色分けの違いがクラス討議の障害になることはなか

ったように記憶します。私も反民青系の活動家から、君のトロツキーの理解がおかしいぞと、よく説教されることがありましたが、それも友好的な議論のうちでした。

したがって、ここで改めて申し上げますが、私が一九六九年春に、にわかと思い立った「トロツキー批判研究」とは、六〇年代末期に、意見の異なる大学の構成員に対し傍若無人に角材や鉄パイプで襲いかかるようになった、全共闘や革マル派や中核派などのゲバルトを正当化する彼らの理論的・思想的な基礎に、トロツキズムがあるとすれば、そうしたトロツキズムの犯罪的な性格を説明しなければならぬというものでした。

ただし、私が札幌大に就職して、夜・昼の「商業経済論」や慣れない「外国書講読」の準備に追われながら、その合間をぬって、トロツキーを読んでいるということについては、誰にもしゃべっておりませんでした。

トロツキーとトロツキズムの問題に対する、加藤さんと私との受けとめ方の差異には、おそらく、以上のような時間軸のズレと、全共闘にたいする認識の位相が関連していたのではないかと思います。

(4) ソルジェニーツィンとメドヴェージェフ 双生児、とくに後者から受けたインパクト

4-1 『序説』構想が生まれてくる時代背景としては、藤井先生もご指摘になると思いますが、旧ソ連の異論派ないし反体制民主化運動があたえたインパクトも大きいと思われます。

「プラハの春」が鎮圧された一九六八年に、西側メディアでソ連国内の異論派の活動が報道され始めます。サミズダート(地下出版物)のサハロフ著『進歩、平和共存および知的自由』が六九年にみず書房から刊行されて注目されました。この本で異論派の歴史家ロイ・メドヴェージェフが一四〇〇頁もの地下出版物を回覧させていることが知られ、幻の歴史書として西側の関心を集めます(一九七〇年に英語版『歴史の審判に向けて——スターリン主義の起源と帰結』が刊行、邦訳版が一九七三〜七四年に『共産主義とは何か(上下)』として刊行)。

しかし、旧ソ連異論派の存在が広範に知られるようになった契機は何といっても、一九七〇年一〇月のソルジェニーツィンへのノーベル賞授与の発表以降でしょう。日本でも『イ

ヴァン・デニーソヴィッチの一日』や『ガン病棟』、『煉獄の中で』がすでに出ていましたが、それらが文庫本として急速に普及していきます。七三年には長編『収容所群島』の分冊刊行が始まります。

私は『煉獄の中で』が最初で『一九一四年八月』が二番目だったと記憶しますがいつ読んだのかは分かりません。

手持ちの「ソルジェニーツイン」ファイルに収めてある、一番古い部類のコピーが『朝日ジャーナル』誌七四年三月一日号に載った埴谷雄高と木村浩のソルジェニーツイン追放に関する論考や、同月一五日号のロイ・メドヴェージェフの論考『「収容所列島」は無情にも真実だ』（ニューヨーク・タイムス紙載稿の邦訳）、あるいは三月の菊地昌典氏と松岡英夫氏との毎日新聞での連載対談のメモ書きです。そして、このころ、三一書房から出たロイの石堂清倫訳『共産主義とは何か（上）』を貪り読み、分厚い下巻が出るとすぐ走り読みしたのを覚えています。八月にはロイの双子の兄ジョレスの著書『ソルジェニーツインの闘い』（安井侑子邦訳）が公刊され夢になりました。放射線分子生物学者であり加齢学者であるジョレスの『ルイセンコ学説の興

亡』（安井侑子訳）の存在は、ロイ邦訳書上巻の石堂氏の訳者あとがきで知るのですが、金光不二夫訳で七一年六月に出ていました。この本は、七四年に同じ学園の生物学担当教員の鯨島和子さん（故人）から「いい本だから」と譲り受けました。

石堂訳と安井訳の訳者あとがきでは、ジョレスが、ソ連国内で発禁とされた弟ロイの『歴史の審判』と自著『興亡』とともに米国で公刊したかどで、七〇年に一時、カルーガ州の精神病棟に拘禁されたこと、そして、七三年には英国出張中にソ連国籍を剥奪され、以来、ロンドンの王立医学研究所に迎えられて旺盛な執筆活動を展開していることも知りました。当時はまさか、私が後日、ジョレス著『ソヴィエト農業』の邦訳者となり、あるいは、双生児共著の邦訳書『ソルジェニーツインとサハロフ』（二〇〇五年）に拙稿解題「メドヴェージェフ兄弟のソルジェニーツインおよびサハロフとのトリプルな関係」を寄せることになるなどとは夢にも思いませんでした。4-2）ソルジェニーツインのノーベル賞受章と国外追放とを媒介としてめぐりあつたメドヴェージェフ兄弟の存在と二人の世界は、ミイラ取りがミイラとなつた私に、ソ連史を

見る座標軸を提供してくれた観があります。

それにはとくに二つあって、ひとつはトロツキーの全体像をどう見るかに関して、ロシア革命史を鳥瞰する座標軸を示してくれたように思います。ロイのトロツキーに対する評価は至つて辛いものですが、それでもロイは、トロツキーをロシア革命の最大の功労者の一人と見なしており、反革命分子などという評価はどこでもしていないからです。おかげで、私は以後、トロツキー問題で悩むことがなくなりました。

もうひとつは、前述した「自分がいかに無自覚のうちにスターリン主義に汚染されていたか、の発見」です。別のいい方をすれば、「自分も『小スターリン』のひとりではなかったか、の発見」です。

ロイは『歴史の審判』第二部第一章「スターリンの権力横奪を容易にした諸条件について」の第一〇項で、スターリンを支えた残酷で無定見なスターリン親衛隊を特徴づけたあとに、こう述べています。長いですが、全文引用します。

「だから、スターリンは、いやおうなしに、見解と型のちがった人間をも、国家と党の

指導部に引き入れなければならなかった。たとえば、党指導部には、ほとんどすべての点についてスターリンを支持し、彼の助言と指示を遂行したが、彼の多数の犯罪のことは知らないといった比較的若い活動家もいた。この連中は、スターリン側近に特有の若干の欠陥はもっていたが、それでもやはり人民と党に誠実に奉仕しようとしていた。だが、彼らは、政治的経験が不足なため、国内に起こっている悲劇的事件を解明することができなかった。……」。

三一書房版二八四頁のこのパラグラフを目にしたとき、他人ごとではなく、私のようなタイプの人間を指していると思いました。私が一九三〇年の若いソヴィエト国民だったロイの言う第三グループの典型になっていたのではないか。「教一連」幹部がおもての自治会役員として活躍するようになったとき、不勉強で、しかもろくに活動経験がないのに、突然、裏方の民青組織の幹部に拔擢されて以降、私はもっぱら上位下達機構のただの歯車の機能しか演じてこなかったのではないか。そういう自分を発見した思いがしたわけです。

ジョレスとロイのそれぞれのサミズダート（タイプ稿の地下回覧本）は一九六〇年代半ば以前から出まわりはじめますが、その著名な例が、数千名が読んだという、後にジョレス著『ルイセンコ学説の興亡』として海外で出版されるもののサミズダートでした。このタイプ稿の回覧経路は異論派たちの連絡経路と重なるところがあり、二人は、いつとき、作家や物理学者などの様々な色合いの異論派が交流し合う媒介役をつとめました。こうして、とくにジョレスには、カピッツアやソルジェニーツイン、サハロフなどの、多くの人々が面会を求めています。彼らがまた、一九七〇年に精神病棟に拘禁されたジョレスの釈放運動に寄与します。ジョレス著『ソルジェニーツインの闘い』は、ソルジェニーツインの作品をめぐるエピソードのほかに、カピッツアによる、ノーベル賞受賞者でトロツキストの物理学者ランダウの救出劇なども多々紹介されていて、一気に読ませる「文学案内」です。

ただ、おそらく、ロイ『歴史の審判に向けて（邦訳名 共産主義とは何か）』とジョレス『ソルジェニーツインの闘い』の二つを読み終えたところから、その興奮を自分の胸の内

に止めおくことができず、札幌大の夜・昼のゼミの学生に、ソルジェニーツインの文学とロイの歴史学について、熱っぽく語りかけたことがあるのだらうと思われます。七四年五月には、明和生協（札幌医科大学（現札幌学院大学）と札幌短期大学を学校法人「明和学園」が経営していた）の新入組合員歓迎講演会で、私は「ソ連の「反体制」運動のゆくえ——ソルジェニーツインの文学とメドヴェージェフの歴史学」というテーマで講師をつとめています。

同年一〇月には短大夜間部の勤労学生諸君からの依頼により、二部（夜間部）大学祭でも、講演しました。ソルジェニーツインはこの年の二月に逮捕され、直ちに国外追放されています。学生諸君のなかにも、ソルジェニーツイン問題に関心をもつ諸君がかなりいたのだと思います。

札幌大昼間部の校友会は道学連加盟自治会ではありませんでしたが、道学連サマー・キャンプ実行委員会か何かの会合で、キャンプ場での記念講演を依頼できる人はいないかと聞かれて、私を推薦したと聞き、おそらく七五年夏のことであったと思われるが、支笏湖のモーラップ・キャンプ場で、やはり「ソ

ルジェニーツインの文学とメドヴェージェフの歴史学」をテーマに講演する機会がありました。

詳しいレジュメが残っているのは、夜間部大学祭のものですが、「ソ連の反体制運動とソルジェニーツインの二重の悲劇性」というタイトルになっています。内容の七割がたは、ジョレスの『ソルジェニーツインの闘い』とロイの『共産主義とは何か』を受け売りしたのですが、もうひとつ、明らかに、藤井一行先生が一九七六年に上梓された『社会主義と自由』の初出論考から無断でお借りしたものが多く「マルクス主義にとつての出版の自由、社会主義と民主主義」という項目も含まれています。

レジュメだけみると、かなり立派な講演をしたような誤解を与えますが、私自身のオリジナリティのものはなく、あくまでもメドヴェージェフ兄弟と藤井先生の受け売りに過ぎませんでした。

中野先生から、「スターリン問題の研究会」があるから、出てみないかという誘いがあったのは、私が、以上のような流れのなかにいた七四年〜七五年のいつかの時点であつたろうと思われれます。

(5) 「スタ研」のはじまりと、私の本業、「督促」の暑中見舞い

5-1) 中野さんの札幌商科大と私の札幌短大とは、設置場所が離れていましたが、学校法人の事務局は札幌の街中の短大にありました。中野さんは、所属が商科大学でしたが、法人の常務理事も兼務していましたので、私は中野さんとほとんど毎週顔を合わせていました。しかし、中野さんと自分の個人的な問題関心について話すことはありませんでした。したがって、「スタ研」の誘いも、私の「ミイラ取りのミイラ化」を知つての誘いではなかったように思います。

藤井先生とは、先生が札幌大学に赴任されていた時期に、北海道私大教祖の会合や何かの研究会でお会いしたほかは、個人的にお目にかかつてお話しするような機会は、七五年一二月に始まる第一回の「スターリン問題」の研究会の場がおそらく最初であつたように思われれます。

七五年暮れの第一回研究会に大月書店側から来られたのは、篠原敏武さんでした。加藤さんの紹介にあるように篠原さんはその後フインランド女性と結婚され、ヘルシンキ近郊

のカルキラという町に住んでおられました。私も一度、一九八八年五月に北欧諸国を視察した際に、カルキラまで足をのびしたことがあります。

私自身は、「札幌唯研」の会員でもなく、「スタ研」が始まる経緯も知りませんでしたから、当初は、オプザーバーという資格で、出させてもらっているという意識でした。しかし、スターリン問題を研究するのに、経済問題を避けて通れないことは当然のことです。そこで、第一回研究会に出ていた経済学関係者の佐藤俊二さんと私に、いつかスターリン主義と経済問題に関する報告をしてほしいという要請があつたと記憶します。

加藤さんと初めて会つたのは二回目か三回目の研究会の際です。懇親会での自己紹介の際、学生時代に緑会の会長をしたことがあると聞き、事情に疎い私は意味が不明でぼかんとしておりまして。東大法学部の学生自治会の名称は初耳だったので。私には聞きなれないフロントとかメルトとかいろんな流派に出入りしたと語っていましたが、ひよつとしてトロツキーなどはもう卒業済みとの含みで話したのかもしれないと思っていました。以後、定山溪や朝里川での宿泊研究会があ

るとすぐに、加藤さんから大月書店編集部がまとめたメモが逐次送られてきました。この記録により、大筋として、各人の仮テーマやモチーフの変化の様子が分かります。

しかし、加藤メモに示される、私の担当すべきテーマと論旨は、毎回変わっていて、七七年七月末の第一次原稿締切りが過ぎ、八月一五日付けの督促状が届いた時期でも、何をどう論ずるか不鮮明だったことが分かります。

初回か、何回目の研究会かは思い出せませんが、私は、「スタ研」では、トロツキーとかトロツキズムを扱わないのでしようかと質問しました。ロシア史やロシア革命についての全くの門外漢が、にわかにトロツキー問題に取り組んだ経緯を紹介したうえ、タブーということばは使いませんでした、トロツキー問題を扱わないのはまずいのではないのでしょうか、という趣旨の質問をしたと思います。その質問への反応は、トロツキーを扱わないというのではなく、メンバーのなかには担当者がいらないというもので、何かゲタを預けられた感じでした。

しかし、私自身が少しかじったのは、スターリン派によるトロツキーに対する否定的な

評価の是非であって、「トロツキーにかかわる経済問題」というテーマではありませんから、「スタ研」の要請に応えようにも私に当事者能力はありません。そこで、二回目か三回目の研究会で、土地制度史学会（現「政治経済学・経済史学会」）の学会誌（三八号、六八年一月）に載った南塚信吾論稿「ソ連邦「復興期」における工業固定資本問題——プレオブラジエンスキー理論を中心にして」のエッセンスを紹介しました。プレオブラジエンスキーはトロツキー派の経済専門家です。

ただ、私が紹介したのは、あくまで南塚論文の骨子であって自分の研究報告ではありません。しかし、質疑の中で、この論点は面白いので、私が何か、南塚論文を敷衍する論考を書くよう奨めがあったように記憶します。議論ではほかに、左翼エスエル研究の専門家である高岡健次郎氏から、ネップ移行後のボリシェヴィキの農村での立ち遅れを克服するための「農村に面を向けよ」という政策とその失敗を論じた文献があるという示唆がありました。浜内謙著『ソビエト政治史——権力と農民』（一九六二年）のことです。ソヴィエト政治史の大家である浜内謙氏は、その後、周知のように四部作の浩瀚な『スターリン政

治体制の成立』を書きあげ、さらに二〇〇四年には『上からの革命』を上梓します。「スタ研」が始まるころには既に、四部作第一部の「農村における危機」と第二部の「転換」が出ていました。

高岡さんの示唆は大変ありがたいものでした。しかし、浜内氏の業績は質量ともに、当時の私の理解力をはるかに超えるものであり、結論的に、拙稿第三章の執筆にはほとんど生かせませんでした。ただし、この四部作は私が一九九〇年代にジョレスの『ソヴィエト農業』の邦訳に取り組んだ際に、最もお世話になった文献です。

5-2 私の本業。地域開発研究と日本資本主義の現状分析

そもそも、私が「スタ研」にオブザーバー参加したのは、スターリン問題を地元札幌で研究するというまたとない研究会の場で、短大夜間部の大学祭で話したような自分の見解が、一般に通ずるものかどうか確かめてみたいと思ったからで、それ以上でも以下でもありませんでした。つまり、自分がそこで自身の研究報告を行い、それを活字にして世に問うという課題を全く意識しておりませんでした。

というよりもむしろ、本業の経済学のほうでやるべき課題が山積しておりました。

出身学科は農業経済学科です。私が最初に全国誌に寄稿したのは毎日新聞社の『エコノミスト』誌で、一九七二年の九月のことです。ちょうど田中角栄の「日本列島改造ブーム」の頃で、青森県むつ小川原地域の「遠隔地巨大工業基地計画」が注目を浴びていました。

ところが、「改造ブーム」の怪しさの焦点として、青森県六ヶ所村にメディアが注目する一方で、北海道の苫小牧東部開発が、六ヶ所村と対照的に進捗している事態は、全国的にほとんど報じられません。六ヶ所村では農漁民の抵抗があつたのに、苫小牧周辺では異論が表面化しなかったからです。北海道開発の定評ある専門家が、対応に苦慮した苫小牧周辺の幾つもの自治体から調査研究を委託され、私もその調査チームの一員となりました。

地元北海道で、経済企画庁や通産省の意向とは独立して苫小牧研究をしていた研究者は少なく、東京や関西から調査団がくると、まず私を捕まえてヒヤリングをするというケースもありましたし、新聞記者から「取材」されたこともあります。開発問題の連載記事を書いていた「朝日」の本多勝一氏が、現れた

こともありました。

依託研究が機縁で、六ヶ所村や志布志湾、鹿島町、岡山県水島地区など、「開発」で揺れる全国各地の現地調査に出かけ、また、地方の行財政分析に取り組むようになり、こうした流れから、札幌大での担当科目も、「財政学」と「日本経済論」にチェンジしてもらいました。私が、宮下柁次氏（故人）の誘いで日本資本主義分析の共同研究を開始し、のちに御茶ノ水書房から共著『日本帝国主義の現局面（上）』を出してもらった背景でもあります（『日本帝国主義の現局面（下）』は宮下氏の単著）。

一九七八年三月に私は、宮下氏と共編で大学の紀要に、二年ほど北海道拓殖銀行本店調査部の図書室に通いながらまとめた「資料……『日本帝国主義の現局面』」という二五六ページの統計資料集を掲載しています。ということとは、『序説』第三章の執筆は、宮下氏との統計資料の編集作業と併行して進められていたことになります。

私はさらに、『序説』刊行前夜に、第三章を書くだけの研究をしていなかった旨、述べました。それは、私の非力のためであることが基本ですが、ここで述べたような、講義や

統計の編集に追われていた事情もありました。

5-3 暑中見舞いの助言

しかし、オブザーバー参加をしてみて、「スタ研」が想定する研究テーマの柱に、なぜトロッキー問題がないのかという疑問があつたことも事実です。そして、私はオブザーバーでありながら、かなり明け透けに、自分の疑問を遠慮なしに申し上げたと思います。藤井先生は「佐々木さんの挑発にのつた」という表現をなさつたことがありますがおそらく相当不躉な発言をしたことがあつたでしょう。私の不躉な発言をここで正確には再現できません。しかし、つつみ隠さずに言いますと、趣旨としては、こうです。ミイラ取りがミイラになって私が辿りついた考えは、たとえ、私自身にとつて新しい知見と思えるにしても、トロッキーがソヴィエト史における最大の反革命分子などではないなどという事実は、ロシア史の専門家や非共産党系の活動家にはまったくの旧知に属することである。そうすると、今もってトロッキーに対してレーニン主義の敵とか最大の反革命分子とかいうレッテル貼りが繰り返される事情には、そうした虚構を熟知しているはずのロシ

ア史専門の研究者が、党上層部の非を諷めたことがないところに原因があるのではないか……。表現法は違っても、そういう大変不遜な発言をしたのだと思われます。藤井さんが私の挑発があつたと仰るのは、以上のことに関係があるのかもしれませんが。

しかし、先にも述べましたが、トロツキーをとりあげる問題は結局、私にゲタが預けられる形になりました。

自分の非力と課題の重さとのギャップに戸惑い、そこから抜け出せないでいた私の肩を、解してくれたのが、例の、加藤さんの「暑中見舞い」でした。短くてもよい。「とにかく、一論点」でも、と赤字のボールペンで記されていました。私は気が楽になり、中野さんにも高岡さんにも相談せず、何とか第三章を書き上げます。中野さんが私の自宅に「督促」のために訪れたときは、そういうタイミングであつたように思われます。

オウム返しになりますが、拙稿第三章には、様々な限界や問題点が含まれていました。例えば、溪内謙氏の業績をいまいし理解できていたなら、ソ連共産党第一二回大会の決定の前提となる諸条件が、非常に脆いものであることが露呈していく事態を、より広く視野に

収めて思考できていたかもしれません。しかし、私には、そこまで目配りして執筆するだけの素養も時間的猶予もありませんでした。そして、そうした限界を自覚しながら、それでも活字にする意義があると自分に言い聞かせて、原稿を提出したのでした。自分とは、無自覚のうちにいかにスターリン主義に汚染されていたことかと、遅まきながら気づいたあの自分のことです。

(6)『序説』の、「意図せざる」結果と反響に移ります。

6-1) 読者の反応

拙稿第三章に対する書評と読者カードの反応についてはすでに私見を述べました。

加藤分析によると、他の刊行物の読者カードの戻り方に比べると好感度の反応が多いとの事でした。

ただし、私の友人・知人に関して言えば、民青嫌いの友人たちの好感度に比べて、私の昔の仲間たちの多くは、感想を言わないところに特徴があるように思いました。拙論が説得力に乏しいものであつたことによる面があつたからでしょう。呪縛が解けていない友人が多いのかもしれないと思いました。

6-2) 機関紙にみる日本共産党の反応

加藤さんは『赤旗』紙上における大野正一氏、足立正恒氏ら理論幹部の『序説』批判と思われる一連の記事を、「ある意味では意図せざる結果」と見ながら、藤井先生や私は、違う見方をしているかも知れないと述べていました。加藤さんのスタンスは、「トロツキーもブハーリンも正当な歴史的評価がなされればいい」というもので、トロツキー問題が解禁されるかどうかは、編集者として関心なかったとのことでした。

私自身も、「正当な歴史的評価がなされればいい」というスタンスに異論ありません。しかし、「正当な歴史的評価」をめぐる論議を許容できるだけの度量を共産党はもたないし、そのことが、多くの学生生活動家を苦しめ、あるいは青年学生運動における無用で不幸な混乱を長引かせている現実を重視すべきであるという認識の点では、加藤さんとスタンスが異なっていたのではないかと思います。私は、革マルや中核、四トロを含め、仮に、彼らの中に自派の教祖はトロツキーだと主張する人物がいたとしても、彼らがトロツキーを本当に理解しているとは到底考えられないことでしたから、彼らをトロキストと呼

ぶこと自体甚だしい誤りだと主張しておりました。全共闘系については問題外です。したがって、彼らを十把一からげに、トロツキストと称することは、学生運動に多大な混乱や犠牲をもたらすとも考えていました。

私からみると『序説』刊行を前後して、「暴力集団」に対する表現法に微妙な変化が現れました。

『序説』公刊以前であれば、『赤旗』記事の見出し項目として「トロツキスト暴力集団」と称していた同じ「ゲバルト系」集団を、どうやら、「ニセ左翼暴力集団」と総称する言い方をするようになったのです。

それを如実に示すのが、七八年三月一二日付け『赤旗』に掲載された全学連第二八回大会における不破哲三書記局長のあいさつ全文です。ここには、ゲバルト系の暴力集団との闘いの重要性はでてきますが、トロツキストという呼び方は一切出てきません。

同年同月二七日に四トロなどのゲバ集団が成田空港管制塔に乱入し機器を破壊する暴挙に及んだ際、やはり、トロツキストという見出し項目は消え、ニセ左翼暴力集団と呼んで糾弾しています。

もう少し細かく跡づけますと、『序説』刊

行日である一九七七年二月一日と翌十六日の『赤旗』三面には、「大学の暴力集団トロツキストとは何か」という「上」「下」の大きな記事がでています。記事は「さいきん、京大や中大、東大などいくつかの大学でトロツキスト暴力集団による暴力事件がいろいろいわれています」という書き出しから始まっています。

一週間後の一二月二三日付け同紙一面には、「京大七自治会が民主化」の記事があり、本文は「トロツキスト暴力集団の暴力一掃、大学の自治、学問の自由を守る学生の運動が大きく前進している京都大学で……」の書き出しになっていました。

ところが、年が明けた一月九日付け一面冒頭の「京大学生四団体「暴力黒書」第三弾を発表」という六段抜き記事の本文には「トロツキスト」という呼び方はなく、「京都大学のひとにぎりのニセ「左翼」暴力集団が学内十八箇所を不法占拠し、……」という言い方に変わっています。

以上の変化は、『赤旗』の見出し項目上の変化ですから、日本共産党がトロツキを「レーニン主義の敵」、最大の「反革命分子」とみる判断に変化が生じたことを意味するもの

ではありません。

あらゆる系統のゲバルト系集団を、いわば十把ひとからげに「トロツキスト暴力集団」と規定し続けることが、もはや得策でないという判断が働いたものと思われました。何の説明なしに言い方がかわり、何事もなかったように全体が右に倣う行きかたが継承されていました。

6―3) 道党幹部からのよび出し

私は組織を離れて三〇年にもなりますし、愉快でない出来事の多くは忘れたことにしておりますが、『序説』刊行をめぐる正史ではない「付録」の範囲で一件、紹介しておくべき個人的な体験があります。

『序説』刊行後、三回か四回、道党幹部から、拙稿第三章をめぐる私の言動に関連して呼び出しを受けたことがあります。うち二回は、のちに国会議員となる幹部も同席するものとありました。

初回の七八年三月二一日のよびだしの際のメモのみ、手帳に記録が残っています。

呼びだしの要件は三つでした、ふたつが、『序説』からみです。そのひとつは、『序説』執筆者のひとりの橋本剛さんが、組織の承認を得ないでドイツに留学したのは問題だとい

う件で、帰国を待つて橋本さんと意見交換をしたいという話でした。いつ日本に帰国するのか、ひよつとして私に聞けば分かると思つたのかも知れませんが、数年後、同氏は除名処分になります。処分理由のひとつに、上級機関の同意なしに海外旅行をしたことが含まれていると聞いたことがあります。今も、そういう入管機関のような内規があるかどうか、私は知りません。

二つ目は、私が友人たちに出したハガキ(年賀状)で書いたことが、中央と異なる傾向の書物を出したことを強調するように受けとられていて、そういう書き方には問題があるますよ、という忠告のようでした。しかし、この忠告は驚きでした。今はどのコンビニでも年賀はがきの「簡易印刷」をやってくれます。わたしは七八年の賀状に、そのころ出まわっていた「簡易謄写版」を入手し、二〇人くらいの友人・知人たちに『序説』で私が何を書いたかを知らせる「短文」つき賀状を投函しました。これは全くの私信であるわけですが、指導部からすると、私の年賀状は、不特定多数の「読者」に配布した不穏当な「印刷物」に見えたらしく、私にたいする「指導」の必要を感じたのが、よび出しの原因のよう

でした。

二回目以降のよび出しの時期と内容は、よく覚えていません。

ただ、はつきり記憶にあるのは、拙稿第三章のような主張は、日本のトロツキスト暴力集団の犯罪的な役割をあいまいにするもので、党の路線とは相容れない。厳密に言えば規律違反にあたる、というものでした。そして、あと二回ほど、同様の「指導」があつたように思います。「指導」の内容は、前述した榊氏や宮森氏ら理論幹部たちの主張と全く同じものでした。

二回目以降のよび出しは、ひよつとすると、私が七八年三月末に、『赤旗』編集部に送つた質問の手紙に対する、間接的な「回答」であつた可能性もあります。私に対する明言はありませんでしたが、同紙編集部が私に直接返事をだす代わりに、道党幹部が、私を呼びだして、私の質問に対する「回答」を含めた「指導」をしたのかもしれない。後日、そう思うようになりました。

私が編集部に送つた質問書とは、前述の、七八年三月二六日に起きた第四インター派による成田空港管制塔襲撃事件に関する同月二八日付「きょうの社会科」欄の「第四インタ

ー」という説明記事には、多くの疑義があるとして、五項目の質問と意見をのべた手紙のことです。記事は、「第四インターナショナル」は、ロシアのトロツキーが、一九三八年につくつた国際的な反革命の組織です」などと説明していました。

私は、スターリンから見れば第四インターはたしかに「反革命」という。しかし、一九三八年の時点で、ソ連国内でスターリンが進める未曾有の大粛清に抗議し、それに反対する内外の人々を結集するため、第四インターを立ち上げようとした行為は、決して反革命と言えないという考えにたち、いくつか質問しました。

私が質問したさいの見地は、非共産党系の識者には別に取り立てて奇異のものではありませんでした。

(7) メドヴェージェフ双生児研究

「付録」の最後は、『序説』がひとつの機縁になった、メドヴェージェフ兄弟研究についてです。

兄弟には大変お世話になった思いがありましたので、その後も、新刊書がでると必ず読んでおりましたが、しかし、語学力のない私



ジョレス・メドヴェージェフ夫妻と
ロンドンの自宅にて

ささき・よう◎

一九六九年、北海道
大学大学院農学研究
科修士課程修了。
札幌短期大学商業科
助手、札幌商科大学
商学部経済学科助教
授、「財政学」や「日
本経済論」、「景気循
環論」などを担当。
一九八四年、札幌学
院大学に大学名が変
更となり、一九九一
年に同大学教授。

二〇一一年に定年退職。著書や論文などは「佐々木洋教授の略歴および研究・教育業績等」（札幌学院大学経済論集）四号（佐々木洋教授退職記念号）、二〇一二年三月）を参照。最新の仕事として、ネルソン・リクテンスタイン著『小売革命 Retail Revolution』の邦訳書が『週刊金曜日』発行元の金曜日社から年内に出る。

なお、詳細な年表つきの拙稿「日本人はなぜ、地震常襲列島の海辺に『原発銀座』を設営したか？—3・11原発震災に至る原子力開発の内外略史試作年表—」が加藤哲郎氏の「ネチズン・カレッジ図書館」にもアップされている。

が、将来いつか、兄弟の著書の邦訳者になることがあるとは思ってもみませんでした。

しかし、私は、ある偶然からジョレス著『ソヴィエト農業』を邦訳する機会があり、この二〇年ほどジョレスと交流を続けてきました。一方、ロイが一九九九年に来日して札幌にも足を延ばした折に、ロイとも個人的に知り合いました。ジョレスとロイがともに講演をしてくれた大学は、日本では札幌学院大学

と北大だけです。

二〇〇五年に現代思潮新社が二人の共著『ソルジェニーツィンとサハロフ』の邦訳版を出した際、この著作の解題を書いて欲しいと、然るべき方々にお願ひしたようですが、なかなか引き受けしてもらえそうになかったようです。結局私がお引き受けしたのですが、それは私に論評能力があったというものでなく、兄弟と個人的に親交のある日本人研究者が下斗米伸夫氏と、私しかないという事情からだったようです。『ソヴィエト農業』も、ジョレスは下斗米氏に邦訳を打診したようですが、同氏が超多忙だったため叶わなかったと聞いています。

そういう経緯もあり、この二〇年近く、私はメドヴェージェフ兄弟研究を、ひとつの研究テーマとしています。

これは、もとをただせば、『序説』とのかわりから生じたことです。

スターリン批判の研究には、兄弟の共著『知られざるスターリン』（二〇〇三年刊）も必読書のひとつです。

兄弟は、この一月で満八八歳になります。が、現役の著作家です。兄弟の稀有な生きざまに興味ある方は、天野尚樹さんと私が

共訳したメドヴェージェフ兄弟共著『回想 1925—2010』（二〇一二年）をご覧ください。

現在は、協力者の方と、ジョレスの『ルイセンコ学説の興亡』のロシア語原著からの完訳の仕事にとり組んでいます。既刊の邦訳書は、英語版からの重訳です。英語版と露文原著とで、異なる箇所が少なくありません。

名訳のロイ著石堂版『共産主義とは何か』も英語版が底本です。いずれ、露文原著からの完訳版が求められるでしょう。メドヴェージェフ双生児に関心のある若いスターリン問題研究者の登場を切に期待してやみません。

私にとっての『序説』とその時代

藤井一行

(富山大学名誉教授)

一七〇年代——『現代と思想』

『序説』にはそれなりの序説ないし前史がある。

もともと私の専攻分野は、帝政ロシアの解放思想史（主に一九世紀の）であつた。一九六〇年三月に提出した修士論文はベリンスキーを主題にしていた。以来、博士課程（一九六五年修了）から札幌大学助教授時代（一九六七～一九七二）には範圍を広げて、チェルヌイシェフスキー、ドブロリユーボフ、ピーサレフなどを読みあさっていた。大塚金之助の『解放思想史の人々』（岩波新書）の衣鉢を継ぐ書物を書くのが夢で、数百枚もの草稿もできていた。

しかし、一九六八年不意に方針変更を余儀なくされる事件が起きた。ソ連をはじめとするワルシャワ条約軍によるチェコスロヴァキ

ア侵略である。ソ連国内では、スターリン死後、フルシチョフによる「個人崇拜」批判に始まる民主化の過程で言論の自由への動きが生まれていたが、ブレジネフによるクーデターによつてそれがはばまれ、数々の言論弾圧が頻発していた。なかでも国外亡命よりも国内での抵抗の道を選んだソルジェニーツインに対する迫害ははなはだしかった。

そうしたソ連の惨状を見るにつけ、私は「ブラハの春」と呼ばれたチェコスロヴァキア共産党の党と国の民主的再編（「人間の顔をした社会主義」をめざしていた／「行動綱領」一九六八年）——のちのゴルバチョフのペレストロイカ路線を先取りしたような——の試みにひとかたならぬ共感と期待を寄せていた。それだけに、ブレジネフの武力干渉には怒りをおさえることができなかった。

大学の学園祭（一九六九年）での講演を依

頼された私は、「闇の王国の光たち」と題してソルジェニーツイン問題を取りあげた。『闇の王国の光』とはドブロリユーボフの評論で「闇の王国」は帝政ロシアを、また「光」は圧政に抗する民を意味した。そのタイトルを受け継いで、ソ連を「闇の王国」に、かつソルジェニーツインなど抵抗の士を「光」に擬したわけである。のちに（つまり今回の誌上シンポを機会に）佐々木洋さんも同じ時期に同じような講演活動をしていたことを知った。

大学のロシア語科の同僚からは、そんな発言をしているともう訪ソできなくなるぞと警告され、またあるマルクス主義経済を看板とする元同僚＝組合活動家には、重要なのは自由よりも生活だととされた。

マルクス・レーニン主義における表現の自由の問題に切り込むという課題意識を強烈にもつようになったのは、そのあたりにも原因の一端があつたかもしれない。ロシア・ソヴェト研究者でそのような問題意識を明示的に示している者は見当たらなかった（自己満足的なアカデミズムの一隅を別にして）。その問題にはみずからとりくむほかなかった。

まずは初期ソヴェト政権の言論政策。その

将来展望と理念。ロシア革命の指導者とされるレーニンの思想。当時はほとんど自覚していなかったが、のちにスターリン主義症候群などと命名したりする現象にメスを加える試みがこうしてはじまった。

論考は一九七〇年の末にできあがった。私はその論考を友人が勤務する共産党系の雑誌『科学と思想』にもちこんだ。だが、掲載はあつさりこわられた。「資料の恣意的な読み込み」が見られるという理由であつた（ちなみに編集長は山科三郎氏）。翌年の秋にはすでに、共産党機関誌に党幹部の言論の自由に関連した一連の論文が発表される。党文化部長の山下文男「芸術表現の自由と共産主義」（『文化評論』七一年五月）とか蔵原惟人「共産主義と思想表現の自由」（『月刊学習』七一年一〇月）など。拙稿もその動向に沿うものと思つたのだが、山科氏は嗅覚鋭く危険を予感していたのであろう。（もつとも風向きが変わると遠く、旅先の札幌まで私と中野さんに執筆を依頼しにやつてきたが。後述）

そこで前記の友人は拙稿を『現代と思想』にもちこんでくれた。拙稿の意義を理解してくれたのが、青木書店編集長の江口十四一さんであり、新進気鋭の同誌編集担当者の西山

俊一さん（現、窓社主宰）であつた。拙稿は『現代と思想』に掲載された（第六号、一九七一年一二月）。

こうして、季刊の雑誌『現代と思想』のかかわりの時代がはじまる。先頃、『伽藍が赤かつたとき』が特集したあの『現代と思想』である。

私の同誌へのデビューは奇しくも七〇年代の初めの年で、デビュー作は、「社会主義における言論の自由の問題——初期ソヴェト政権の言論・文芸政策をめぐって」であつた。『スターリン問題研究序説』に六年先立つていた。

拙稿は、初期ソヴェト政権とその指導者たちの言論・文芸政策——一九一七年から一九二〇年代末にかけての——を観察し、そこで言論の自由、創造の自由というものがいかに意味づけられていたかをその言論規制政策とのかかわりにおいてかえりみようとしたものであつた。仮説的であるにせよ、私が得た結論はソヴェト政権の当初の言論政策は、ソヴェト・ルネサンスと評されるほど開放的なものであつたということ、そして一九三〇年代以降の言論政策は初期ソヴェト政権が展望していたものから著しく乖離していたものであ

つたことを明らかにした。そして、その事態はスターリン体制の成立と深い関わりがあることを示唆した。

こうして七〇年代のジャーナリズムに輝かしい足跡を残す西山さんとの交遊がはじまる。『現代と思想』での次の仕事は、「マルクス主義と市民的自由」である（一九七四年六月、一六号）。検討課題も広がった。マルクスやエンゲルスは市民的自由の問題をどう考えていたかを調べてみようと思ひ立つたのである。「必然からの自由」の問題ではなく、言論の自由などのまさしく社会的自由についてである。その年の二月、ソ連でソルジェニツインが国外追放の処分を受けたのがきっかけであつた。それまでの私は主體的にマルクスもエンゲルスも読んだことがなく、学習の対象、つまり教典的存在でしかなかったが、はじめて特定の課題意識に触発されて研究することになったのである。にわか勉強ではあつたが、課題に即して『マルエン全集』で索引を活用して調べていくと眼から鱗のような発見があいついだ。ミルの『自由論』に先立つすぐれた自由論に接したこともそのひとつだった。それは今日の「自由」主義世界の言論政策に対する有効な武器となりうるもの

だ。

同じ時期に『民主文学』という共産党系の民主主義文学同盟の機関誌が「ソルジェニーツイン問題をどう考えるか」で特集を組み、私も「ソルジェニーツイン批判」の根拠と論理」という論考を寄稿した（一九七四年六月）。そこでは「ソルジェニーツイン批判」なるものの不当性を明らかにするとともに、ソ連で尊崇される革命的民主主義者ベリンスキーの立場にも反する旨を論じた。

それらの拙稿を眼に留めてくれたのか、あるとき大月書店の篠原敏武さんが当時私が在職していた金沢大学へ訪ねてきた。確か共通の知人であるゴリーキー研究家の山村房次さんに紹介されて、と言っていたように思う。初期ソヴェト政権で教育人民委員（文化大臣に相当）を努めていたルナチャルスキーの訳書を編まないかという企画をもってきたのである。大月書店とは『レーニン全集』の翻訳でかねてから間接的なかわりはあったが、編集部側からの企画持ち込みは初体験だった。快活で、リベラルな思考の持ち主に見えた篠原さんと意気投合した私はすぐに検討を約した。

こうして、ソ連で出ていたルナチャルスキーの八巻著作集から重要著作を選び出し、かつソヴェト初期の党の文芸政策を記した文書を加えて『芸術表現の自由と革命』と題して出版することになった（一九七五年五月）。

ここでいささか脱線して、訳語問題について記しておく。その頃、共産党は「独裁」というマルクス主義の用語を「執権」という用語に変えようとしていた。党の上意下達方式によつてである。既存の訳語でさえ標的にされた。私にも苦い経験がある。

その頃共産党機関紙「赤旗」から執筆依頼があった。たしかソルジェニーツイン問題についてだったと思う。邦訳の『レーニン全集』からの引用に「プロレタリア独裁」とあり、そのまま引用したところ、その訳語を「執権」に変えるようもとめられた。応じなければ掲載を拒否するという。ただし原稿料だけは払うという。『レーニン全集』にある訳文の中の訳語を勝手に改竄することは想定外だった。依頼原稿なのに、脱稿後のこのあしらい！ やむなく「ディクタトゥーラ」という原語で妥協。

そんな経緯があったので、ルナチャルスキーの翻訳や解説にさいしては、はじめから「デ

ィクタトゥーラ」という原語で通すことにした。だがそうした自主規制は、篠原さんには不意だったのではなかったか？ 電話での篠原さんとのやりとりでは、本当に「ディクタトゥーラ」でいいのか念押しがあった。むしろ、無理しなくてもいいよという口吻を感じた記憶がある。こちらは、些細なことで共産党系の読者に初期ソヴェト政権の言論政策を知ってもらうきっかけの機会をのがしてはいけないと思い、あえてそのまま通した。

以来、執筆にさいしては原語をそのまま使うことになる。「執権」はさすがに訳語としては適切でないと感じたから。元々「ディクタトゥーラ」を「独裁」と訳すのが適切かどうかという問題はあった。

ただし、『序説』段階では、篠原さんから加藤哲郎さん（後任の担当者）からも、訳語問題でなにか注文を受けたという記憶はない。

私の次の仕事がスターリン問題であった。「レーニンのスターリン批判をめぐって」という論文である（『現代と思想』二三号、一九七六年三月）。「スターリン主義」研究のための予備的ノート」というサブタイトルを

つけていた。欧米の著作などで世にすでに知られていたことだが、私はロシア思想史を専攻する者として直接にソ連側の史料にあたって真相を解明することに独自の意義を見いだしたのであった。焦点は、党指導者たちの資質・言動にかんするレーニンの遺訓である。とくにスターリンやトロツキーにかんする従来のソ連ならびにソ連型共産党（日本を含む）のスターリン・トロツキー像の当否を自分なりに吟味してみるところをもちていた。

ソ連側の文献はすべて検閲されるばかりでなく、時の権力者の意に沿うものになっているが、行間を読むことは可能だし、「語るに落ち」たり、「衣の下に」かくれているものを見つけたりもできる。私のデビュー論文でもその手法を使ったところ、中野さんがそれに注目して好評してくれたことがあった。同じ『レーニン全集』でも当時の最新のロシア語版は第五版であり、大月版の全集（底本はロシア語版第四版）は補巻を含めてテキストが大きく違うことがある。レーニンの言動について論じる場合、学問的には第五版以外は頼りにならないかった。

そうしたもうひとつの意味で、私はそこでもロシア語の第五版を活用した。この論文では

じめてトロツキーに大々的に触れることになったが、レーニンとのかかわりにかんずるかぎり、従来公的に吹き込まれていたトロツキー像は完全に歪曲されていたものであることを確認できた。しかしトロツキーについては、私はまだまったく無知なままで、かれの著作は一冊もひもといていない。

一九七六年に刊行した著作『社会主義と自由』は、やはり西山さんのすすめでそれまでに発表した論考をさらに充実させて一本にまとめたものであるが、それまでの諸論考の枠をはみだして、〈党規律と表現の自由〉という問題に切り込んだ。まずはマルクスとエンゲルスに即して、ついでレーニンについても内外のスターリン主義者をいたく刺激するはずの危険水域への接近への第一歩であった。巻末では、日本の共産党が修正主義として非難していたチェコスロヴァキア共産党の変革の試みを、「真のマルクス・レーニン主義の理念を実現し、真の社会主義的自由を確立すべく」その第一歩を踏み出したものと評価した。ルナチャルスキー翻訳の刊行作業を担当した大月書店の篠原さんが札幌を訪れたのは、その著書を用意している時期だった。かねて中野さんと高岡健次郎さんの共著『レーニン』

（清水書院）に注目していた篠原さんは、当時北大に内地留学していた私を交えての共同研究を提案しに訪れたのであった。七五年の晩秋だった。その仕事は間もなく加藤さんに引き継がれる。

七六年は多忙な年であった。つかのまの「代々木の春」（共産党本部は代々木にあった）が近づいていた。『科学と思想』の一九七七年一月号は、「現代と自由」というテーマで特集を組んだ。同誌の編集長山科氏は、その企画への参加をもとめてわざわざ私の滞在先の札幌まで飛んできた。こうして同誌には、『序説』の共同執筆者の中野徹三さんが「自由論の理論的諸問題」、橋本剛さんが「自由と自由」、私が「芸術における社会的責任と真実と自由」をそれぞれ寄稿することになった。拙稿は、「ジダーノフ主義」とロシアの革命的民主主義者の伝統を対比する形で表現の自由の問題を論じていた。

共産党が一九七六年七月に発表した「自由と民主主義の宣言」が同誌にもつかのまの「雪解け」現象をもたらしたものであろう。『科学と思想』への執筆は、これが最初で最後であった。以後、お呼びはなかった。

その頃、いずれ取り組まなければならない
と思っていたテーマに立ち向かうことになっ
た。レーニン時代にはいわゆる民主集中制、
組織規律はどうあるべきだと見られていたか
を調べようと思い立ったのである。ツァーリ
ズムのもとでツァーリズムを倒そうとするレ
ーニンとその党が党内での思想の自由のあり
方をいかに？ マルクスやエンゲルスとどう
ちがっていたか？

『民主主義的中央集権制と思想の自由』（『現
代と思想』二六号、一九七六年二月）がそ
れである。拙稿は、民主主義的中央集権制の
レーニン型とスターリン型をとの違いを明ら
かにしようとしたものであるが、当時のソ連
共産党を社会主義社会の先駆的範例と綱領で
うたっていただけに、日本の共産党には、自
党の組織原理に対する攻撃に見えたはずであ
る。

しかし、そうした組織論への切り込みは危
険そのものだったようだ。本誌インタビュー
で加藤さんが、グラムシ研究者として知られ
る竹村英輔さんが、党主宰の研究会のあと、
くれぐれも組織論には踏み込むなと忠告され
たというエピソードを披露している。私にと
っては、そうした課題への取り組みは研究経

緯からして必然だったのだが、それはいわゆ
る危険水域への進入を意味していたようだ。

『現代と思想』に執筆するようになってか
ら五年、同誌に転換期が訪れようとしていた。
担当者の西山さんの発病である。「民主主義
的中央集権制と思想の自由」が、氏の担当し
た最後の拙稿となった。同誌の編集担当は別
人に代わり、私も末席を汚すことになった「ス
ターリン主義の検討」という誌上シンポジウ
ムを最後に私の同誌とのかかわりは断たれ、
同誌もやがて廃刊になる。

一九七七年二月、ここでやつとわれらが
『スターリン問題研究序説』が登場する。

私自身はそれまでの研究の延長線上にある
課題、スターリンにおける党内民主主義の問
題をとりあげた。スターリン独裁体制が確立
する一契機になったと見られるレーニン不在
時のロシア共産党の第一二回大会がいかに運
営されたかに注目したのである。

私がとりくんだ課題は、党書記長として絶
大な権限を手にしたスターリンの党運営の実
態、とくに自分に対する批判者たちを排除し
ていく過程と排除の根拠をつきとめることで

あった。とりあえずは佐々木洋さんが対象に
した第一二回党大会を中心とした動向であつ
た。得た結論は、レーニンの生前にもかかわ
らず、その廃人状態に付け込んで、スターリ
ンが、それまでに確立されていた党運営のル
ールを踏みにじって書記長権限を悪用してい
たということ、トロツキーやかれに同調する
仲間たちは逆に反党的として排除されていっ
たということであつた。ロシア共産党の大会
速記録を使えたのが幸いであつた。またこの
論文ではじめてトロツキーとその仲間たちの
文書を重訳で活用することになった。残念な
がら、ロシア語原典はまだ入手できていなか
った。

『序説』誕生までの経緯や波紋については
ほかの論者に任せる。一言だけ指摘するなら、
共産党系の研究者たちがタブー視して踏み込
もうとしなかった領域にとりくんだという点
に拙論の最大の意味があつたように思う。

私個人について言えば、『序説』は、とい
うよりその準備過程での研究会はすこぶる重
要な意味をもった。特筆したいのは、研究会
での佐々木さんのトロツキーにかんする発言
である。氏は、スターリン問題研究にさいし
てのトロツキー研究の不可欠を提言したので

ある。トロツキー派とされる人からの提言なら聞き流しただろうが、同じ共産党系の研究者からの提言となると、そうはいかなかった。そう言えば、研究会に先立って大月の篠原さんから『トロツキー・ペーパー』という膨大な資料が届けられたことをおぼえている。氏もその必要を予見していたのであつたらう。

こうして、私はロシア解放思想史研究の一環としてトロツキーにかかわることになった。まずはトロツキーのロシア語原典の収集から。そして重訳ではない、正確な翻訳の提供による、歪められたトロツキー像の匡正の作業へと進むことになる。私は佐々木さんの発言にまさに触発されたのである。私をそこへ駆り立てただけでも佐々木さんの〈挑発〉の意味はあつたと言えるのでは？ ただし私のそうした作業はずつと後のこと。当面はスターリン体制はいかにしてできあがつたかに関心が集中する。

七〇年代の掉尾を飾るのが、一九七八年一月刊行の『民主集中制と党内民主主義』（青木書店）である。病を克服して職場復帰した西山さんの企画であつた。二年まえの『現代と思想』論文を母体にしつつも、大幅に内容

を拡充した著作であつた。

レーニン時代とスターリン時代の党規約の対照表をかかげたりしていたが、スターリン時代の党規約や民主集中制にかなう規定が日本共産党のそれとほとんど同じであることがすぐに見て取れるようになっていたので、共産党幹部は大いに当惑したはずである。まともな研究者を側用人にかかえていない共産党としては、まともに学問的に反証するすべもなく、党機関紙『赤旗』で広告を利用して連日のように、私を罵倒し続けるしかなかった。

二 八〇年代『窓』とペレストロイカの時代

『現代と思想』の廃刊とともに私たちにも転機が訪れ、しばらく執筆の場を失っていた。そのうち西山さんが青木書店をやめて、新たに出版社を起こすことを決心した。新会社は窓と名付けられた。やがて社名と同じ『窓』という定期刊行物も発行するようになる。その時期はソ連のペレストロイカの時期と重なった。ゴルバチョフが党書記長に就任してから、ソ連では徐々にではあつたが、国家と党の民主的再編が進み、同時にそれまで反革命とか反党とか烙印を押されていた過去の党幹部たち（ブハーリンやトロツキーなど）の見

直しも始まつた。

以来私たちは、その動向にユーロコミュニズムのソ連・東欧化を追跡することになる。その動向は、私がまさに党と国家のレーニンの原理として、スターリン⇨ネオ・スターリン時代に対置してきたものへの回帰を彷彿させるものであつた。その動きは、ソ連と東欧のみならず、世界の共産主義政党にも再編を迫るものであつた。

しかし、スターリン時代の党と国家を社会主義体制の規範とする日本の共産党は、そうしたソ連・東欧の動向を「修正主義」として敵視し、自党への波及を極力おしとどめようとした。

この時期の私たちの主な仕事に『トロツキーとゴルバチョフ』（窓社、一九八七年）がある。中野さん、上島武さんとの共著である。そこで、私たちは、一方で初めてトロツキーのスターリン体制との闘いを真のソヴェト社会主義を奪回するための闘いと意味づけ、他方でゴルバチョフのペレストロイカ路線を客観的にはトロツキーがめざしたものと同じ意味合いをもつ闘いととらえたのである（もとよりゴルバチョフがそのことを自覚していた

ということではなかった)。

続いて私は『共産党組織のペレストロイカ』(窓社、一九八九年十二月)を刊行。『序説』からちょうど二年目であった。そこでは、ゴルバチョフがすすめるペレストロイカ政策のもとでの党改革が、私がかねて示してきたようなレーニンの路線への回帰であることを明らかにした。『民主集中制と党内民主主義』の姉妹編にあたる。

その八〇年代の掉尾を飾るのが、『日本共産党への手紙』(教育史料出版会、一九九〇年六月)だ。現参議院議員の有田芳生さんが松岡英夫さんと共に編んだ書物で、新村猛、住井する、加藤周一、日高六郎、稲葉三千男、寿岳章子などの名だたる面々が筆者として名をつらねていた。わが加藤哲郎さんも参加している(「科学的真理の審問官ではなく、社会的弱者の護民官に」)。私はその直前に有田さんのすすめで、『レーニン「遺書」物語』という本を同出版社から出していたが、その縁で私にも声がかかり、執筆陣の末席を汚すことになり、「日本共産党にもペレストロイカとルネサンスを!」という一文を寄せた。私としては、はじめての公の、直接的な共産党への批判的提言であった。本人としては共

産党への忠告のつもりであったが、先方はそうは受け取らなかった。

この本が同党にもたらした波紋はとてもおもしろいものだった。編者の有田さんは除籍に追い込まれたが、のちにその事件をめぐる経緯についてご自身のHPで詳しく報じている。そこで氏はこんなエピソードを披露している。

〈この『手紙』が世に出たからの反響は大きかった。党本部に勤務する友人がこんな話を伝えてくれた。本部の前には「友好堂」という共産党系の書店があった。『手紙』は新刊本の棚には置いていなかったのだが、カウンターに行つて「あれ、ありませんか」と聞くと、すでにタイトルが見えないようにカバーを付けたものを机の下からこっそりと出してくるのだという。代々木駅から本部に行くまでの間に「あゆみブックス」という書店がある。そこでは驚くべきスピードでこの本が売れていた。本部職員はこの書店で購入していることがよくわかった。(有田さんのHP「上田耕一郎という「私の大学」続き」から。)

私自身は、同党が範例としていたソ連共産党の自己変革の動き―それは私がそれまで二〇年ほどまえから明らかにしてきたレーニン時代の党組織論への回帰の動きでもあった―に触れながら、日本の共産党は自己変革しなくてもいいのかという問題を提起した。具体的には、とくに宮本顕治党議長の所説に注目して、〈ソ連型社会主義の破綻〉論などをとりあげた。同党のそれまでの〈生成期社会主義〉論も〈破綻〉したのか? ソ連では一国に唯一の前衛党という規定を放棄しつつあるが、日本の共産党はその方針はとらないとするが、その根拠は? などなど。

そして、〈一枚岩の党〉〈鉄の規律〉など秘密結社的な組織規律は、自由で民主主義的な社会主義をめざす党にはふさわしくないとして、近代的な政党に脱皮するよう提言したのであった。

私のこの訴えは加藤さんの呼びかけと並んで共産党側から集中砲火を浴びせられることになった。

この時期、私ははじめて不破哲三・榊利夫両氏に対する反論を執筆した。『民主集中制のペレストロイカ』(大村書店、一九九〇年一〇月)所収の、「批判の自由と行動の統一」

の解釈をめぐつて——不破・神「理論」への反論」という論考がそれである。共産党機関紙で執拗にくりかえされていた私への論難にようやく反駁する機会を得たのであった。

さていよいよ大詰めである。『序説』の時代の終幕は、一九九一年（三月）に刊行された『窓 別巻』の「ソ連共産党と日本共産党」である。これはあまり注目されていないようだが、『序説』に続くその姉妹編と言ってもいいものである。その執筆者には『序説』の執筆者が三名（中野、橋本、藤井）と『現代と思想』のスターリン・シンポジウムの参加者の上島武さんや雀部幸隆氏など同誌のかつての常連も寄稿している。私は「大転換するソ連共産党——自己革新めざす第二八回大会」を寄稿し、一九九〇年七月の同党大会で行われた綱領と規約の画期的な変革について紹介した。その変革は、私が一九七〇年代初めから念願していた本来のレーニン型社会主義の理念と展望に回帰しようとする動きに見えた。時すでに遅く、民心が離れていた共産党は、連邦国家としてのソ連の崩壊と運命をともにするほかなかったが、地上に残る社会主義をめざす政党が、真に勤労人民がもとめ

る社会体制をめざすなら、ソ連共産党の最後の自己変革の試みから学ぶところが少なくないはずである。

中野さんは「内閣する日本共産党——歴史的課題を回避する第一九回大会」という大論文を執筆した。氏はそこで、同党決議にあるものもの規定について糾弾した。「スターリン・ブレジネフ型政治・経済体制」なる規定の詭弁性（氏はそれを「ダチョウの砂もぐり」的韜晦と評した）、ゴルバチョフの新思考外交に対する「レーニン死後最大の政治的誤り」なるレッテル！

中野さんの批判は、共産党の御用学者たちにも及ぶ。かつてともにスターリン・シンポジウムに参加した藤田勇氏については、ソ連時代の血の粛清やモスクワ裁判について口を閉ざす法学者、そこに見られるのは、「理論も心情もないひとつの空虚なことば——「生成期」だけである」と。

東欧の動きについては、「東欧革命は、自由と民主主義を求める、階級や体制を超えた人間の根源的で普遍的な要求と活動の雄弁な表現であり、しかも人民自身の圧倒的な決起を通じて抑圧体制……を打倒し、変革したという意味で明確に現代の民主主義革命だっ

た。」として、〈東欧の事態を美化する日和見主義〉なる志位共産党委員長の言を糾弾した。橋本さんは、「党の民主的再生は可能か——党内民主主義の開花のための提言」という論考を執筆。民主的再生のためのいくつかの提案をおこなった。

三 『序説』の提言はまだ生きている！

私たちの当初からの願いは、社会変革運動からスターリン主義の汚染を一掃することであつた。しかし『序説』の前史段階から四〇年あまり経った今日、私たちの願いはどれだけ叶っただろうか？

社会主義世界体制とかつて呼ばれていたソ連・東欧の体制は崩壊した。だがアジアの一角にはなお、疑似社会主義体制の母斑をとどめているような不可思議な体制が厳然と生きているし、スターリン主義との決別をうたいながら、なお肝心な部分にその不気味な母斑をとどめている社会主義政党も存続している。

今日の日本共産党は、一時期と比べて大変貌をとげた。

一三年前の二〇〇〇年、党規約が大幅に改訂された。注目すべき点がいくつもある。

一六年まえ、私は、「日本共産党にもペレストロイカとルネサンスを！」という一文を草し、そこで近代政党に脱皮するための提言をいくつかおこなった。

それについて、党付属社会科学研究所事務局長という肩書きで山口富男氏が「赤旗評論特集版」(一九九一年新年号、No.733)に、「ソ連を『型紙』にして」という私にたいする批判文書を発表した。

私はそこで、同党が自党を「前衛党」と規定し、かつ「複数前衛党を認めない」とする主張の奇矯さをついたが、それについて、山口氏は、「その国の革命の責任を負う前衛党は単一の統一された科学的社会主義の党ひとつだという、一国一前衛党論の原則が堅持されなければならない」と主張した。そしてマルクスやレーニンの言説を引用して、前衛概念がいかに必要かを説いた。

氏の反論は、「複数前衛党を認めない」とする主張や、一国一前衛党論の原則の主張を説明できていなかったが、少なくとも、日本共産党「前衛」を法定化しようとするものではなかったようである。

だが共産党は、その舌の根も乾かぬうちに、党規約から(新綱領からも)、「前衛」概念そ

のものを完全に抹殺した！それは、マルクス・レーニン以来の「科学的社会主義」の原則にたいする裏切りではないのか！

山口氏はそれをどう説明するのであろうか？

また私は、日本共産党の旧規約にある(秘密結社ややくざ組織の掟を思い起こさせる)一連の規定について、それが近代政党にふさわしいかどうかという疑問を呈した。

〈厳格な規律による全党の統一と団結こそは、党の生命〉、〈いかなる場合にも党の統一を固くまもらなくてはならない〉、〈黨員は、全党の利益を個人の利益の上におき、だれでも党の上に個人をおいてはならない〉、〈断固として敵とたたかう戦闘的精神〉、〈敵に屈服し、または敵の陰謀におちいり、党と階級の利益を裏切るような行為は……最大の恥辱、最大の犯罪〉、〈敵の陰謀や弾圧にたいし、つねに警戒し……〉等々の掟。それらは武力革命で権力を獲得した中国の共産党の規約から輸入したものであった。

そうした前近代的な掟が自由と民主主義を標榜する共産党にふさわしいのかと疑義を呈したのだったが、共産党側(山口氏)の反論

はこうであった。

それらは、「自己の利益や栄達を党全体の利益より優先させるようなブルジョア個人主義を排するという当然のことをのべたまで」であって、私の疑義は「発達した資本主義国における革命闘争の複雑性と党規約にもとづく活動の重要性を軽くみてしまっている」立場だと批判した。

ところが新規約には、その「当然の」規律規定がそっくり欠落していた。これはいったいどうしたことか？

共産党は、私のかつての提言を一〇年遅れで受け入れ、〈近代政党への脱皮〉をすすめているのだろうか？

〈衣の下 の 鎧〉ということがあるが、少なくとも、共産党としては表向きは衣をとりかえるはかなくなつたということなのである。新規約の組織原理にかんする規定や党内「民主主義」なるものの実態を見ると、鎧まで脱ぎ捨てたわけではないことがわかる。

まずは「民主集中制」について。私は「民主集中制」についてはレーニン型とスターリン型があるということ、日本共産党規約の民主集中制規定はスターリン型のもので、基本的に上意下達を旨とするものであると批判し

てきた。

しかし、新規約でも、そこはほぼ旧来のままでいいと判断されたようである。もつともそこでもいろいろな衣替えはおこなわれている。

規約で、「党は、党員の自発的な意思によって結ばれた自由な結社であり、民主集中制を組織の原則とする」として、その「基本」なるものをつぎのとおりとする。

(一) 党の意思決定は、民主的な議論をつくし、最終的には多数決で決める。

(二) 決定されたことは、みんなでその実行にあたる。行動の統一は、国民にたいする公党としての責任である。

(三) すべての指導機関は、選挙によってつくられる。

(四) 党内に派閥・分派はつくらない。

(五) 意見がちがうことによって、組織的な排除をおこなってはならない。

「民主集中制」については、前規約にあった「秘密結社」的な規定は捨て去り、聞こえのいい規定に衣替えされた。さしずめ「不破型民主主義的中央集権制」と呼んでおこう。しかし、鎧は見えかくれしている。そのかぎ

りでスターリン型組織原理の母斑をとどめていると言える。

まず意味不明な語句。党が、自由な結社であるとはどういう意味か？ 従来の党のありようとどこが違っているのか？ 党員に批判の自由を保障する組織という意味か？ 国民にたいする説明責任があらう。

「党の意思決定は、民主的な議論をつくし、最終的には多数決で決める」という一節の、「民主的な議論をつくし」というのはどういうものであらうか？

なによりも気になるのは、最終的に決定された多数意思の拘束性にかんする扱いである。かつて不破哲三氏は、私へのある批判文でこう説いていた。

「いうまでもなく……党の決定がくだされたあとでも、少数意見のもち主がその意見を保留し、必要な時期に、その後の実践の結果を含めて再討議する権利と自由は、今日の民主集中制のもつとも重要な内容の一つである。」（『科学的社会主義か『多元主義』か』、『前衛』一九七九年一月号、傍線藤井）

これは、私がレーニン時代の党の組織原理についてのべた（『現代と思想』第二六号所載論文）所説——「党内における思想の自由は、意思決定機構の決定＝統一（多数）意思」にたいする事後の批判権を含めて一度も否定されたことがないという——に對置してのべられた命題について、私が「決定の採択後も公然と批判しつづける自由」、「必要な討論を経て統一した方針を決定したあとでも、これを公然と攻撃したり批判したり」の自由が「無条件に認められるような組織原理」を主張したと歪めたうえで、先のように主張するのである。（詳しくは拙著『民主集中制のペレストロイカ』二七七頁以下参照）

詭弁的通辞には眼をつむるとしても、公党の最高責任者である不破氏がかつて事後の批判権を民主集中制の重要な内容だと主張した事実は見逃すわけにいかない。

では、そうした主張は新規約でどうなっているか？

新規約では、不破のいうそのもつとも重要な内容のひとつとされる事後の必要な時期の、批判の権利と自由にかんする規定はどこ

にも見当たらない。所詮その場の苦し紛れの言い逃れにすぎなかったのであろう。

また「すべての指導機関は、選挙によってつくられる」という規定の実態は？

筆坂秀世氏の『日本共産党』（新潮社、二〇〇六年）という本は、それらの問題にたいする回答を含んだ貴重な記録となっている。不破哲三氏をはじめとする党幹部が筆坂批判の文書をいろいろ発表しているが、両者をつきあわせてみるとおもしろい発見が得られる。筆坂氏が語っていることの中で、かれらが反論できなかった部分がかなり多いということである。党内での「民主的な議論」なるものの実態、「指導機関は、選挙によってつくられる」ということの実態など。それらの事実、党の下部では知ることが難しく、外部からはまったくうかがい知れないものである。わずかにかつて袴田里見がその一端を明

らかにしたことがあるくらいであった。不破氏等は語らずして「語るに落ちている」。

日本の政党で、党員が公然と党の指針・指導部に意見や異論、批判を言えないのは共産党だけであろう。

筆坂氏が提供する事実は、衣替えされた新規約のもとの党内民主主義の実態である。なかでも傑作は、最高幹部の選出にかんする記述である。規約では党の最高機関は大会とされている。その大会で中央委員が選ばれ、中央委員会で幹部会が選ばれるという仕組みになっている。一見、下から指導機関が選ばれるかに見える。

ところが……

最初の中央委員会で、上級幹部の選出がおこなわれるのだが、その過程は筆坂氏によればこうである。

メンバーがそろったところで、だれか古参の幹部（おそらく事前に手配されている）が最年長の同志を仮議長に推薦すると発声する。拍手で確認される。仮議長が中央委員会の議長の選出という案件を提起する。すかさ

ず古参幹部が宮本を推薦すると発声。拍手で確認。あとの人事は中央委員会議長の意のままになる。かれが、自分が幹部会委員長、書記局長を推薦していいかと問い、拍手で確認されると、人名をあげ、やはり拍手で確認。

そこでは、いかなる投票もおこなわれない。不破氏等は筆坂氏のその記述が嘘だと言っていないので、その選出方式にかんする記述は真実をつたえているのだろう。

家父長（はじめ宮本、いま不破）のもとで、その意向で拔擢された子分的幹部たちが家父長の「鶴の声」に異を唱えられるはずもない。そうした方式こそソ連・東欧圏での旧「社会主義」体制下での「個人崇拜」と専制を生み出した根源なのだ。

日本共産党の新規約がうたう程度の「民主的」選挙制度は、スターリン時代の専制主義ソ連でさえ保障されていた！

マスメディアも皮相的に共産党を取材するのでなく、密室談合型の指導機関選出過程にしっかりとメスを入れてほしいものだ。なにしろいまや日本共産党は「日本の労働者階級の



ふじい・いつこう◎プロフィールは本号別冊所収

党であると同時に、「日本国民の党」であると称しているのだ。国民は、投票権の行使にあたってすべての政党の情報公開を必要としている。

ちなみに、解体直前のソ連共産党にあつてははるかに大胆な自己革新が進められつつあった。

綱領もついに改訂された（二〇〇四年）。おそらく宮本顕治の植物人間化と無縁ではあるまい。綱領こそは宮本の聖域に属するものだからだ。

注目されるのは、新綱領の（八）である。そこには次のように記されている。

「資本主義が世界を支配する唯一の体制とされた時代は、一九一七年にロシアで起こった十月社会主義革命を画期として、過去のものとなった。第二次世界大戦後には、アジア、東ヨーロッパ、ラテンアメリカの一連の国ぐにが、資本主義からの離脱の道に踏み出した。」

そこまではいいでしょう。続いて、

「最初に社会主義への道に踏み出したソ連では、レーニンが指導した最初の段階においては、おくれた社会経済状態からの出発という制約にもかかわらず、また、少ない試行錯誤をとめないながら、真剣に社会主義をめざす一連の積極的努力が記録された。しかし、レーニン死後、スターリンをはじめとする歴代指導部は、社会主義の原則を投げ捨て、対外的には、他民族への侵略と抑圧という覇権主義の道、国内的には、国民から自由と民主主義を奪い、

勤労人民を抑圧する官僚主義・専制主義の道を進んだ。「社会主義」の看板を掲げておこなわれただけに、これらの誤りが世界の平和と社会進歩の運動に与えた否定的影響は、とりわけ重大であつた。（中略）

ソ連とそれに従属してきた東ヨーロッパ諸国で一九八九～九一年に起こった支配体制の崩壊は、社会主義の失敗ではなく、社会主義の道から離れ去った覇権主義と官僚主義・専制主義の破産であつた。これらの国ぐにでは、革命の出発点においては、社会主義をめざすという目標が掲げられたが、指導部が誤った道を進んだ結果、社会

の実態としては、社会主義とは無縁な人間抑圧型の社会として、その解体を迎えた。

ソ連覇権主義という歴史的な巨悪の崩壊は、大局的な視野で見れば、世界の革命運動の健全な発展への新しい可能性を開く意義をもった。」

当の共産党が認めるかどうかは別にして、そのようなソ連像こそ私たちが七〇年代はじめから提示してきたものである。共産党は、ソ連解体から十数年を経てようやく同じようなソ連認識に達したというわけである。

しかし気がかりなこともある。次のような一節である。

「今日、重要なことは、資本主義から離脱したいいくつかの国ぐにで、政治上・経済上の未解決の問題を残しながらも、「市場経済を通じて社会主義へ」という取り組みなど、社会主義をめざす新しい探究が開始され、人口が一二億を超える大きな地域での発展として、二一世紀の世界史の重要な流れの一つとなろうとしていることである。」

国名はあげられていない。綱領はどのような国々を念頭においているのか？

常識的には中国であろう。

だがはたして中国では、「社会主義をめざす新しい探究が開始され」ているのであろうか？ 共産党独裁体制、名ばかりの選挙制、社会的自由の欠如、あまたの権力犯罪、貧富の差の拡大等々の事態を、「政治上・経済上の未解決の問題を残し」というのなら、かつての〈ソ連型社会主義〉を〈生成期社会主義〉と弁護した姿勢と同じではないのか？ 共産党は歴史にいったい何を学んだのであろうか？

気がかりなことはもつとある。

新綱領では、ソ連や東欧でなにゆえに当初の社会主義の理念が失われ、社会主義と無縁な社会に変貌したのがまったく問題にされていない。日本共産党が社会主義の建設を看板にかかげているからには、自分たちのかかげる社会主義の目標が、「社会主義とは無縁な人間抑圧型の社会」に落ちることがないという保証はどこにあるのか？ 少なくとも、その担保を国民に示さなければならぬのではないか？

レーニン死後のソ連にあつて、早くも兆したさまざまな指導部の誤りにたいして、批判の声を発した党幹部たちがいなかったわけではない。トロツキーがその最大の代表者である。

トロツキー派が党からだけでなく、祖国からも追放されたあと、独自にスターリン指導部に抵抗運動を組織した人々もいる。リューチン派である。その中には、まだ多くのボリシェヴィキ幹部が獄中や国外にあつた、二月革命のたけなわのときに、首都で街頭闘争を組織して第一線であつた無名の古参ボリシェヴィキもかわつていた。自分たちの「革命が裏切られる」ことを座視しえなかつたのである。

日本共産党が指摘する「社会主義の原則を投げ捨てて、対外的には、他民族への侵略と抑圧という覇権主義の道、国内的には、国民から自由と民主主義を奪い、勤労人民を抑圧する官僚主義・専制主義の道」にたいする批判こそトロツキーやリューチンが命がけでつらぬいたものである。だからこそトロツキー等はスターリンが放つた刺客によつて殺害されたのではなかつたか？

ソ連・東欧の「擬似社会主義」体制とは異なる、真の社会主義をめざすという理想をかかげる人々は、共産党員を含めて、早くその真実に気づき、「禁じられた」トロツキーの著作——少なくともロシア革命にたいするスターリン派の裏切りを指弾し、ソヴェト「社会主義」の再生を呼びかけた『裏切られた革命』（岩波文庫）——をひもといひてみていただきたいと思う。

なぜかれらの批判に警告が圧殺されてしまったのか？

異見排除＋上意下達という党と国家の構造ができあがつてしまつたからである。そこでは、革命をになつた党そのものの変質・墮落にもつとも重大な責任があつたのだ。

肝心なことは、あらゆる集団的認識・行動でオプティマムを得る方策として、「少数者による批判の権利」を尊重するシステムを構築しているということである。

討論3

『序説』刊行前後の執筆者グループの状況と経過、そして刊行後の反響について

中野徹三

（札幌学院大学名誉教授）

一 『序説』は札幌でどう胚胎し、芽を吹いたか？

七〇年代の世界と社会主義の試練

ソ連邦解体（一九九一年）から早くも二二年の月日が流れ去り、「ソ連」という語も既に歴史の語となった。ドイツでも青年たちの大部分は、もう「生きていた」「ベルリンの壁」を見たこともない世代に替わっており、世代間の感覚の違いがマスコミでもよく議論の対象となっているが、気がついてみると今の我が国の学生諸君のほぼ全員にとっても、ソ連や東ドイツなどが存在していない世界が「生まれながらの」事実であつて、恐らく彼らにとつては、一九五〇～七〇年前後に青年となった私たちの場合のように、それがまだ

どこか「超現実の」、しかもある喪失感や解放感（あるいはその共存）など云い知れぬ複雑な感慨を伴う世界像として写っているという事実は、もはやほとんど理解を超えた事柄に違いない。そしてその結果「社会主義世界体制」の母国ソ連邦の首都レーニングラードが再び「サンクト・ペテルブルク」に戻ったなどということは、理性ではなんとかうべなつても、今なおどこか信じがたい歴史の詭計のような感があるのは、私だけであろうか？

私どもの共同著作『スターリン問題研究序説』が準備され、出版された一九七〇年代半ばの我が国の左翼運動をめぐる全国的なイデオロギー状況と出版状況については、冒頭に本誌の編集長である小島亮さんと、この本の出版の企画から編集・刊行までを精力的に推

進してくれた加藤哲郎さんが委細を尽くして説明してくれているので、ここでは繰り返す必要はない。ただ執筆者の一人として当時の左翼（広義）の人びとの内なる気象状態を回想すると、おおむね次の様だった、と思う。

大多数の左翼の——全世界的にも恐らく——人びとの内には、その内容は新旧多様ではあれ、社会主義への期待と希望が、なお強く燃えていた。

七二年の総選挙で日本共産党は一七議席から一挙に三八議席に躍進し、かなりの人びとに、同党が参加する民主連合政府が真実「七〇年代の遅くない時期に」成立する可能性がうまれたかに見えた。また同党が支援する革新自治体が、首都東京、京都、大阪など各地で誕生した。他方、ソ連と東欧、アジアの「現存する社会主義」体制下の巨大な国家犯罪と反民主主義的体質が、五〇～六〇年代のスターリン批判に続いて、あらためてこの時期に大きく明るみに出される。ソルジェニーツィンとメドベージェフの登場。「人間の顔をもつ社会主義」対「グラウグ社会主義」——この対照の衝撃。

また民衆とともに改革を追求しようとした

「ブラハの春」へのソ連はじめワルシャワ条約諸国の武力介入は、スターリン主義がけつして過去の遺産でないことをあらためて示した。

他方この体制となんらか連帯していた資本主義体制諸国の社会主義・共産主義運動と労働運動は、この状況に直面してイデオロギー的に昏迷するとともに、二〇世紀資本主義がこの時期に経過しつつあった大きな構造的変容に対応できなくなった事情とも呼応して、停滞と模索を続ける。学生運動と青年運動からは、既成左翼のヘゲモニーを拒否し攻撃する種々のセクトが簇生した。運動と思想、文化のすべての面で、既成の通念と様式の褪色と亀裂が進む。我が国の「大学紛争」と、その「自由」の主張のもとでの暴力の常態化。七五年のサイゴン解放。引き続き中ソ武力対決と中国・ベトナム戦争。次第に明かされる「解放」後カンボディアでの大虐殺の実像。毛沢東主義と新たな中国内戦としての「文化大革命」。チリのアジェンデ「人民連合」政権の成立と軍部によるその転覆。

これらの状況に対応して、西欧の共産諸党にはイタリア共産党を先頭として、徹底した自由と民主主義を社会主義的変革の手段とも

目的ともする「ユーロコミュニズム」の潮流が生成し、更新した社会民主主義との連帯の動きも広がり始める。社会主義の民主的再生の希望は、なによりもまず、この路線にもとづく西の先進国革命の実現にかけられた。

日本共産党、七六年の第二三回党大会で「自由と民主主義の宣言」を採択。

——こうして、七〇年代の世界社会主義のキーワードは、「社会主義Ⅱ自由」であり、また「社会主義Ⅱ民主主義」となった。だがそれはまだどこでも実証されておらず、逆に「現実存在する社会主義」は、自由と民主主義の事実上の「反意語」であつた。

ではこの逆転は果たして成るか？ 断じて成らねばならない。

社会主義の前途はただこの一点にかかっていると、当時の私たちは観じていた。

執筆者グループについて

本来は本書の執筆者の皆さん全員に十分な回想を記していただくべき必要があつたのだが、種々の事情で残念ながらその余裕がなかったもので、その機会は次に譲り、ここではごく簡単ながら、編著者のひとりの私が本稿の執筆者以外の皆さんの紹介を行うことで、

その責を塞がせて頂くことをお許し願いたい。本書の目次を見よう。なお「はしがき」と「あとがき」は私が執筆した。

執筆者七名を世代毎に分ければ、私と高岡、藤井、橋本の四人は、一九三〇年〜三三年生で、当時四〇歳台の半ば、イールズ闘争前後からの「極左冒険主義」の時期を、学生時代に体験したグループに属する。

編著者の一人の高岡さんは、私と同じく一九四八年に旧制北大予科に入学し、すぐ北大学生細胞に所属して活動した一人で、五〇年五月の北大イールズ闘争の際には、北大教養部自治会執行委員兼北海道学生自治会連合（道学連）の書記長を勤め、この闘争で北大当局から退学の処分を受け、その後数年党の常任を経験したのち六全協後復学を認められて復学、文学部史学科西洋史専攻を卒業後、大学院西洋史専攻に進んでロシア革命史を研究し、後私が勤務していた札幌短期大学が母胎となつて一九六八年に開設された札幌商科大学（現在札幌学院大学）の歴史学の担当者として着任した。

彼は特にロシア革命におけるエス・エル（社会革命党）とその役割に関心を集中し、この

問題の研究の日本におけるパイオニアと称されているが、レーニン生誕百年にあたる一九七〇年、私と共著で清水書院の「人と思想シリーズ」の『レーニン』を出版した。『序説』は私と同大学の同僚かつ「同志」としての仕事である。彼は本書の執筆者のなかで、ロシア史の専門研究者という点で、藤井さんと並ぶただ二人の一人だった。

現在、札幌学院大学名誉教授。

もう一人、橋本剛さんは、福島で、予科を経て北大文学部哲学科に進み、卒論ではベルグソンを書いた。彼は、私が文学部史学科に進学して文学部にまだなかった自治会を創るのに奔走していた時に知り合って協力し合い、出来た後は執行委員として共に闘った戦友だった。卒業してしばらく郷里福島の高校の教師になったが、この時に入党したと聞いた。研学の念やみがたく職を辞めて北大の大学院西洋哲学専攻に入学し、私と同じ細胞の仲間となった。

院生になってから、彼は後に結成された札幌唯物論研究会の前身のヘーゲル会など、北大の教官たちと交流して唯物論の研究を進めていたが、札幌唯研結成以後はその幹事として、さらには日本唯研の幹事としても活躍し

た。『序説』執筆当時は、北海学園大学の哲学担当の教員であり、同大の教職員組合や生協の委員長、理事長なども兼任している。彼はヘーゲルの研究者であるが、初期マルクスの疎外論や民主主義論を掘り下げて共産党の民主主義論と民主集中制論のもつ危険と問題性を批判する論稿を多く発表している。著書『人間主義の擁護』（窓社、一九九八年）と『マルクスの人間主義』（窓社、二〇〇九年）は、それらをまとめた橋本さんの代表作である。

彼は、私が共産党を不当卑劣なやりかたで除名された一九八四年、その不当をきびしく批判して同じく不当に除名されるに至った、ただひとりの「同志」だった。ただこの『序説』の第六章を執筆するときには、ちょうどドイツ留学期に当たってしま

って日本に不在であり、共著者の村山さんは病氣中で、二人との打ち合わせも困難であり、期日が迫ってやむをえずドイツから送ら

れてきた原稿に私が一部独断で手を入れ、事後了解を得たことを付記しておかねばならない。現在は北海学園大学名誉教授。

次の世代グループの佐藤俊二さん、佐々木洋さん、村山紀昭さんは、一九三九年〜四三年の生まれで、執筆当時はほぼ三〇歳代の後半、学生運動史の時代区分では、ほぼ六〇年安保世代に属する、と見てよいと思う。

佐藤さんは、北大経済学部大学院で社会政策担当の新川教授の指導を受け、一九七〇年に新設の札幌大学に経済学担当の教員として着任、あとで触れる札大闘争に献身し、以後

目次

はしがき

――本書の課題意識とその前提をなすもの――

第一章 「スターリン主義」とは何か

中野 徹三

- 一 はじめに……………一
- 二 「スターリン主義」の定義と問題構造……………二
 - 1 「スターリン主義」という用語について……………二
 - 2 「スターリン主義」の諸定義……………三
 - 3 作業仮説としての定義……………三
- 三 スターリン主義の人間学……………三
 - 1 原点としての人間不信……………三
 - 2 初期の革命活動をめぐる諸問題……………三

3	政敵抑圧の手段	三
4	「大衆党」の論理	四
	スターリン理論の諸特徴	
	——民主主義の問題を中心に——	
1	スターリンの「プロレタリアート・人民観」	一〇七
2	党と党内民主主義の理論	一〇八
3	民族問題におけるスターリン主義	一一〇
4	スターリン主義の方法と論理	一一二
	第二章 ロシア革命と一党制の形成	
	——はじめに——	
	——スターリンの「一党制論」と本章の課題——	
二	憲法制定議会とソヴェト	一二
	——ブルジョア政党政党のゆくえ——	
三	ブレスト・リトフスクと干渉戦争・国内戦	一八
	——エスネル、ノンシエヴィキの場合——	
四	「第三の道」の破綻	二六
	——ロシアにおける「一党制の成立」——	
	第三章 スターリン主義と「トロツキイ問題」	
	——「工業化テーゼ」をめぐる社会主義論の一考察——	
	——はじめに——問題意識と課題の限定	
二	レーニンの「最後の闘争」——トロツキイとの「問題」	二〇
三	トロツキイの社会主義論	二二
	——「工業化テーゼ」の論理と思想——	
1	ネップの性格規定	二四
2	ソヴェト工業の諸問題	二五
3	「社会主義の原始的蓄積」をめぐる争い	二六
四	まとめにかえて	二七
	第四章 スターリンの前衛党論	
	——党と大衆組織との関係について——	
	——はじめに——	
二	スターリンの前衛党概念	二八
	——その六つの指標——	
三	前衛党と大衆組織	三〇
	——レーニンとの対比において——	

佐々木 洋

佐藤 俊二

	第五章 スターリンと党内民主主義	
	——一九三三年の党内論争を中心に——	
	——はじめに——	
二	革命前の党組織論	一〇七
三	第二回党大会	一〇八
四	「労働者民主主義」論争	一一〇
五	「新路線」をめぐる争い	一一二
六	崩壊の「論理」	一一四
	第六章 哲学における「スターリン主義」批判	
	——はじめに——	
二	「スターリン哲学」批判史(その一)	一二
1	批判の四つの課題	一四
2	提起された諸論点	一六
3	第一期の意義と限界	一八
三	「スターリン哲学」批判史(その二)	二〇
1	批判的体系の登場	二二
	あとがき	二七

藤井 一行

橋本 剛
村山 紀昭

も札大の教職員組合の中心的活動家のひとりとして活躍されたことは、よく知られている。

おそらく藤井さんとの（非民主主義的大学当局に対する）この共闘を通じて、スターリン主義批判の今日的意義を改めて共に確認し、第四章・スターリンの前衛党論をまとめられた。現在、札幌大学名誉教授。

佐々木さんは、今私と平行して自分のトロツキー体験の発展をまとめている最中と推測するが、静岡の高校から北大入学後は民青の中心的活動家として活動、農学部農業経済学科を卒業後大学院に進み、修士課程修了後、ちょうど私が勤める札幌商科大学が開学第二年次を迎え、母体の札幌短大の専任教員が不足するのを埋める必要が生じたため、短大の商業経済論の教員に採用されて、私や高岡さんと同じ学園の専任になった。その後、彼がトロツキーを読み、スターリン主義に強い関心を寄せていることを知り、彼を七五年頃に始まっていた「スターリン問題の研究会」に誘ったらしい。彼はその後のイギリス留学の機会に、イギリス出張中にソ連国籍を剥奪された（後九〇年に国籍回復）ジョレス・メドヴェージェフの『ソヴェト農業』を読んで強い衝撃を受け、爾来ジョレス・ロイ両兄弟の

著作を翻訳する仕事を精力的に続けている。

最近の仕事は、両兄弟が彼らの生涯を賭けた闘いをさまざまな角度から綴った回想録（二〇一二年）の、天野尚樹氏との共訳書『回想

一九二五—二〇一二』（現代思潮社、二〇一二年）であるが、この比類ない反体制派の双生児の八五年に及ぶ回想録は、私の『労働運動研究』誌（復刊第三三三）での書評の言葉を引かせてもらえば、「彼らが後の世代に残すある種の遺書」ともいえる感慨深い思索を多く含み、社会主義とスターリン主義を考えるすべての人の必読書のひとつ、といえよう。現在、札幌学院大学名誉教授。

村山さんは、北大文学部哲学科卒業後、同大大学院修士課程修了、その後北海道教育大学の哲学担当の教官となった。彼は橋本さんや私とおなじく札幌唯研のメンバーで、日本の唯物論研究史で特に戸坂潤の仕事に着目し、公式的マルクス主義を批判する視点から、スターリン主義哲学の克服をめざしていたので、この研究会に誘った。この時代の著書としては、『唯物論の新しい考え方』（日本科学者会議編、大月書店、一九七五年）、『社会（現代のための哲学 二）』（青木書店、一九八二年）いずれも共著、がある。村山さんはその

後（一九九九年）北海道教育大学の学長に選ばれ、大学転換期の苦勞も十二分に味わったらしい。現在は北海道教育大学名誉教授。

私の「四六年来の反スターリン主義闘争の盟友」——藤井一行さんの札幌大学着任

一九六七年の三月か四月のある朝、電話が鳴った。受話器を伝わってきたその声の持ち主は、私の名を確認すると、『思想』でマルクス主義美学の論文を書かれた中野徹三さんですか？と問い返してきた。その時の感動を、私は今の今まで、忘れることなく胸のなかに刻みつけている。

私が一九五九年の『思想』の一二月号に、自分の本格的な著作としての処女論文ともいふべき「マルクス主義美学の根本問題」を発表し、さらに六二年一二月号と六三年四月号にその続編としての「マルクス主義美学の現代的課題」を発表してからも、マルクス主義の理論陣営からはそれまで、ほとんどまったく肯定も否定も反応がなく、ただかの榊利夫氏が彼の『マルクス主義と哲学論争』（青木書店、一九六六年）のなかで、「……中野徹三は、『戦前の蔵原理論を含むスターリン時代の美学』を克服するとか称して、芸術を

もつぱら芸術的生産過程に解消し、『反映としての芸術』というマルクス主義的観点をしりぞけている。……」などという論証抜きに公式論による断定と非難を（しかも本文でなくすべて注で！）下すという、乱暴非礼な反応がそのすべてであった。

この論文は、私がスターリン主義の美学をその基礎理論を成す認識論と史的唯物論の理論から抜本的に問い直すべく、院生時代の研究時間の多くを注いだ苦闘の産物であり、その後の私のスターリン主義批判の主要な理論的基礎を成したものだ。だがその内容は、少数の仲間にはか理解してもらえず、かなり落胆していた時だったから、この電話の嬉しさと感動は、とりわけ大きかった。そしてこの声の主は、一橋大学の大学院を終わって開設されたばかりの札幌大学外国語学部ロシア語学科の専任として着任することになっていた藤井一行さん、私たちが一〇年前に出した北朝鮮独裁体制を糾弾する共著『拉致・国家・人権』（大村書店、二〇〇三年）のあとがきで藤井さんが私を呼んだ言葉を借用するならば、まさに「私にとって四六年来の反スターリン主義闘争の盟友」であった。

藤井さんは、新設の札大にはまだ転籍すべ

き「組織」がないので、さしあたって私が所属する札幌短期大学の細胞に所属することになっており、そのための連絡だった。

当時札幌短大の細胞には、私の前年に小樽商大を卒業して名古屋大学の大学院経済学経済学研究科に進み、水田洋氏のもとで経済学史と社会思想史を学び、スミスとイギリス急進主義特にゴドウィンを研究していた鈴木亮さん、そして私が説得してメンバーとなった職員一名と私の三人がいただけだったが、ここに藤井さんが加入して、異なる二つの大学の当面する問題について四人で討議し、方針を立てて活動することとなった。以後藤井さんは確か六八年の途中まで、およそ一年半ほど私たちの細胞でいっしょに活動したことになる。ともに新設直後の私立大学の途方もない問題山積に直面した私たちは、本当は共に最も関心のある当時の社会主義世界と日本の党の問題について十分つっこんだ討論は出来なかったが、会議の合間やその前後の話し合いで、内外のスターリン主義への厳しい怒りと批判を心中に共有して知っていることを知り、強い共感を覚えていた。とりわけ「プラハの春」へのソ連の暴虐な介入への彼の怒りは、私は一二年前にハンガリー事件から受け

た憤激の情感を胸に刻みつけていたので、改めて「わが友を得た」喜びを感じた。

彼はこの事件の少し前に、モスクワでのひと月ほどのロシア語教師の現地講習に参加して帰国したばかりだったが、帰国後の印象を訊ねた私に、「ソ連に行って僕はますます反ソ的になりましたよ」と語って、私にある種のショックを与えたばかりだった。彼のこの言葉は、彼の事前の疑問通り、ソ連人には批判の自由がなく、みな同じような答えしかない、という体験から出たものだった。また彼はあの広いソ連で、ベトナム支援のスローガンをひとつも見なかった、と言っていたが、これらは四年後に私が二週間、ソ連を歩いた時の印象と同じだった。

この彼と私たち札幌組との五年間という短い札幌での共闘が、この共同著書を生み出す主要条件の第一であった。

二つの新設私大での闘争

このようにこれら七名の執筆者のうち、橋本さんと村山さんを除く五名は、札幌大学と札幌商科大学（現在札幌学院大学）という、一九六七年と六八年に札幌に創設されたばかりの新設私大の教員であったが、それは必ず

しもすべてが偶然ではない。以下に記すこの時期の二つの大学の教職員の闘争は、大学と教職員の死活にかかわる闘争であったとともに、私にとつては同時に、ささやかながら現代社会主義の理論的かつ実践的な体験のひとつ、という意味をも帯びた闘争であった。読者の皆さんは、一見『序説』にかかわらないテーマについての以下の論述の「心」を、どうか豊かな想像力で読み取って頂きたい。

私は、一九六三年に、北大大学院西洋史学大学院のOD四年を修了して、札幌短期大学の歴史、社会思想史、ドイツ語担当の専任講師に就任した。

それまで私は、北大では広く知られた公然黨員であり（北大安保共闘会議での北大教職員細胞の代表幹事でもあった）、だれもが、私が教職に就けるとは思ってもいなかった。また五九年から六一年までは、共産党北海道委員会の要請で、その学生対策部員の仕事をも担当していたが、第八回大会に出された綱領草案に反対して、大会後その任を辞した。六三年に札幌大に就職できたのは、第一に、その前年にここに就職していた非黨員の哲学の友人、八木橋貢さんの努力の御蔭であり、もうひとつは、大学新設ブームがようやく本

道にも到来し、短大の経営者もそのための若干の増員の必要を認めたため、であった。

札幌短大は、小樽高商の卒業生で、その後東京商大に進学した小林備吉氏が復員後一九四六年に創立した札幌文科専門学院を母胎として五〇年に認可された短大で、高等教育機関としては全道最初の男女共学を実施し、また社会人相手の夜間部を持つユニークな学校だった。小林多喜二や伊藤整を輩出した小樽高商のリベラル・アーツの気風が残っていたこの短大では、恐らく全国的にも絶無と思われるが、昼夜間部を通じて二カ国語（英語と独仏のいずれか）を必修としており、この特徴なしに、私の採用はもつと困難だったに違いない。しかし、札幌大の理事者には、当時の本道の有名企業の代表が多く名を連ねていたが、大学の経営に関心を持つ人はいず、理事長は拓銀（旧北海道拓殖銀行。一八九九年の拓銀法で国から種々の特権を与えられた特殊銀行として出発し、バブルのなかで不良貸し出しを重ね、一九九九年に都立銀行中唯一破綻して全国的に衝撃を呼んだ）から退職者が天下りしていたが、悲願であった四年制大学昇格は何一つ進められず、後発の北海学園大学等に遥かに先を越されていた。

私が採用された六三年春、短大の僅か三三〇〇平米の校地に、四年制大学のための地上五階の鉄筋校舎の建築が始まり、秋までに躯体工事が終わったが、それ以後は工事は中断されて全く進捗しない。理事長の説明では、建築業者に三三七〇万の未払いがあるので内装工事はしてもらえない、という。ところがこの工事を請け負っていたのは、北海道ではよく知られた地崎組で、二代目の地崎宇三郎は短大の最も古い理事であり、この程度の未払いで工事をストップするのは腑に落ちない――この背後には何者かの黒い意図がある、と感ぜざるを得なかった。私と先述の鈴木亮さんとは、短大の教職員仲間と密接に協議しながらその対応策を立てた。ひとつは教職員組合を結成することで、これは翌六四年に全員で結成された。その時は、専任教員九名、職員十数名の小さい組合だった。もうひとつは、北大で生協運動の経験を持つ私を中心になって短大に大学生協を創設することで、これも六四年暮れに設立でき、一部・二部（夜間部）の学生と教職員の強い連帯を確立するうえで、大きな力となった。この札幌短大生協は、日本で最初の短期大学生協となる。しかし、教授会と組合、学生の重ねての要

望にも関わらず、校舎の内装は止まっていた。そして六五年の十一月、短大理学会は突如、札幌第一高校を経営している希望学園との合併を決議したのである。この希望学園の理事長は、札幌の金星ハイヤーの社長岩沢靖という人物で、この高校の授業料を再三一方的に値上げして父兄が授業料を法務局に寄託するなどという事件が起こっており、かねて私学の労働者が強い警戒心を抱いていた人物だった。

この事態を、私たちはこう分析した。

1. 岩沢は、かねてから四年制大学の設置をめざしており、そのための手っ取り早い手段として札幌短大を吸収合併してその実績と人的・物的資産を無償で入手しようという意図したこと。そして自分の主力銀行である拓銀の幹部と示しあわせてそういう状況に短大を追いつ込んだこと。

2. 地崎組は、やはり自分の主力銀行である拓銀幹部と語らって、自分たちが四年制大学のための校地の取得など厄介な事業に関わらなくて済むこの合併案に賛成し、その状況づくりに加担した。

3. 合併案に賛成して推進した有力理事の柴野安三郎氏は、この時はやはり拓銀幹部な

どから何らかの働きかけを受けていたと推測される。短大の創設者であつた小林氏は、創設者だけに合併案には反対だったが、表向きこの決議に反対は出来ず、背後で我々にたいへん協力してくれた。この合併案には、札幌の三大ハイヤー会社それぞれに関わっていたのも、興味深い布陣であつた。岩沢の金星ハイヤー、小林氏の日交ハイヤー、そして柴野氏がつくつた本道最古最大（当時）の北交ハイヤーの、三社である。

教授会、組合大会、学生大会は当然この決議に反対して、狭い校舎は怒りと抗議のステッカーに溢れた。柴野理事は、教授会に出席を求めて私たちを説得しようと努めたが、拓銀も理事もなぜ三七〇〇万程度の金が造れないのかと追及すると、柴野理事は、それでは先生方がそれだけの金をだしてくれる経営者を見つけて下さい、そうしたら考え直しでしょう、と言った。しかし、もちろん殆どが三〇歳台の我々若い短大の教員が、そんな経営者を探し出すことなど、見当もつかない。困っていると、僕の友人でやはり親しい細胞員であり、北大文学部の独文学科を出て、旭川南高校（当時私学、現在道立）に勤めた

ことのある坂西八郎さんがわが家に来て、この高校の創立者で校長の松浦政雄さんは、札幌に大学をつくる夢を持っている、資金を作る力もあるから、彼に協力を求めたら、という話をもってきた。

それで私は組合大会に提案して全員の賛成を受け、一二月の後半、組合の委員長と二人で旭川に松浦氏を訪ね、必死の思いで協力を求めたところ、たいへん積極的な回答を得た。以後の連続した緊張の三か月の詳細は省略するが、その結果、松浦氏は一億円の融資を北洋相互銀行から引き出すことに成功し、これによつて合併決議は廃案となり、松浦氏が理事長となる新理事会体制が生まれ、私たちの「札幌商科大学」設立のための新校地一〇万平米を江別市に取得すること、また止まっていた短大校舎の内装を行うことも可能となったのである。人との出会いの大切さ、断じて行えば「奇蹟」も起こりうることを、を教えられた歴史の一齣だった。

なおこの坂西さんが、その後室蘭工大のドイツ語の専任になり、ドイツに留学してドイツ民謡学の研究に精進し、留学中にゲーテの「野ばら」に作曲した歌曲をヨーロッパじゅうからアメリカまで九一曲も発掘したこ

とは、よく知られている（『わらべは見たり「野ばら八八曲集」 岩崎美術社、一九八七年）が、またドイツ人にも思いのほか広く愛好されている「ドイツ語俳句」（ドイツ語で五・七・五の音節に区分された形の短詩）の日本での紹介なども行い、これらの業績で九三年にドイツ国から「一等功労十字賞」を授与された。彼は私が七九〇年にドイツに留学した際、ポーランドの歌手でナチの強制収容所ザクセンハウゼンに放り込まれたアレクサンドル・クリシェヴィチさんを紹介してくれ、それでクリシェヴィチさんの案内でオシュヴェンチム（アウシュヴィッツ）を訪問できたのだった。

こうして本学は六六年、札幌商科大学の開設の申請に踏み切ることが可能となったが、半年で設置基準を満たす専任教員を揃えることは至難の業であった。

それで私は、北大での学生運動を通じて親しくして頂いていた、学問的にも世界に知られ、しかも進歩的な科学者、生物学の松浦一さんと触媒研究所の堀内寿郎さんをお願いして快諾を得たが、商学の専任特に中心となる教授は本道ではもうほとんどいない。それで学術会議の「学問と思想の自由委員会」の

委員でもあった松浦さん（彼は一九五〇年の北大イールズ闘争の立役者でもあった）に頼んで、同じ委員会の長であった立命館大学総長の末川博さんに宛てた紹介状を書いてもらい、八木橋さんと二人で京都に飛んだ。いま考えると、ずいぶん無鉄砲な計画だったが、末川さんは若い我々を快く自宅に迎えて全面的に協力してくれたうえ、同志社大学の住谷悦治総長をも紹介してくれた。その結果、一週間の滞在で、専門科目の四名の教授が協力を快諾され、これで申請の基本条件がやっと揃った。九月末の申請までは、短大の授業の合間と夜間部授業終了後を活用しての、二〇数名の教職員の深夜までの業務が続いた。これは、小さいながら本道にひとつの民主的私大をつくる闘い、その試金石と、我々は考えていた。

しかし、一二月の審査結果では、教員組織で専門と一般とも各一名の不足という表向きの理由で、「札幌商科大学」は「認可保留」となった。

まず我々が当初から疑問としたところは、当時の大学設置審議会の構成であった。私たちの奮闘で札幌短大の吸収合併に失敗した岩沢氏は、我々の申請と並んで「札幌大学」の

設置を計画するが、彼は明治大学の出身であったので、教員組織では母校の明大の全面的協力を仰いだ。驚いたことに、当時の明大の総長の佐々木吉郎氏は、同時に大学設置審の現会長であった。審査する組織の長が審査される大学の長でもある、というこの不思議は、今ではあり得ないと思うが、当時はまかり通っており、岩沢氏と佐々木氏はこの不条理を利用して札大には有利に、競合する札商大には不利に判定を操作したらしい疑いがある。

さらに、短大の創設者の小林理事が文部省の担当官から後に取ったという審査の裏話によれば、裏では教員の思想傾向が問題にされており、私たちが国際経済論の担当教授として申請した小椋広勝さんは、学問も人柄も立派だけれども、いかんせん赤い、また松浦さんと堀内さんも、業績はまったく文句がないけど、どちらも進歩派、赤いと見なされている、だから申し訳ないが、次の申請のまえに頭を下げて断つて来て欲しい、でないとまた外される、というのが小林さんの私への要請だった。

私も怒ってずいぶんやりあったけれども、このままで出来る保障もない、それでふたたび八木橋さんと京都に行き、小椋さんにすべ

てを話してお詫びし、了解を得たが、これは大学設置の仕事のなかで、最も辛い仕事だった。また堀内さんは申請の翌年に北大学長に選ばれていたので候補から自動的に外れたが、松浦さんに血涙の思いでお話したら、先生は、よく判った、内に対立しては何も出来ない、僕はいいから、いい大学をつくりなさい、と言ってくれた。

私は申し訳ない、という気持ちでいっぱい、この前後は自棄酒を飲んで大分荒れた。これは通常のレッドパージとは違うが、日本の文教機構とその担い手の心情にまで染み付いている「赤嫌いの」産物だ、といつていいだろう。今の若い世代には判りにくいと思うが、こういう状況が、当時は普通だった。

六七年の再度の申請では、大学設置にともない短大から商大へ移行する教員人事の補充が十分かどうか審査の焦点のひとつとなったが、これも懸命の努力で突破し、札幌商科大学は、今度は申請二・三校中四校のみ認可(当初)、という厳しい関門を突破して認可され、六八年遂に待望の開学式を迎えた。

しかし、一年遅れで開学したため、学園の収支は厳しく、この年の消費支出総額に対する金利の比率は実に二〇%に達し、給与の支

払いも遅れる、という状況となり、松浦理事会は必要な教職員の採用にもベースアップにも応ぜず、対立は深まった。この年はまた、世界的な学生反乱、日本でもまず東大と日大で大学紛争が始まった年だった。六八年末に松浦理事長が辞任し、新理事会体制が生まれたが、副理事長となった柴野安三郎氏は六九年三月、大学設置の中心となった私ほか二名の教員を招き、本来私立大学は理事会の私有物でなく、教職員と学生のものである、それで今後は、経営を先生方にお任せしたい、理事会は教職員が選んだ理事を受け入れ、その数を制限しない、教職員以外の理事は、理事が決めたことに納得すれば、先生方に出来ない仕事、例えば資金の調達や負債の保障などを実行する、貴方がたは大学を造ったのだから、経営が出来ないはずはない、という提案をした。この柴野提案を我々は結局全員一致で受け入れ、以後本学は全国私学で「明和方式」という名称で知られることになる「教職員による経営」を十数年、実行することとなる。その方式として私が提案し、皆の賛成を得たものは、学園の重要事項と予算などは、学長から用務員まで全員が平等に一票を持つ全学教職員大会で議論し決定する、全学教授

会と全事務局会議はそれぞれの所管事項を審議し、理事を選出する、を根幹とするもので、マルクスのコミュニケーション方式を念頭に置いたものだったが、さらに学生には経営はほぼ全面的にガラス張りにし、学生を含む全学協議体制を含むものとされた。これはあとで考えれば学園が存亡の危機にあり、また教職員数が七〇名前後という規模であったことによつて可能となった体制(私はこれをかの「戦時共産主義」に類比したことがあった)であり、したがって学園がさらに拡大した時点では、変更が迫られるものであったが、当分の間はまさにこの体制が有効であった。全学教職員大会で我々は一年間のベースアップを断念したこともあったが、金がないからせめて時間の自由を、ということ、かなり大幅な「夏期休暇」の制度を新労働協約に盛り込み、他の私学労組の運動目標にもなった。

財政健全化は教職員と学外理事の協力によりほぼ順調に進み、さらに七四年からの一年間の全学討議で最初の学園将来計画を策定し、それに基づいて短大の発展的解消と商大との統合を実現し、既設商学科に加えて道内最初の人文学部と商学部経済学科、商学部第二部を七八年度に増設して、小さいながら総

合大学へと発展した。八四年には法学部を開設し、大学名を「札幌学院大学」と改めた。

教員から選出される理事、とりわけ三ないし四名の常務理事は、授業のノルマを二コマとし、それを超える時間に応じての非常勤並みの手当を当面支給することにしたが、本務の教育研究を担いながら行う常務理事としての多方面の激務は、しばしば深夜にまで続き、たいへんな負担であった。通常教員常務は二ないし三年で交替したが、私は設置申請の仕事との関わりおよび将来構想など全般的な課題との対応の必要から、海外留学の期間を除いて、十数年間教員常務の仕事を担当した。まだ若く、幸いに身体が頑健であり、また万事楽天的な気性だったため、これが可能であったが、今思えばそのために膨大な研究時間が失われた。

しかし、教員常務として倒産寸前の学園財政の改革に取り組み、文部省や私学財団との交渉をみずから実行し、またさまざまな財界人や政治家にも親しく接する機会を得たこと等は、私にとってたんなる書物の上での研究ではけっして獲得できない大きな精神的富をもたらしてくれた、と信じている。とりわけ学園の危機に際し教職員の潜在的力量を信頼

して「柴野提案」を行い、「再建の魔術師」とまで言われた柴野安三郎さんとの交流は、

すぐれた財界人が持つ直感力と人間的洞察力が、大抵の学者や革新政党の政治家のそれの比ではないこと、を教えてくれた。彼はハイヤー業界の第一線を退いた後は、日ソ友好運動と経済交流運動に取り組み、自費で「日ソ文化会館」を建て、八一年に日本人で三人目の「ソヴィエト連邦民族友好勲章」を受章した。

私はこの小さな大学での「労働者自主管理」の経験を、完全な意味でのそれは現実にありえないことを含めて、ひとつの「社会主義的実験」であると、考えていた。

そしてこの経験は、私のそれまでの本だけの社会主義像を種々の面で検討し修正する、重要な足場ともなった。この間に、私たちの支部は二十数名の規模に拡大され、北大に次ぐ規模となり、緊密に討議して学園の基本計画を検討し、教職員の運動を献身的に支えた。

さて、私たちの札幌商科大学が漸く開学した六八年の四月一日、一年前に開学した札幌大学に札幌大学教職員組合が結成された。その原因は、岩沢理事長のワンマン専断支配とそのもとの教員間の待遇の極端なアンバランスと身分による差別、教員と学生との教育研

究上の民主的諸権利の否定、言語に絶する大学に対する「放漫な私物化的経営」（七〇年七月の二日間の全日ストライキにあたって組合が学生父兄に訴えたビラから）に対する不安と怒り、にあった。その内容を見ると、まず第一に、札幌大学では、開学当初教授会が組織されず、学長、学部長はじめ校務分掌も当初は理事者の一方的な任命制であつて、「大学の自治」は形骸すら与えられなかった。

先に見たように、設置申請においては、明大の総長であつた佐々木吉郎氏が札幌大学長予定者として大学設置審の会長である同一人物の佐々木吉郎氏に申請される、という奇怪な事態が横行していたのだが、大学が発足したのちには「経営学の大家」佐々木学長は大学にほとんど顔も出さず、そのうちに岩沢理事長とも意見が合わず、一年早々で退任した、といわれる。そして文部当局は、この無責任をも放置した。待遇の不公平は、当時の組合員の話によると、本州在住でまだ着任もしていない専門科目の教授に毎月十五万もの高給が払われているのに、タイムレコーダーで出勤をチェックされる多忙な若手教員は四・五万しか貰えない、などという極度に矛盾した状況に現れた。

第二に、最初の組合に加入した職員は五名に過ぎなかったが、これは事務職員はすべて岩沢理事長の経営する金星商事の出向社員という身分であり、現業職員は共立福祉センター k 社員であるという、すなわち「大学の職員」は一人もない（！）という「事情」から生じていた。そして岩沢の経営する会社や学校では、暴力的な労務政策が絶えず、それを知った教職員に強い恐怖と不安を呼び覚ました。

ひとつは札幌第一小型ハイヤーで、一九六三年、春闘ストに立ち上がった労組員をロックアウトをかけて排除し、一人の組合員を「懲戒解雇」するという不当労働行為を平然と行い、さらに労組員に白昼暴力団を使って襲いかかり、一〇人もの重軽傷者を出した、という事件だった。

岩沢は、彼自身戦後に労働運動をやっていたが、雪印の争議で敗れてから足を洗って資本家陣営に鞍替えした人物であり、多数の会社を経営するうちに、その労務対策として全道労組協議会の元事務局長伊藤仁郎、元道炭労幹部月居良勝など寝返り労組幹部を抱え込んで、教職員を意のままに支配しようとした。

こうした状況のもとで、藤井さんを中心と

する数名の教員は、早くから密かに組合の結成を語らい合い、準備した。このことを、札幌大教職員組合がそれまでの闘いの歴史を綴った「八五年組合ハンドブック」は、こう記している。

「——こうした事件をしかける岩沢理事長のもとでの組合結成運動は秘密裏に、いわば地下活動的にすすめざるを得ず、苦難な一年を乗り越えて遂に昭和四三年四月一日の結成大会を迎えた。——この勇気と努力は、その後の札幌大教職員運動を規定している。」

こうした理事者のもとでの大学が、ひどい乱脈経営に陥るのは必然であり、経営危機は急速に表面化した。

当初計画では入学者数は定員の二倍を見込んでいたが、初年度の無節操な「取るだけ取る」方針が評判を落として六八年度は計画の半分しか入学せず、在学生総数は計画の一九七一名に対して実数は一一〇五名、さらに翌六九年度は三三七一名に対してその半分、一七四〇名にとどまった。

「本道実業界がつくった総合大学」と誇ら

しげに自称した札幌大の財政は、さらに無軌道な支出と校舎の建設のため急激に悪化し、負債総額は六七年度末の三億七千五百万から六八年度末の八億七五〇〇万へと、一三七％も増加した。

六九年六月に入って、給与と手当の遅欠配が常態化し、このなかで教員は組合に結集するとともに自主的に「全学教員会議」を組織したが、岩沢が表面に立たず、教員理事三名を含む常務理事会が提案した定年制（教授六五歳、助教授以下六〇歳）を押し付けられ、その結果二五名の教授が大学を去った。

これほどの犠牲にもかかわらず、七〇年には、六月の給料日にもなんの通告もなく、給料が支給されなかった。組合は六、七月にかけて三日間の全日ストを決行した。この頃、理事会では大学の廃校が討議されており、また岩沢が辞意を表明したという情報が流れた。私たちは、岩沢ならやりかねない、この途方もない大学の私物化Ⅱ廃校路線の犯罪性を徹底的に社会にアピールし、学生と教職員の権利、大学の民主的発展の必要を呼びかけていくこそが、札幌大の教職員と学生、そして全私学の労働者の課題である、として闘う方針を確認した。私たち札幌商大、短大の

教職員も、この闘争を他人事ならぬ私たち自身のための運動として受け止め、他の私学労働者とともに真剣に共闘した。この年の八月一〇日に百数十名の私学労働者が「札大闘争支援決起集会」に集まった日のことを、私は忘れない。この大学を岩沢が私物として葬り去るに任せるか、それとも教職員、学生、父母を核とする市民の大学として再生させるか、はこの廃校路線粉碎闘争にかかっていた。父母大会が開かれ、勝手に解散するな、説明会を開けと岩沢に要求し、一名の代表を選んだ。

このなかで理事会は廃校路線を一応引つ込め、明治大学の麻生平八郎教授（前常務理事）を理事長代行・学長代行として「再建六項目」を提案してきた。

しかしこの状況に不安を抱き、大学を去る教員が目白押しで、七〇年の年末には、開学二年目の百人を超えるスタッフが半数に減った、といわれる。

七一年五月の団体交渉で職員の金星商事出向の身分は改められて大学職員となり、六月の組合大会では六九年に生まれた御用組合的な職員組合と六八年から闘ってきた教職員組合とが合体して、ここに名実ともに「札幌大

学教職員組合」が誕生した。

以後の札大教職員と組合は、さらに永い闘争を続けていくが、八一年には岩沢氏は仕手株戦に失敗して多額の負債を出して失脚し、またその懐刀の月居専務も組合の追及を受けて八二年に辞任するにいたる。そしてこの八二年の七月に開かれた全学教員会議が、理事の過半数を教員が占めることを決議したことは、私たちの札幌商科大学の「教職員による経営」の理念と共通しており、興味深い。

この時期には、藤井さん一人から出発した札大の党組織は佐藤さんを含めて数名の規模となり、その影響力と信頼は次第に教職員と学生、他の私大労働者にも広がった。私は、この時期の札幌商科大学と札幌大学の党組織は、掛け値なくそれぞれの教職員労働者の「前衛」たる役割を果たしていた、と考えている。

『スターリン問題研究会』の発足と『序説』刊行まで

さて、やや回り道になったが、この二つの大学の成り立ちと開設後の運命的な激動に振り返られ、私たちは皆まともに教育と研究に専念することが許されなかった。しかし、藤井さんはこのなかでもソ連訪問とチェコ事件

を機に発した問題意識を追求し続けて、『現代と思想』誌の第六号に先駆的論文「社会主義における言論の自由の問題」を発表され（七一年一二月）、私に大きな感銘を与えた。札大闘争のさなか、そのことを話題にしたところ、彼から「中野さんは非自由について書いて下さいよ」と、強い勧めを受けた。翌七二年の二月か三月、藤井さんから金沢大に移る、という知らせを聞き、びっくりもしたが、札大の皆さんも私と同じだったらしく、佐藤さんはじめ皆落ち込んで黙っていたのが気になった。それから二人だけで話合ったような気がするが、藤井さんは、私がもうあんまり経営のことばかりに振り回されないで、研究してほしい、と忠告していたように記憶する。そして私は、必ずそのようにする、あとに続く、と答えたように思う。

藤井さんはその後、私のことを『現代と思想』の若く気鋭の編集者西山俊一さんに話したらしく、私は常務として東京にしばしば出張する機会を捉えて西山さんと会い、やがて同誌の第一九号（七五年三月）と二五号（七六年九月）に「マルクス主義と人間の自由」（正・続）を発表することとなった。

スターリン主義の研究会がいつ始まったかは記憶が定かでないが、本格的には藤井さんが七六年一月に刊行する『社会主義と自由』（青木書店）のために北大スラヴ研究所に内地留学していた七五年の一二月に、大月書店の篠原さんが札幌に出張してきて、後の『序説』の執筆者たちと会い、ここで私たちによるスターリン主義の研究書の刊行を大月が検討中、ということがわかった時点であろう。

その後篠原さんはモスクワに長期出張となったので、その話は加藤さんに引き継がれた。加藤さんはこの本の刊行の意義やそれをめぐる共産党内の政治情勢、したがってそのテーマと望ましい展開のあり方、等を提起するとともに、内外の関連資料を精力的に私たちに送ってくれて、万事のろい「北海の鯨」たちを執筆へと駆り立てたのである。

私はこの人たちと知り合って、東京の編集者はさすがに本や著者について驚く程知っているばかりでなく、ひとつひとつの論文や著書が、日本の左翼の思想と行動をある時は滄のように、ある時は氷河のように目立たずしかし確実に動かししていく、という深い確信と使命感を持っているのに打たれた。以後私たちは、春や夏、冬の休暇など機会を捉えて定山

溪の温泉に合宿し、交互に関心のあるテーマについて発表し合いながら、その内容や構成を少しづつ詰めていった。私は「社会主義と民主主義」というテーマで、主に当時東独の「マルクス・レーニン主義研究所」から出されたばかりの追放者同盟から共産主義者同盟に至る初期ドイツ社会主義資料集を用いての報告を行ったが、これはすぐあとで公刊した「マルクス、エンゲルスにおける『プロレタリアートのディクタトゥーラ』概念―不破哲三『科学的社會主義と執權問題』の検討―」に生かされた（『マルクス主義の現代的探求』青木書店、一九七九年）。

加藤さんが参加した翌七六年七月の研究会での討議に基づき、本の章別構成と分担がほぼ決まり、また標題は『スターリン問題研究序説』に決まった。

『スターリン主義研究序説』としなかったのは、「スターリン主義」とよばれている理論内容や行動様式、体制がしばしばありきたりの内容のない党派的ジャルゴンともなっている状況を考慮し、その内実と問題性を開かれた科学的な立場から批判的に解明し、新しい社会主義像の形成に寄与したい、とする観点から、だった。原稿は七七年七月締め切り、

十一月刊行と予定された。

それから約一年、数回の研究会が開かれ、皆がその目標にむかっていたの取り組みを始めた。私も資料の収集と読み込みを開始したが、先に「マルクス主義と人間の自由」の続編（『現代と思想』第二五号、七六年九月）と「自由論の理論的諸問題」（『科学と思想』第二三号、七七年三月）の仕事があり、これはかつての疎外論の論文と合わせて七七年三月に『マルクス主義と人間の自由』という単著となつて、青木書店から出版された。

この七七年春は同時に、私たちの学園の第一次将来計画が完成し、本道最初の人文学部が発足した時期でもあった。当時の極限的多忙をどう乗り切ったか、これは今でもほとんど思い出せない。だが『序説』のための私の準備は、そのために大分遅れた。

七七年七月の研究会の時点では、原稿を完成した人は藤井さんただ一人であり、藤井さんの厳しい「スターリン主義的」（？）叱咤に一同肅然とした一日であった。そしてその翌日から、各人の猛然たる努力が始まった。その努力あり、また加藤さんの出版ギリギリまでの支援があつて、『序説』は予定よりひと月遅れの七七年一二月一五日に発売となつ

た。この年はロシア革命六〇周年であった。

『序説』出版の反響をめぐって

この本の反響は、私たちの予想以上に大きかった。第一刷は五千部だったがすぐ二刷、三刷となり、七八年二月末で通算七千部となった。

次に、本に挿められた読書カードで二月一日までに寄せられた反響を加藤さんが分析された資料の一部を紹介しよう。

さて、ここから確認できる第一の点は、読者の圧倒的な声は、まさに加藤さんが言われるように、『序説』が「科学的社会主義の立場から、『スターリン主義』に真正面から取り組んだこと自体に、驚きと、喜びと、共感を示している」という事実であり、『はしがき』で書かれた企図は、ストレートに読者に伝わっていることである。この資料を読んだ私たちは、そして大月書店の皆さんも、等しくこれらの声に喜び、限りなく励まされた。この反響は第一には、日本共産党がスターリン主義に対してはつきりした態度を取らず、全共闘など反共的諸セクトから「スター官」呼ばわりされ、それに理論的・実証的に

十分反論できず、やはり相手に「トロツキスト」という（内容・根拠不明の）悪罵を返すだけ、というこれまでの対応への長い不満を抱えていた、良識ある多くの党員の胸に生じたものだった。たまたま読ませてもらった学生からのカードのひとつは——『現代と思想』などにおける執筆者連の活躍に加えて『スターリン問題』に真つ向から取り組んだ姿勢はととてもすばらしいと思う。さらに内容的に言っても非常に参考になった。これからこのような野心的な企画を組んでもらいたい。たとえば、どんな圧力が加えられても!」（学生、二二歳、福島）

これらのカードのなかでは、加藤氏がまとめているように、当然ながら内容上の問題点の指摘や注文、批判なども多く出されており、三月に札幌で開かれた執筆者の総括会議でも、そこから学び、今後に生かすべき点が多いことを、皆が確認した。なおこれはこの一文を書くために私が今回

資料を見直した時に気づいたことであるが、朝鮮問題を研究されているという方からの読者カードには、次のような文章があった。これは当時の「北朝鮮社会主義」体制に潜む重大な問題点を、『序説』を参考にいち早く洞察されたという点で、刮目すべき先見性を示している。「……朝鮮の社会主義に関する論稿をまとめる作業は、鋭意進めたいと考えております。じつは日本のマスコミはまだ気がついていないようですが、北朝鮮では現在かなり重大な事態が進行しつつあるよう

II. 読者の声（順不同、要約分は一部省略）

- ① 近來の好著（北朝大教員、47才、札幌）
- ② スターリン主義の批判を希望（学生、25才、名古屋）
- ③ 1940月は高い（北朝大、22才、札幌）
- ④ 金銭として面白くはない（学生、22才、大阪）
- ⑤ 希望の事、今後深遠な研究を希望（学生、主として批判的研究）（会社員、44才、横浜）
- ⑥ スターリン主義批判の現代意義、いくつかの重要な問題提起をしてくれて自分には貴重な収穫、科学的社会主義の理論的発展の上で、著者の今後の活躍を期待して待つ（労働組合員、44才、秋田）
- ⑦ 科学的社会主義の立場に立って、スターリン主義の研究として本書に有意義な自分たちは、現実の社会主義が解決する諸問題にあらと積極的にとくすめねばならない（全日自居労働者、20才、金沢）
- ⑧ 大変面白く読んでみた。スターリン批判と赤衛隊の戦後刊行（出版労働者、32才、横浜）
- ⑨ スターリン主義の批判を希望（労働者、50才、東京）
- ⑩ 読刊で、スターリンの対外政策、対コミンテルン政策の解明を期待（日大生、21才、東京）
- ⑪ スターリン主義を正面からとりかかた本書に賛意、我が自身のマルクス主義の全面的な自己点検のために大いに参考、今後より広範な種類の、具体的な討論を（公務員、27才、東京）
- ⑫ 言論・出版の自由を享受している（北朝大教員、54才、札幌）
- ⑬ この研究の対象が未開拓であり、新しい試みとして面白く感じた（北朝大生、22才、札幌）
- ⑭ スターリン主義が「未だ完全な克服されていない現状を憂う社会主義と自由、組織問題など今後とも注意して読む」（労働労働者、30才、川崎）

Ⅱ 読者カードの検討

(以下文章, 均为抄件)

11 基礎 数字について

- ① 1冊半で70巻以上というカードの数は、他書とくらべ、その期に、判子歌、広告田歌等からみて、きわめて多い。
- ② しかも、半々出揃目録としていたカードは相対的に少なく、50巻通の「声」が寄せられていることが特徴的である。
- ③ 年や構成からみても、相対的に乃通なく「声」が寄せられている。
- ④ これを横断的に追いかけてみると、院生・大政官など知識人へ属する層、および、家族組合・政治団体など現場で「悩んでいる」層にふまわっていることがうかがえる。
- ⑤ 地域別には、若者集団の属する北道連・石川が「さか」に多い。これを除けば、中国・四国・九州は鈍いが、あとは普遍にさかじわっている。大・中・都市が多く、小・都市・農村部が少ないうちは、上記の読者傾向と照らす。
- ⑥ 購入手段では、朝日の広告、店頭が圧倒的。昔にもさかぬい、「市販」は、読書家のベネッセ・新聞情報部に名附が小・小で載、ただけのもの。中野氏の著作の注、藤井氏の論文の注で「得ていた」人もあり、その間への張さか「うか」がわれる。

(2) 全通に於いて

- ① 読者の圧倒的声か。科学的社会主義の立場から、フランクソン主義に真正面からとりかかると自体に驚かす事かと、反感を示している。「もしがさで」が代表の全国は、スタートに読者に伝わっている。
- ② 大月書店が受けたことへの支持、今後はこちらに方向の企画を希望する声も多い。販売された読者のものとて「さか」正史の現代版、おかしな今日の政治状況の中での良心の高さがうかがえる。
- ③ 大月書店に「おかしな」に「おかしな」散らばった「おかしな」など、読者を惹きつける、なにかに手を打てると思われ。
- ④ 広告問題、今日の政治状況にに関連して「言論の自由を争ってほしい」「押しに屈することなく、等、出版者が「おかしな」

(3) 内容上の意義について

- ① 未開拓の内題に真正面からとりくんだ点への評価 (上記①)は高い。「内題提起」としての意義は、ほぼ全篇に渡り現れている。
- ② 「スターン主義」を「現在の内題」とする視点も、鋭く現れている。
- ③ 自らの考えについて、悩んでいたところとの関連で「おぼれており、その意味で、著者と読者の「対話」が」おこなわれている。
- ④ 「スターン内題の深遠さ」を、あらためて整理されてよくわかった、という声も多い。自分の考えていたマルクス主義、「科学的社会主義」を「自己点検」というという交差を「うみだした」。
- ⑤ 今後の全面的検討のための重要な一石、という評価も、ほぼ全篇のわたり通りに現れている。ただ、並に、そのことが、著者および本書全体への内題上の具体的な意見や批判の声を反映させているようにも思われる。
- ⑥ 個別には、「内題」の存在、おぼれてあげた「著者」の「声」がみられ

(4) 内容上の問題点について

① 批判点と

- a) スターリン個人に内閣が結成決定されていってはいないか？
 b) 正史が背景を食ひ、正史の中に位置づける視点が弱いの？
 c) 「科学的社会主義」の立場からかかれた意識は認めるか？
 このほか「正統派」の外で、また、正史年や政治年「字内の
 世界」では「常識」とされていたものをこえていかな、な
 りは「常識ない」ではないか？

といった点に集中している。これらは、本書の編集作業の中で
手起されていった「声」であり、講座にうけとめる必要がある。

② そのほか、

- a) マルクス、エンゲルス → トーニー → ロサバインズ → 現代
 という社会主義者の中で、位置づけが弱く、特に、
 「トニー主義」として、マルクスに準拠し、戦年(戦前)の
 社会主義的変遷を主張する。戦内
- b) 先行研究、当該国史としての研究史としての
 言及の弱さ(当初の案にあった「トニー・ロサバインズ・
 批判派」が「マルクス批判以降のスターン批判派」
 が、カチと組織の内部で対立した)と云ふこと。

に於いて、これも手紙とあり、声」があった。

- ② ②のような、内閣提起のものもうひとつない声
 は例外に属する。感情移入しすぎた声には注意。
 ③ 残された検討点の言は、上記の声以外では、あき
 び出てはいない。わすれず。
 a) 在米東洋館についても同様の検討を。
 b) 対外政策やコミンテルンとの関係、大祖国戦争の評価、
 この点は、やや「復讐」的な点である。

(5) 費本、宣伝、定価等について

- ① 他者の読書カードによつられる造本・体裁等についての「声」は全くない。これは、造本の成功を意味すること共に、いかに本書が「内容」でよまれたりしているを示している。
- ② 同様に、他書に比して、また、分量からして、相対的に高い定価(1800円、タツ研)の今後研究費を捻出する意もあってつけたにもかかわらず、「高すぎる」という声は、わずかに一通。この種の本が、本来読む「価値」においてではなく「使用価値」において普及できることの証左である。
- ③ 「宣伝」については、「市販」等にながれたために一ヶ月の責任は一切なにもかかわらずに、一ヶ月が「自主規制」していろいろではないかという「失策」の一部に生じている。しかし、相対的に少ない「宣伝量」にもかかわらず、「付コミ」等では普及している平価が察せられる。

(6) 今後の企画への希望等

- ① 本書に録せし、文二、三の企画の「思想」が少い
- ② その上、(4)での「内閣史」は、改訂された検討より「資料」が必要
- ③ 「スターリン全集」再刊・完結、「スターリン批判」など自著「荒」等の再刊、資料、文獻等々をなす形で出してほしいという声も相当数にのぼる。
- ④ 本書刊行の期に、具体的に自分の研究を発表しようという研究者も出てきた（『文』の上原、九山、川崎、山本以外にも宮崎、横代など）。従って研究体制も期待が大きい。
- ⑤ 田口氏「失道革命とスターリン批判」(30)、カリン、ローク、コムニズムと国家(1977)、エラシムフ「スターリン政策の石炭」(1978)などは、本書の著者において、また、また読者層も一層拡大した。

に思われるのです。情報が少ないだけに基本的な分析をしつかりやるが必要になっています。『スターリン問題』は、その点で助けになると思います。朝鮮の政治的風土の特異性や革命の主体勢力の特殊性といったことを含めて、この国の社会主義の過渡的性格や展望を論じることができればと願っています。ただし、大変な大仕事になることはまちがいありません。」

このカードが書かれたのは一九七七年一月、つまり横田めぐみさんが拉致された一ヵ月後である。そして藤井さんと私は、その二六年後にこの東洋における恐怖のスターリン主義体制と、その国家機関が行った「人道に対する罪」としての拉致について、共同の著書を書くことになるのであるが。

識者による本書への批評の第一の特徴は、大体のところ、この本が出されたことをひとつの「事件」として、すなわち大月のような共産党系又はそれに近い）出版社がこのテーマの本を出したこととその今日的意義は積極的にあるいは一定限度理解し評価しながらも、一種の「戸惑い」（加藤さん）を持っているように観じられること、したがってあまり多言せず、概して「慎重」であること、に

あつた。その上で、主として本書の内容について、さまざまな立場からいくつかの問題点が指摘された。例えば和田春樹氏は、朝日新聞七八年二月二一日夕刊に載せた「スターリン主義の研究」のなかで、欧米でのこの分野での急速な進歩を述べたのち、仏伊の共産党系の学者エレンステインの『スターリン現象の歴史』とボッフアの『ソ連史』について、

これらの出現が両党のユーロコミュニズムへの傾倒から生じているが、「資料のきわめ方はなお浅いように思えること」、そしてわが国で昨年末に出た『序説』は、「大きく見れば、エレンステイン、ボッフアの流れの中に位置づけられるであろう」と記している。だが、「資料のきわめ方」が、無条件にその歴史認識の正しさを保証するものではないことは、和田氏の北朝鮮による拉致問題での認識結果等が証明している通りであり、その点については、中野・藤井編著『拉致・国家・人権』（大村書店、二〇〇三年）を参照されたい。

また東大新聞の七八年二月六日号の内田健二氏による本書の書評は、かなりの長文で、その労は謝すべきであるが、そこで氏は、私たちの研究方法について、「スターリン論文等からの引用を体系化しつつレーニンのそ

れと対比させるといふ、従来のマルクス主義の立場にみられる因襲的な方法である」と述べ、「歴史認識としては、指導者及びその思想から歴史を解釈する指導者史観ないし前衛党史観（これ自体がスターリン主義の遺産である）」と相通じることになろう。」と私たちを批判する。

こうした批評は、ある範囲では素直に受容できるが、それと同時に私は、こうした歴史家の歴史の現実に対する、またその現実に対面して発言している人間の内面についての歴史家としての想像力の貧困さを、哀れと感ぜざるを得ない。もっぱらマルクスとレーニンを基準としてスターリンを批判するだけ、と『序説』を評する論者は他に何人もいたが、ではこの時点で、これ以外の方法でスターリンを論ずる本を、大月がどうして刊行できたであろうか。また党員科学者が、スターリンの言説と行動、その政策がマルクスやレーニンのそれとどう違うか、をまず解明する（みずからにも！）ことなしに、どのようにしてスターリン主義の批判を先に進められるであろうか、そしてそれを出版の形で党員の若い研究者たちが公然と表明すること、これは当時の日本共産党員とその周辺の人びとの思想

世界変革への、ささやかにして不可欠な「序曲」ではなかったか？ こうした最小限度の人間の想像力が働かない歴史家は、やがて訪れるソ連の崩壊期に、みずからの歴史観の貧困を痛切に味うことになるのである。この点で私がつともすつきりと、そして嬉しく受け止めた書評は、東大経済系院生の伊達一氏による東大生協「ほん」に載った書評であつた。先に進もう。私たちの多くは、したがって党中央の『序説』への反応を、固唾を飲んで見守っていた。ところが普通、『赤旗』には年末に大月書店などがその年に出版した書籍の一覧が掲載されるが、そこでは奇妙なことに、私たちの『序説』の名だけがなかった。それである読書カードが「……本書は恐らく、一つの画期をなすものになっていくでしょう。本書の問題提起をさけて通ることはできないはずです。田口氏の『現代と思想』における論文でさえ、最後は完全に逃げていくとはいえず、そのことを明示しています。……にもかかわらず、貴店が本腰を入れて本書を宣伝しないことは、悲劇のうわめりだと思えます。……」（大学教官三〇歳、岩手）と記したのは、恐らくこの奇妙な出版案内を見て、であろう。

私たちもこれにはいささか驚いた。真夏の夜には幽霊が出現するが、真冬の赤旗紙上からは実在の書籍が消える。もちろんこれは大月のせいではなく、日本的「スターリン現象」のひとつ、その『序説』であつた。翌年の一月に私が北大生協の学生書房に立ち寄つてその売り上げ状況を聞こうと思ふと中を覗くと、誰かが平積みになっている『序説』を手にして、まわりの学生たちに、「これはひどいものだよ」と話している最中であつた。よく見ると後ろ向きその人物は、顔見知りの党の道委員だつた。一瞬、彼にその理由を聞いただそうかと思つたが、後の面倒を考えてそれは止めた。この時期は、党内民主主義のあり方をめぐつて、緊張した局面がつぎつぎに起こつた時期であつた。田口富久治さんが『現代と思想』の第二九号（七七年九月）に書いた「先進国革命と前衛党組織論」は宮本顕治氏の怒りを買ひ、関原利一郎氏にその批判論文を書かせたが、『現代と思想』は七七年一月に田口さん、藤井さんと私を含む七名の学者による「スターリン主義の検討」というシンポジウム（田口氏の司会）の第一回を開催し、同誌の三〇号に掲載した。

私は七八年の二月始め、久しぶりにスキー

をしようとニセコのスキー場に行ったが、予約のホテルに着いて間もなく、電話に呼び出され、出てみると『週刊新潮』の記者で、私に会いたい、という。断つたがどうしても聞きたいことがあるといつて退かないので、一応会うことにした。やがてはるばる東京からニセコにまで来た記者は、袴田問題や田口論文、藤井さんや私の論文、上述のシンポなどを引きながら、日本共産党の党内民主主義についての私のコメントを執拗に求めてきた。私は一般論としての党内民主主義についてはある程度応じたが、黨員学者として、日本の党の状況についてこういう場でコメントすることは、当然堅く断つた。間もなく『週刊新潮』の二月一六日号に、「もう一つの『袴田事件』といわれる国立大教授『黨員群』の次元が高い『造反』」と題する記事が載つた。恐らくはこうしたさまざまな圧力（大月書店側を含む）の力学的結果として、『序説』の広告は、漸く二月一三日の『赤旗』に掲載された。そこには、「マルクス主義と『スターリン主義』を同一視する反共理論を批判し、自由と民主主義と人間解放の思想である科学的社会主義の立場から、『スターリン主義』の問題に真正面から取り組み、『現代史

の謎』とされる未開拓の学問領域に大胆に挑戦する」という（多分加藤さん作成の）コメントが付けられていた。その頃から、あちこちで『序説』の研究会が開かれた。二月の十一、二日には札幌唯研の総会の後の研究会で、本書が取り上げられた。三月一〇日から一日には、執筆者集団と加藤さんが札幌の定山溪温泉に集まって、出版記念会を開き、出版の成功を喜ぶとともに、今後の共同研究の深化と、創意的な出版活動の展開に協力していく方向を確認し合った。翌日には、二つの大学はじめ執筆者と親しい友人たちが市内に集まって、討論と懇親の夕べが持たれた。

さらに三月二日には、東京唯研の主催で「スターリン主義をめぐる特別研究会」が水道橋の労音会館で開かれ、藤井さんと私が講師と呼ばれ、盛会のように討論が交わされた。この集会には、犬丸義一氏が参加したが、彼の『序説』評価はかなり否定的で、それをめぐってやや烈しく討論した記憶がある。彼は、例えば私の美学論文は高く評価するが、『序説』の序章は、歴史の論文以前、大学生の作文程度だ、というような発言をした。これは、学者の世界ではかならず出てくる意見であるが、もともとソ連史や各国の共

産主義運動史の専門的研究者ではない、その意味では「素人」がほとんどである私たちが、今なぜ非力を振り絞ってこういう課題に取り組んだのか、そして犬丸さんのような歴史家は、なぜ素人にこういう難問題を任せて自分では論じようとしなかったのか、という私たちの反論には、満足な答えは遂に出されなかった。

こういう御用歴史家の批評にかかわらず、私たちの本は、日本の党と黨員の、また市民の思想世界を幾分なりとも変えるのに貢献した。

これまで上からさながら自然法則のように語られてきた共産党の性格や組織原則が、いかに歴史のなかで党の支配集団に都合のよいように（特にスターリン時代に）変更もされてきたのか、本物のトロツキイとトロツキストは本当に人民の敵だったのか、スターリンは、どんな人間だったのか、大粛清の事実などについて、『序説』はこれまでの党内での通念をかなり破壊するのに役立った。その一つの現れとして、この本が出たあとでは、大学闘争などでの暴力集団を『赤旗』が「トロツキスト」と呼ぶこれまでの習慣が次第に見られなくなった、という「つぶやき」より大きい声があちこちから聞こえてきたが、それ

は少なくとも一部分は、この本の成果のひとつであろう。

その問題について、私は自分が書いた第一章「スターリン主義」とは何かのなかで、党をみずからスターリニストの水準に貶めるものでしかないこのようなジャルゴンの使用を、この本の出版以後はきっぱりとなくしたい、という強い決意をもって、次のように述べておいた。

「——トロツキイの思想や理論とは全く無縁な個人や集団に対して『トロツキスト』の語を用いることはスターリン主義的思考・用語法の悪しき遺産であり、他方このことは、自らを『スターリニスト』と呼べる正当な『理由』をあたえるだけであること。またそもそも、レーニンがスターリン主義との最後の闘争において心からの信頼を寄せたこの人物の名を、人民に対する挑発と犯罪すべての代名詞に変えたスターリンの用語法を今なお踏襲することは、マルクス主義を再びスターリン主義化するとともに、レーニンの洞察と遺志に対する大きな侮辱ともなるであろう。（『トロツキイ問題』については、本書第三章の佐々木論

文を参照のこと)。

もちろん、永年の用語法の放棄にはかなりの抵抗があり、『赤旗』七八年五月一二日は「日本におけるトロツキストとの闘いの歴史的意義」と題する現代史研究者大野正一氏の論文を載せているが、そこには私たちの提出した問題に対する彼自身の言葉による回答は、なにもない。

またこの年七月の党創立五六周年記念講演会での講演「日本共産党の路線と展望」で不破書記局長は、おそらく本書や田口さんの著



なかの・つぞう◎一九三〇年、旭川に生まれる。一九五三年、北海道大学文学部史学科卒業。一九六二年、同大学大学院文学研究科博士課程単位習得退学。一九六三年、札幌短期大学専任講師。一九六八年、札幌商科大学助教授。一九九九年、札幌学院大学定年退職。『マルクス主義と人間の自由』(青木書店、一九七七年)、『マルクス主義の現代的探求』(青木書店、一九七九年)、『生活過程論の射程』(窓社、一九八九年)、『社会主義像の転回』(三一書房、一九九五年)など。主な共著は『トロツキーとゴルバチョフ』(窓社、一九八七年)、『拉致・国家・人権』(大村書店、二〇〇三年)など著作多数。『中野徹三教授略歴・主要業績目録』(札幌学院大学人文学会紀要)六七号、二〇〇〇年)も参照。

作を念頭において、「ある論者は、たとえばソ連におけるスターリン時代を研究して、スターリンが犯した誤りの大きさに、いわば度を失い、それをくり返さないためということ」で、科学的社会主義の中心問題である党の役割の否定、党の弱体化を事実上となえる議論を展開していますが、この議論の誤りも明白であります。スターリンの問題にしても、スターリンの誤りは、根本的には科学的社会主義の原則的立場から逸脱した誤りであります。」と述べて、彼自身にとつては「スターリン問題」などはさして驚くに値しないかのように振る舞っていたが、ソ連崩壊後はこの「科学的社会主義の原則的立場から逸脱した誤り」により、ソ連は実は「社会主義社会には到達し得ないまま、その解体を迎えた」国だった、とまで語るに至る(九四年の二〇回大会)。この言明は、それまでの党の公式見解の、何の根拠説明なしの、恥知らずの豹変だった。

そして今書記局長を離れた彼は、今年の二月号の『前衛』から、「スターリン秘史 巨悪の成立と展開」と題する「大論文」を、既に九回にわたって、えんえんと連載し続けている——まるで彼がこれらの事実をはじめて

解明したかの様子で。

その第六章は、三〇年代の「大テロル」におけるスターリンについて、「当面は、自分の絶対専制の指導体制を、党と国家、さらに国際的な運動体のなかに確立することを目的として——その邪悪な目的のために、社会主義と革命の事業で志を共にしてきた数十万あるいは百万を超える同志たちに無実の罪をなすり付けてこれを殺戮し、——一国の共産党さえもあえて根絶やしにする。これは、社会主義・共産主義と革命の精神がひとかけらでも心に残っているものであつたら、絶対にやりえない残虐な蛮行でした。ここでは、スターリンは、文字通りの専制主義と覇権主義の『巨悪』への変貌を遂げています。私は、このことをきつぱりと確認することは、スターリンの政策と行動をたどるうえで、きわめて重要だと考えています。——」と記している。また彼はそのなかで、自分が党本部で行った二〇一二年の『古典教室』の講義では「スターリンが『マルクス・レーニン主義』の名の下に提唱したものは、『マルクス、エンゲルス以来の科学的社会主義の理論を自分の都合のよいようにつくりかえた、『似て非なる理論体系』だったことを指摘し、その主

な特徴をあげました（「マルクス、エンゲルス以後の理論史」本誌二〇一二年七月号）。』とも述べている。

いかに遅れたとはいえ、不破氏が今スターリン問題を取りあげ、中央の党勤務員に講義することは、しないよりはずっとよいことである。だが、不破氏に同時に必要なことは、これまで自分が主張してきた多くの誤り（一例として、マルクス等の「独裁」の訳語を歴史の無知にもとづいて「執権」に換え、それを党の「決定」として出版社や著者に押しつけてきた、等）すべてを、今スターリンを断罪する場合と同じく厳しく点検し、その反省を天下に明らかにすること、であろう。これができなければ、この不破型の「スターリン問題研究」は、彼の時代遅れの責任回避、逃げ、でしかありえない。

スターリン問題の研究と発言は、共産党員の学者にとつては、政治と学問の時には烈しく衝突する場での、彼の全人格を賭けた選択の問題であった。

この選択は、いわゆる「組織原則」のため、「連帯した選択」には容易に成り難い。しかし私は、ギリギリの条件で『序説』が出せた七〇年代には、あるいは私たちのより強く広

く深い協働と理性によって、さらに進んだ党内民主主義を勝ち取ってこの党を発展させ、わが国の政治と社会を今よりもいつそうの高みへと前進させ得た選択肢があったのではないか？ という疑問を、まだ完全には棄て切れない。

しかも私たちは、七〇年代の二〇年前の古典スターリン主義時代に、スターリンからいわゆる極左冒険主義Ⅱ武装闘争を押し付けられ、その結果惨憺たる敗北を喫して壊滅状態となり、そしてその後間もなくのスターリン批判とその衝撃を、世界共産主義運動全体のなかで鮮烈に体験したはずだった。

この体験を、なぜ運動により早く、より強力に生かせなかったのか？ そして我々はいま、何を反省すべきなのか。

こんなことを書く友人から、君は一九八四年、すなわちまさにかの「オーウェルの年」にその党から不当に除名されたというのに、まだそんな夢を追っているのか、と笑われるに違いない。

だが私は、機会があれば、私自身が直面したスターリン問題とスターリン主義体験とを、そしてそれとの対決を通じての私のマルクス主義研究の理論史的・実践的整理と反省

とを、自分なりにまとめてみたい、と考えており、その準備を進めている。それは、思想を糧に生きる一人の人間の、責任であり義務である。そして『序説』までのその概要は、小島氏のご好意により、本誌の次号で果たす予定である。関連して、学生時代から一九八四年までの私の個人史については、三年ほど前から、小樽商大の今西一教授による私への連続インタビューがあり、小樽商科大学の『商学討究』にこれまで三回にわたって掲載されているので、本稿と合わせてご参照頂ければ、幸いである（「北大・イールズ闘争から白鳥事件まで」『商学討究』第六一卷第四号、二〇一一年三月、「北大・一九五〇年代の政治と学問」第六二巻第一号、二〇一一年七月、「札幌商科大学創設期の前後」第六二巻第四号、二〇一二年三月。なお未完であり、最終回は来年春に刊行予定。）。